徳島市埋蔵文化財発掘調査概要6

1996. 3

徳島市教育委員会

徳島市埋蔵文化財発掘調査概要6　正誤表

訂正箇所	誤	正
挿図目次　Ⅰ　矢野遺跡	第3図　竪穴住居跡SA01(2,3),SA02(4)	第3図　竪穴住居跡SA03出土鉄製品
挿図目次　Ⅰ　矢野遺跡	第4図　SA03(5～15,17,18),SA04(16,19),SA05(20,21),SA06(22～26),SA07(27,28)出土遺物	SA01(2,3),SA02(4),SA03(5～15,17,18),SA04(16,19),SA05(20,21),SA06(22～26),SA07(27,28)出土遺物
挿図目次　Ⅲ　庄遺跡	第6図　溝SD01(1),SD02(6),SD04(7,8),土壌SA01(2～4),SA02(5),土器柱遺SI01(9,10)出土遺物	第6図　土器棺SI01
挿図目次　Ⅲ　庄遺跡	第7図　土器棺SI01	第7図　溝SD01(1),SD02(6),SD04(7,8),土壌SA01(2～4),SA02(5),土器棺SI01(9,10)出土遺物
挿図目次　Ⅲ　庄遺跡	第8図　竪穴住居SA01出土遺物	第8図　竪穴住居跡SA01出土遺物
挿図目次　Ⅲ　庄遺跡	第9図　竪穴住居SA01出土遺物	第9図　竪穴住居跡SA01出土遺物
挿図目次　Ⅲ　庄遺跡	第10図　竪穴住居SA01出土遺物	第10図　竪穴住居跡SA01出土遺物
挿図目次　Ⅲ　庄遺跡	第11図　竪穴住居SA01出土遺物	第11図　竪穴住居跡SA01出土遺物
挿図目次　Ⅳ　徳島城跡	図版3　上：徳島中央公園親水広場整備事業区域遠景	図版3　上：徳島中央公園親水広場整備事業工事区域遠景
挿図目次　Ⅳ　徳島城跡	図版3　下：整備が進む徳島中央公園親水広場	図版3　下：整備が進む徳島中央公園親水広場遠景
P3　29行目	8	8cm
P3　31行目	鉢(25,27)	鉢(25,26)
P20　26行目	待たなければならなず	待たなければならず
P26　第4図キャプション	第1層（包含層）出土遺物	包含層（第1層）出土遺物
P27　第4図キャプション	第1層（包含層）出土遺物	包含層（第1層）出土遺物
P28　19行目	40（三）	40cm
P28　26行目	頸	頸
P29　第7図キャプション	SD04(7,8)	SD05(7,8)
P30　5行目	建物であろうか	建物であろうか。
P34　7行目	～37）がある。	～37),鞴の羽口（図版18-38)がある。
P34　22行目	1.9-2.1m	2.1-2.2m
P34　32行目	根石を	根石の
P37　第14図キャプション	SP01(1),SP03(3,5,7),・・・・	SP01(1),SP02(2),SP03(3,5,7),・・・
P38　15行目	それぞれれが	それぞれが
P46　3行目	平成元年（198-1989)	平成元年（1988-1989)
写真図版　Ⅲ　庄遺跡　図版4　下	東より	西より
写真図版　Ⅲ　庄遺跡　図版5　上	堀立柱建物	掘立柱建物
写真図版　Ⅲ　庄遺跡　図版5　下	堀立柱建物	掘立柱建物
写真図版　Ⅲ　庄遺跡　図版6　上	東ヨリ	東より
写真図版　Ⅲ　庄遺跡　図版18　右下	（番号なし）	38

徳島市埋蔵文化財発掘調査概要6

1996. 3

徳島市教育委員会

序　　文

万葉の時代から知られる清冽な吉野川の水と眉山の豊かな緑に恵まれた徳島市には，先人が残した悠久の歴史を証す文化遺産が数多く遺存しております。

都市開発事業の波はこれらの文化遺産にも大きな影響を与えていますが，発掘調査により明らかにされる数々の埋蔵文化財からは，かつて徳島の地に生活した先達の心を読み取ることができます。これらを学び受け継ぐことは，歴史・文化・自然を生かした創造性の高いまちづくりに通ずるものと思われます。

本市では，開発と文化財保護の両者を円滑に調和すべく発掘調査を実施しており，多大な成果を得ています。

本書は発掘調査の成果を一冊の報告書としてまとめたものですが，生涯学習および歴史教育，さらには学術研究の場に微力なりとも寄与することができれば，幸甚かと存じます。

最後になりましたが，発掘調査を実施するにあたり，多大な御理解と御協力を賜りました関係各位に深く感謝申し上げます。

1996年３月31日

徳島市教育委員会

教育長　小　林　　實

例　　言

1　本書は1991～1995年に徳島市内の埋蔵文化財包蔵地における諸開発事業に伴い実施した緊急発掘調査等の内，4遺跡4件についての概要報告書である。

2　報告の対象となった遺跡名，調査場所，調査期間，調査地については抄録に記載した。

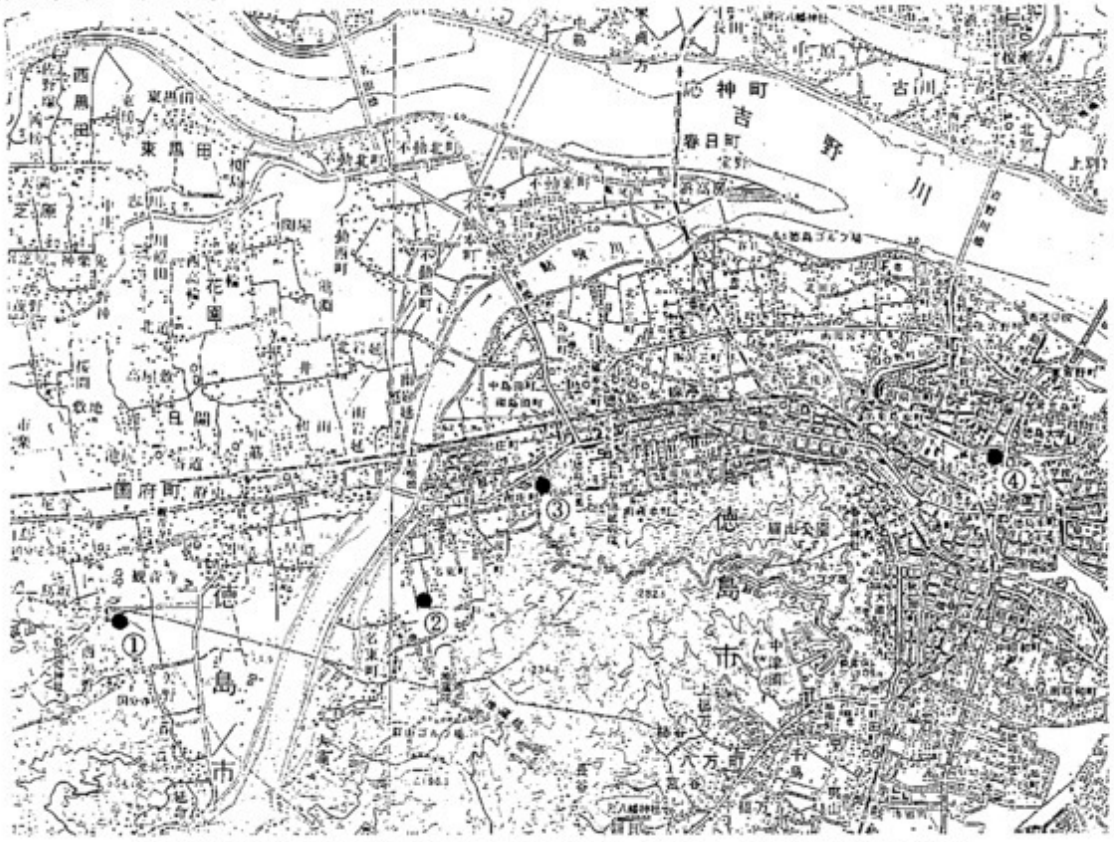
3　発掘調査は徳島市教育委員会が主体となり，本書に係る経費は徳島市教育委員会が負担した。

4　出土遺物，図面，写真の整理等報告書作成に関する作業において，下記の方々の御協力を得た。記して感謝したい。

佐伯俊裕，高木　淳，市川欣也，倉佐晃次，中野勝美，山口文子
折野絵美，山本宗昭，宇埜正浩，中本貞代，青木健司，藤村友彦

5　本書に収録した遺物および記録類は，すべて徳島市教育委員会社会教育課において収蔵，保管する。

6　本書の作成には調査担当者が分担して執筆し，目次にその文責を明らかにした。なお編集は勝浦康守が行った。



調査地位置図（国土地理院発行1/50,000「徳島」「川島」縮尺使用）

①矢野遺跡　②名東遺跡　③庄遺跡　④徳島城跡

目　　次

序文

例言

目次

本文目次

I　矢野遺跡（農業用水路改良工事）……（三宅良明）……1

II　名東遺跡（マンション建設工事）……（勝浦康守）……13

III　庄遺跡（学校施設建設工事）……（勝浦）……23

IV　徳島城跡（確認調査）……（勝浦）……41

挿図図版

写真図版

挿図図版

I　**矢野遺跡**（農業用水路改良工事）

第1図　調査地位置図
第2図　検出遺構図
第3図　竪穴住居跡SA01(2,3),SA02(4)
第4図　SA03(5～15,17,18),SA04(16,19),SA05(20,21),SA06(22～26),SA07(27,28)出土遺物
第5図　溝SD02出土遺物
第6図　溝SD02出土遺物
第7図　溝SD02出土遺物
第8図　溝SD02出土遺物
第9図　溝SD02出土遺物

II　**名東遺跡**（マンション建設工事）

第1図　調査地位置図
第2図　遺構配置図および断面図
第3図　溝SD01出土遺物
第4図　溝SD01出土斎串
第5図　溝SD03出土遺物
第6図　溝SD04出土遺物

III　**庄遺跡**（学校施設建設工事）

第1図　調査地位置図
第2図　基本層序
第3図　遺構配置図
第4図　包含層（第1層）出土遺物
第5図　包含層（第1層）出土遺物
第6図　溝SD01(1),SD02(6),SD04(7,8)土壙SK01(2～4),SK02(5),土器棺墓SI01(9,10)出土遺物
第7図　土器棺SI01
第8図　竪穴住居SA01出土遺物
第9図　竪穴住居SA01出土遺物
第10図　竪穴住居SA02出土遺物
第11図　竪穴住居SA02出土遺物
第12図　掘立柱建物SB01,SB02
第13図　掘立柱建物SB03
第14図　SP01(1),SP02(2),SP03(3,5,7),SP04(4),SP05(6),SP06(8),SP07(9),SP08(10,11),SK03(13～15),SK04(12),SK05(16～28)出土遺物

IV　**徳島城跡**（確認調査）

第1図　調査地位置図
第2図　調査地概略図（地形状況は工事施工前）
第3図　断面図,平面図(一部),出土遺物

写真図版

I　**矢野遺跡**（農業用水路改良工事）

図版1　上：竪穴住居跡SA01
　　下：竪穴住居跡SA02
図版2　上：竪穴住居跡SA03
　　下：竪穴住居跡SA04
図版3　上：竪穴住居跡SA04,06
　　下：竪穴住居跡SA05
図版4　上：溝SD02遺物出土状況
　　下：溝SD02遺物出土状況
図版5　竪穴住居跡SA01(2),SA02(4),SA03(9,10,13),SA04(16,19)出土遺物
図版6　竪穴住居跡SA05(20,21),06(24),07(27,28)出土遺物
図版7　溝SD02出土遺物
図版8　溝SD02出土遺物
図版9　溝SD02出土遺物
図版10　竪穴住居跡SA03(1),溝SD02出土遺物

II　名東遺跡（マンション建設工事）

図版１　上：調査地全景
　　下：溝SD01～04検出状況
図版２　上：溝SD01断面土層
　　下：溝SD02検出状況
図版３　上：溝SD01遺物出土状況
　　（土師器坏と弥生土器高坏の混在）
　　下：溝SD01遺物出土状況
　　（土師器小皿）
図版４　上：溝SD04遺物出土状況
　　下：溝SD04遺物出土状況
図版５　溝SD01出土遺物
図版６　溝SD01出土遺物
図版７　溝SD03出土遺物
図版８　溝SD04出土遺物
図版９　溝SD04出土遺物

III　庄遺跡（学校施設建設工事）

図版１　上：調査地全景
　　下：溝SD02～05検出状況
図版２　上：土壙SK01遺物検出状況
　　下：土器棺SI01検出状況
図版３　上：土器棺SI01断ち割り状況
　　下：土器棺SI01完掘状況
図版４　上：掘立柱建物SB01～03検出状況
　　下：掘立柱建物SB01～03検出状況
図版５　上：掘立柱建物SB03SP09根石検出状況
　　下：掘立柱建物SB01SP03根石検出状況
図版６　上：竪穴住居跡SA01,02検出状況
　　下：竪穴住居跡SA01,02検出状況
図版７　包含層（第１層）出土遺物
図版８　包含層（第１層）出土遺物
図版９　包含層（第１層）出土遺物
図版10　溝SD01(1),SD02(7,8),土壙SK01(2～4)，SK02(5)出土遺物
図版11　土器棺SI01出土遺物
図版12　竪穴住居跡SA01出土遺物
図版13　竪穴住居跡SA01出土遺物
図版14　竪穴住居跡SA01出土遺物
図版15　竪穴住居跡SA01出土遺物
図版16　竪穴住居跡SA02出土遺物
図版17　竪穴住居跡SA02出土遺物
図版18　竪穴住居跡SA02出土遺物
図版19　土壙SK05(16～26,28),SK03(13),SP08(10,11)出土遺物

IV　徳島城跡（確認調査）

図版１　御山下絵図(部分)寛政８年(1796)
図版２　御山下島分絵図　徳島(部分)安政年間（1854～1860）
図版３　上：徳島中央公園親水広場整備事業区域遠景
　　下：整備が進む徳島中央公園親水広場
図版４　上：第１トレンチ掘削状況
　　下：第１トレンチ断面
図版５　上：第１トレンチ石垣石検出状況
　　下：第１トレンチ石垣石検出状況
図版６　上：第２トレンチ崩壊石？検出状況（明治以降）
　　下：第２トレンチ掘削状況
図版７　出土遺物（１：第1トレンチ裏込，２：第1トレンチ裏込崩壊土）

報告書抄録

ふりがな	とくしましまいぞうぶんかざいはっくつちょうさがいよう
書名	徳島市埋蔵文化財発掘調査概要
副書名	
巻次	6
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	三宅良明・勝浦康守
編集機関	徳島市教育委員会
所在地	〒770 徳島市幸町2丁目5番地　TEL　0886−21−5418
発行年月日	西暦　1996年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
矢野（やの）	徳島県徳島市 国府町（こくふちょう）	36201	−	34度 3分 32秒	134度 28分 19秒	19911120〜 19911227	220	農業用水路改良工事に伴う事前調査
名東（みょうどう）	徳島県徳島市 名東町（みょうどうちょう）	36201	−	34度 3分 40秒	134度 30分 15秒	19941221〜 19950120	200	マンション建設に伴う事前調査
庄（しょう）	徳島県徳島市 庄町（しょうまち）	36201	−	34度 4分 15秒	134度 30分 51秒	19930801〜 19931015	1,100	学校施設建設に伴う事前調査
徳島城跡（とくしまじょうせき）	徳島県徳島市 徳島町（とくしまちょう）	36201	−	34度 4分 23秒	134度 33分 34秒	19950610〜 19950612	10	公園整備事業に伴う確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
矢野	集落跡	弥生	竪穴住居跡 溝	弥生土器 鉄製品 サヌカイト剥片	
名東	集落跡	弥生 古墳 平安〜鎌倉	溝 溝 溝	弥生土器 須恵器 土師器・黒色土器	
庄	集落跡 官衙跡	弥生 奈良	溝 土壙・土器棺 竪穴住居・溝・土壙	弥生土器 土師器・須恵器 製塩土器・鞴の羽口	
徳島城跡	城館跡	近世	徳島城総構石垣	陶器 軒丸瓦	

Ⅰ　矢野遺跡（農業用水路改良工事）

1　調査に至る経緯等

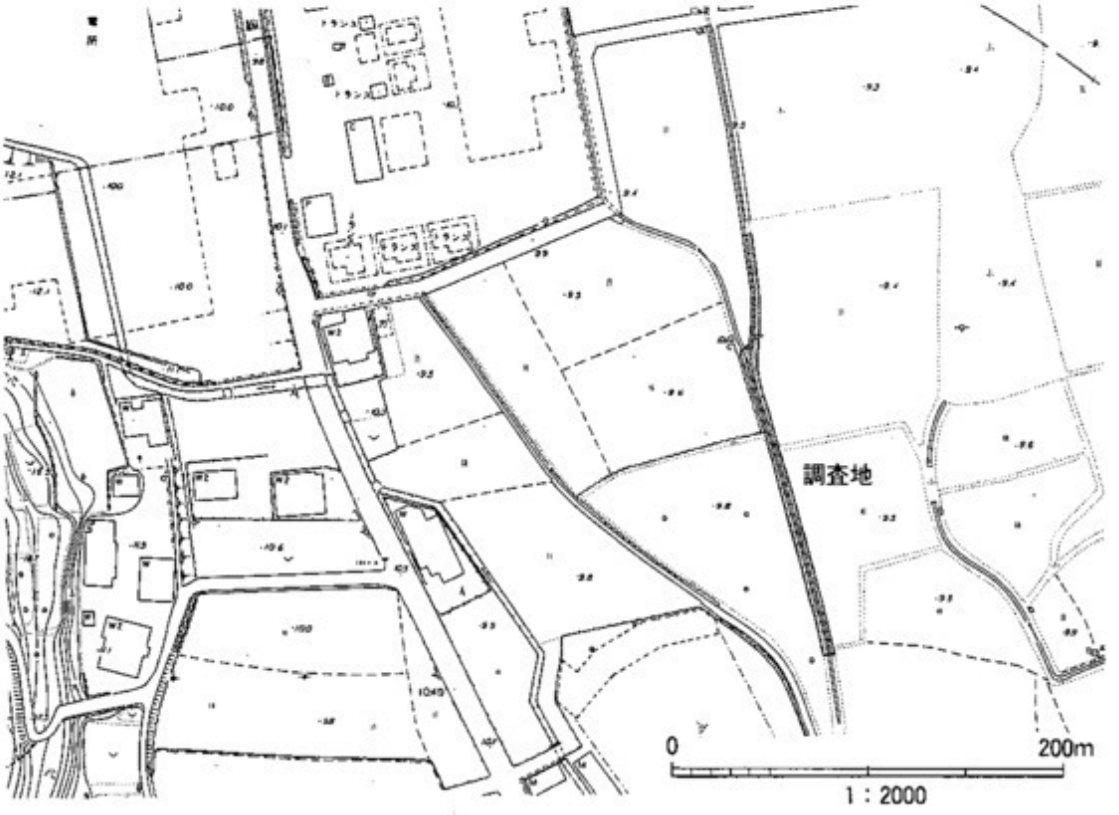
矢野遺跡は，鮎喰川西岸の国府町矢野を中心に所在する，弥生時代を中心とした県下でも最大級の集落遺跡である。本遺跡は，鮎喰川水系の旧河川の沖積作用によって形成された標高10m前後の自然堤防上に立地している。

ここに報告する概要は，平成３（1991）年度の農業用水路改良工事に先立ち実施した発掘調査である。調査地は，四国電力国府変電所の南東に広がる水田地帯を流れる用水路の一部分で，変電所から40～130mのところに位置する（第１図）。調査は，重機で既存水路の堆積土砂の除去ならびに水路肩部分の表土，旧水田土壌等の掘削を行い，11月20日～12月27日にかけて，工事施工面積約220㎡の全面発掘を実施した。

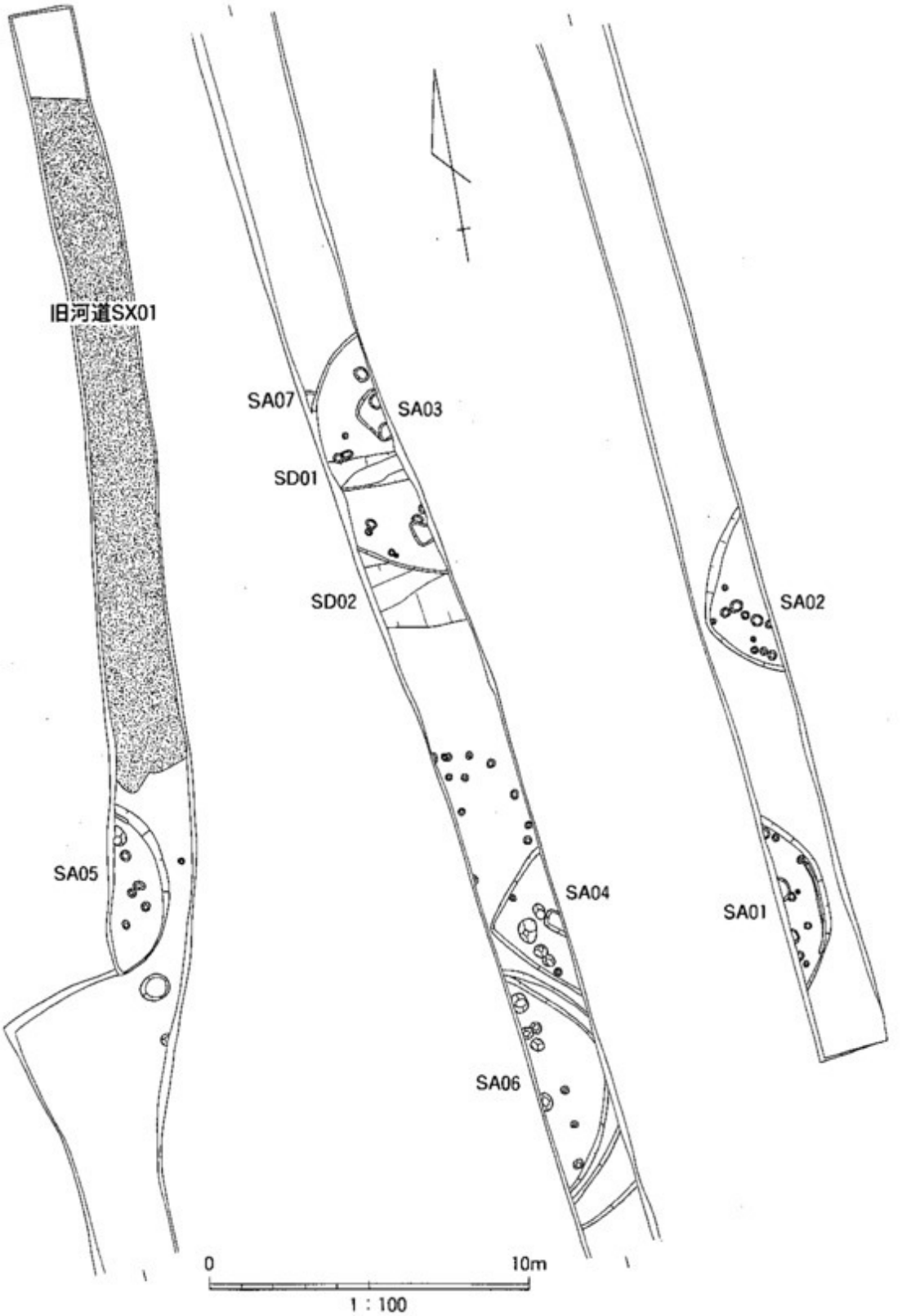
2　調査成果の概要

調査地は現地表面で標高約9.5m，遺構検出面では標高約９ｍを測る。

幅約２ｍ，南北長約110mの調査区内で検出された遺構は，弥生時代の竪穴式住居跡，溝，住居跡外ピット，旧河道などである（第２図）。以下，遺構と主な出土遺物の概略を述べる。



第１図　調査地位置図


旧河道SX01
SA07
SA03
SD01
SD02
SA02
SA05
SA04
SA01
SA06
0
10m
1：100

第２図　検出遺構図

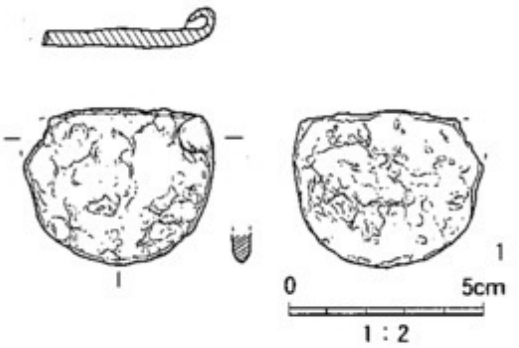
(1) 竪穴住居跡SA01～07

今回の調査では6棟の竪穴住居跡と，その可能性があるもの(SA07)を確認したが，いずれも部分的な検出である。後世の耕作や水路による削平も受けていたが，遺構の遺存状態は比較的良好であった。各住居跡からの遺物出土量は少ない。

竪穴住居跡SA01は，復元径約8mの円形住居跡で，壁沿いの一部に周溝が残る。壁高は約15cmをとどめる。壁から内側へ約50cmの範囲が中央部より3～5cm程高くなっており，いわゆるベッド状遺構が付設されていた可能性がある。壺(2),甕(3)などが僅かに出土している。

竪穴住居跡SA02は，復元径6m前後の平面形が方円形を呈する住居跡である。壁高は30cm前後をとどめる。主柱穴と見られるものは径40cm，深さ40cmを測る。周溝，ベッド状遺構は確認されていない。鉢(4),甕の破片などが僅かに出土している。

竪穴住居跡SA03は，方円形もしくは不整円形の住居跡で復元径約8mを測る。壁高は20cm前後をとどめる。主柱穴と見られるものは径50cm，深さ45cmを測る。検出住居跡のなかで遺物出土量が最も多く，甕(5～8)，鉢(9～11,17,18),高坏(12～14),紡錘車(15)，鉄製品(1)などが出土している。鉄製品(1)は農工具類の刃先と考えられる。鍛造で，基端部両隅を折り曲げて着装部を作出し，その片側は欠損している。縦4cm，横4.8cm，厚さ0.5cm,重さ18gである。刃部は弧状をなし，鋭利さをとどめず使用痕も明瞭でない。小型品で，着装部も短小で稚拙な作りである。住居跡埋土中からの出土であり，古墳時代以降の混在遺物である可能性も考えられる。

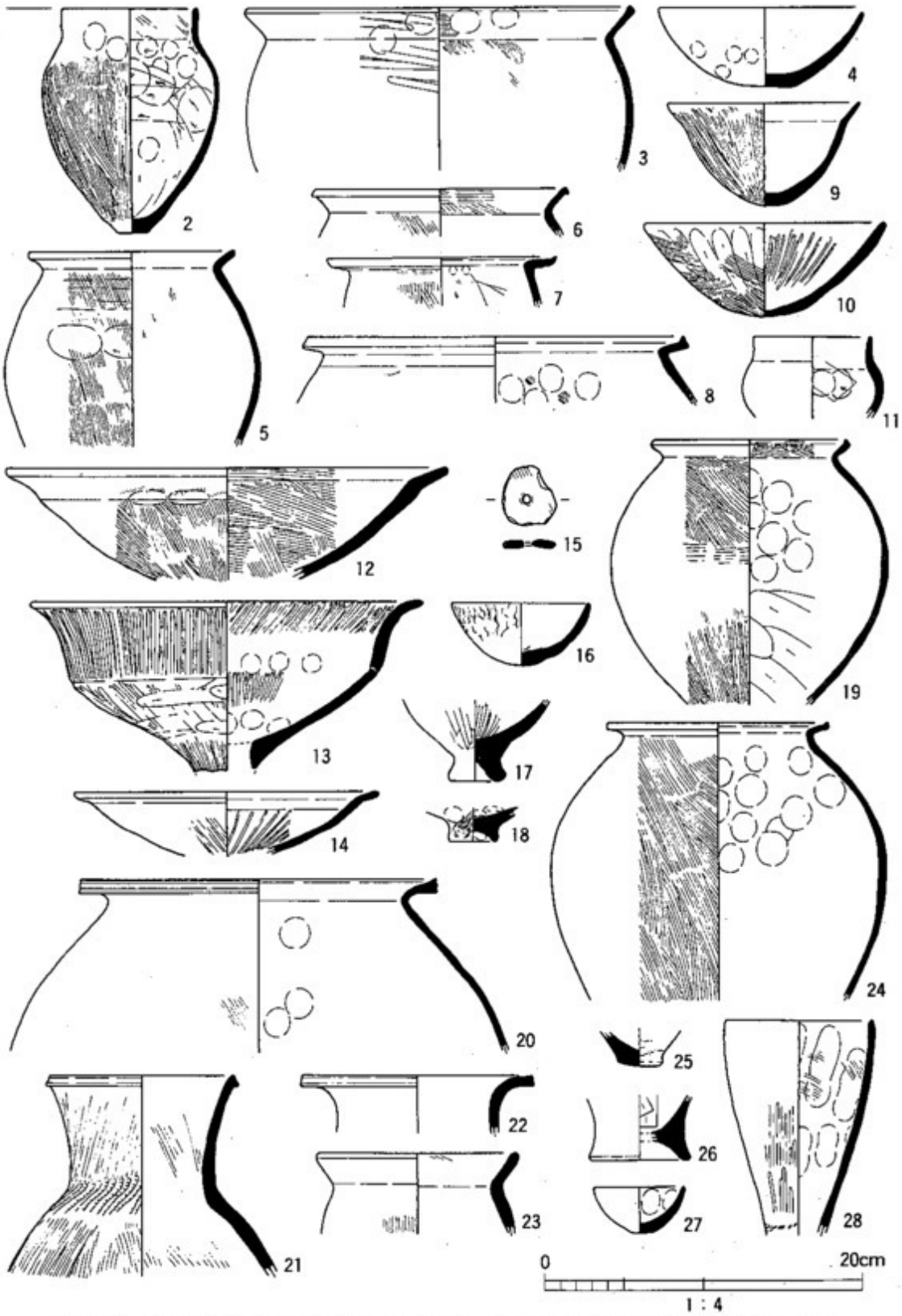


第3図　竪穴住居跡SA03出土鉄製品

竪穴住居跡SA04は，一辺4m以上のやや隅丸の方形住居跡で，壁高は30cm前後をとどめる。長方形状の炉跡が存在する。鉢(16)，甕(19)などが僅かに出土している。甕(19)の胴部外面は横位の叩き痕が微かに残っている。

竪穴住居跡SA05は，復元径約6mの円形住居跡である。壁高は15～20cmをとどめ，周溝の一部が確認されている。甕(20)，壺(21)のほかにサヌカイト製石鏃1点，同未製品1点，剥片類8点，輝緑凝灰岩製の太型蛤刃石斧砕片1点が出土している。

竪穴住居跡SA06は，SA04に接して検出された復元径約8の方円形住居跡である。壁高は25～30cmをとどめ，壁沿いに最大幅約1m，高さ約10cmの高床状部分（ベッド状遺構）が存在する。主柱穴と見られるものは径50cm，深さ45cmを測る。広口壺(22)，甕(23,24)，鉢(25,27)などが僅かに出土している。



第４図　竪穴住居跡SA01(2, 3)，SA02(4)，SA03(5～15, 17, 18)，SA04(16, 19)，SA05(20, 21)，SA06(22～26)，SA07(27, 28)出土遺物

竪穴住居跡SA07としたものは，SA03に切られ壁際のごく一部が検出されたにすぎない。壁高は約10cmをとどめる。土壙かピットの可能性もある。鉢(27)，長頸壷(28)が出土している。

(2)　**溝SD01, 02**

調査区に直交するかたちで東西方向に延びる溝を２条検出した。

溝SD01は，上幅1.7m，底幅90cm，深さ70cmで断面形が逆台形を呈する。遺物がほとんどなく遺構の時期は不詳であるが，調査区壁面での層序確認において，住居跡SA03が埋没した後に掘られた溝であることが分かる。

溝SD02はSD01の南約２mに位置し，住居跡SA03によって一部が切られている。推定復元幅約３m，深さ90cmを測り，断面形は緩やかに傾斜する船底状を呈する。埋土中からは多量の遺物が出土しており（第５～９図），今回検出された中では，最も遺物に一括性のある遺構である。出土遺物には壷(29～37)，甕(38～77)，鉢(78～83)，高坏(84～89)，壷または甕の蓋(90)などの土器類を主体に，紡錘車(91)，台石(92)，砥石(93)，サヌカイトの剝片類・石核，太型蛤刃石斧の未製品などがある。

広口壷(29)は張りが強い胴部を持ち，最大径部に横方向のヘラ磨きを施し，その上位に刺突文を巡らす。頸部下端には断面三角形突帯文を巡らす。また大きく外反する口縁部内面には，ヘラ描き斜格子文を施す。広口壷(29)は，胴部上位に３段の櫛描波状文帯を巡らせ，頸部には紐状の指頭圧痕突帯文を施す。壷(32)は上下に肥厚させた口縁部端面に凹線文を施し，頸部には指頭圧痕突帯文を施す。無頸壷(33)は胴部の張りが強い。口縁端部は外側に肥厚させ，口縁下位を凹線文と刻目文で加飾する。また穿孔がなされている。壷(34)は有段口縁の大型の壷である。胴部とほぼ90度の角度をなして口頸部が開いて伸び，さらに口縁部が明瞭な段をなしてやや内傾ぎみに立ち上がる。口縁部外面には凹線文を施し，その下半部に棒状浮文を貼り付ける。口頸部下端には幅広の指頭圧痕突帯文を施す。内面はヘラ磨き，ハケ，ナデの調整痕をとどめるが，外面の調整痕は胎土の磨滅や剝落もあり，あまり明瞭でない。なお，無文の壷（30，35～37）も存在する。

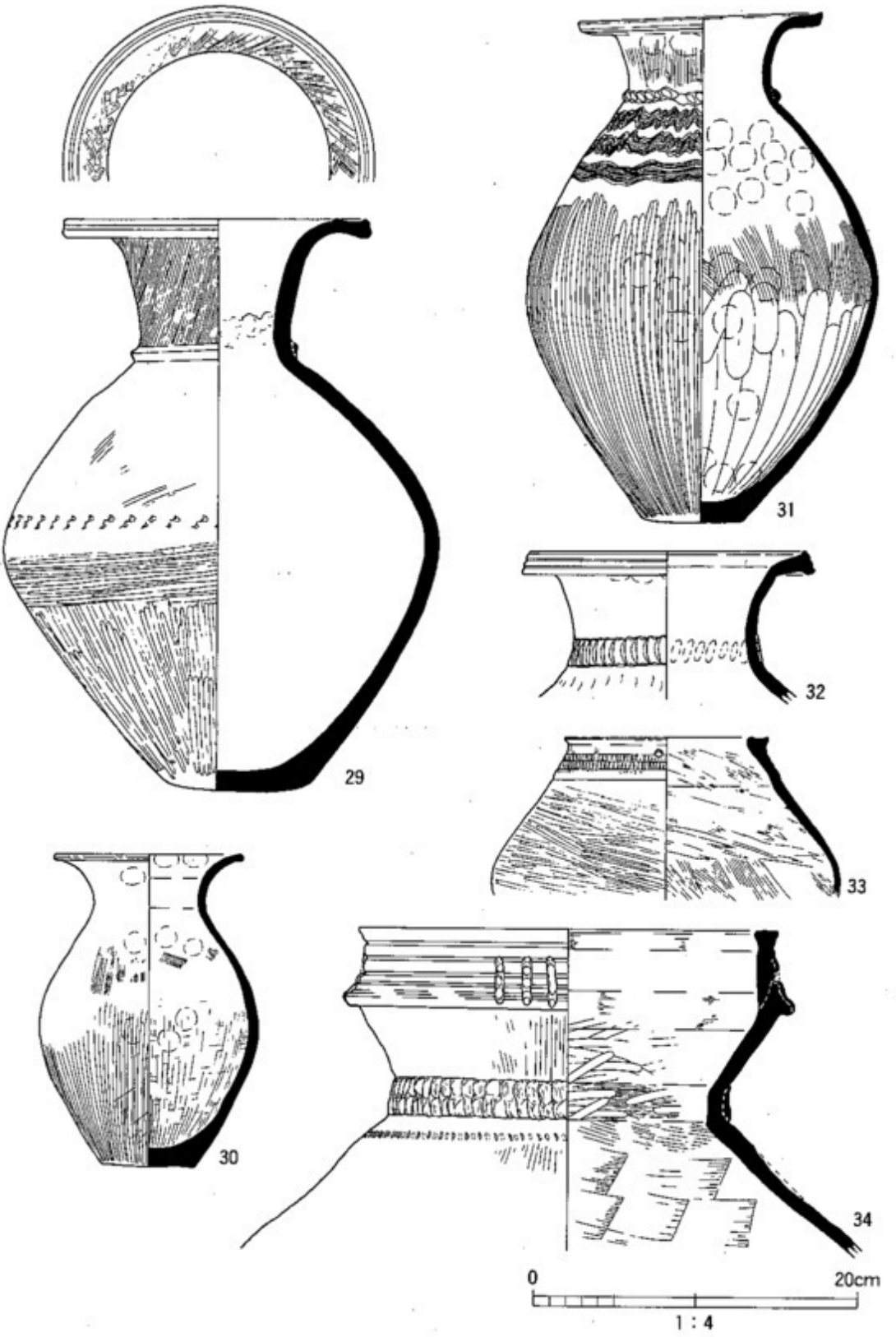
器種別で固体数の最も多いのは甕である。甕(38)の底部は上げ底状である。上げ底，平底ともに穿孔されたものも存在する（図版10）。甕(39)は胴部中位に刺突文を巡らす。甕(40)は口縁端面に凹線文を，口縁下端部に指頭圧痕突帯文を施す。

鉢は口縁部直下に凹線文を施すもの（80～83）が主体的な傾向が窺えるが，そうでないもの(78,79）も存在する。

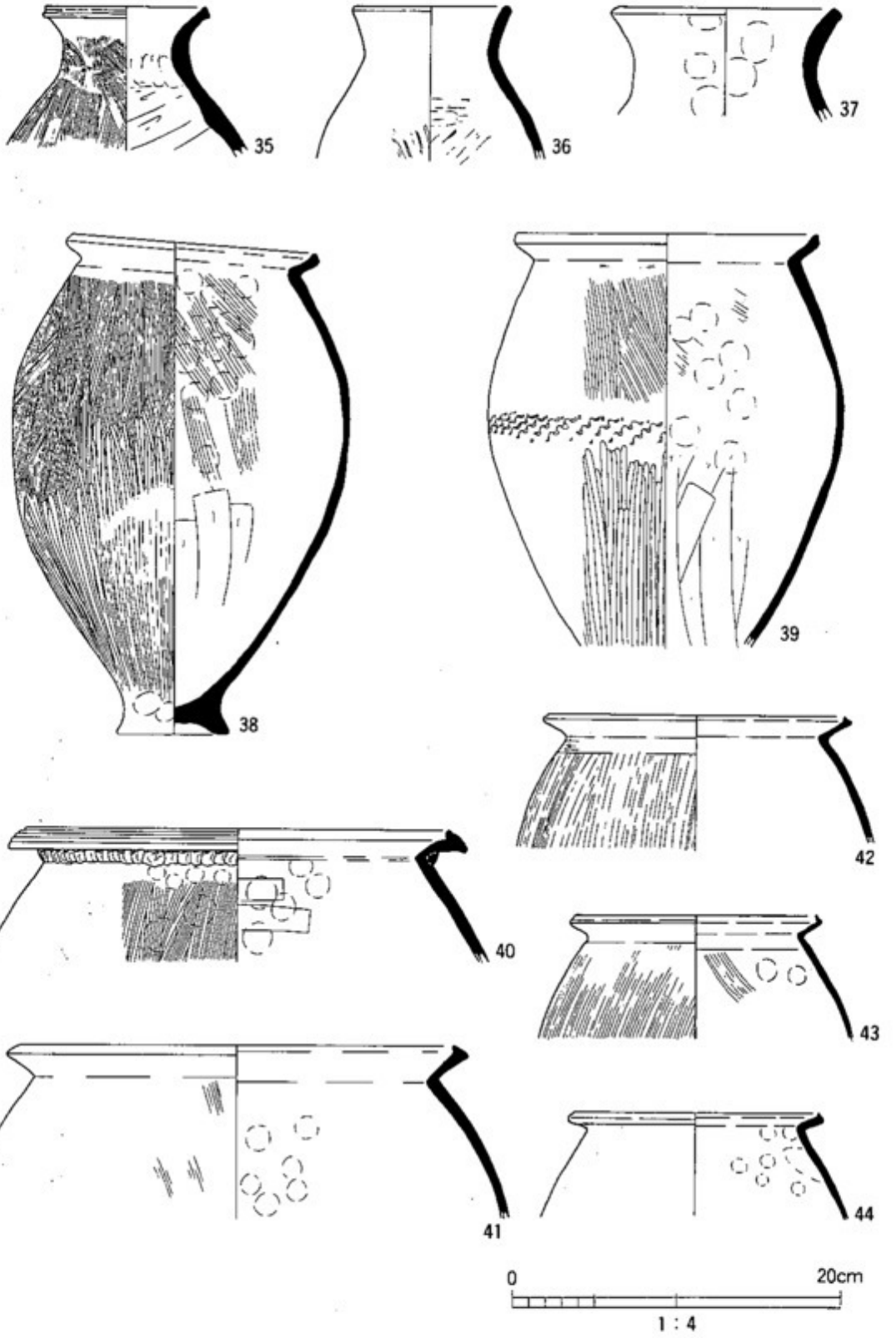
高坏（84～89）も形態的に多様である。高坏(84)は脚部にヘラ描き直線文，鋸歯文を施しているが，施文は雑である。

台石(92)は砂岩製で，原形の1/4を残す。両面に使用痕（擦痕）が認められる。

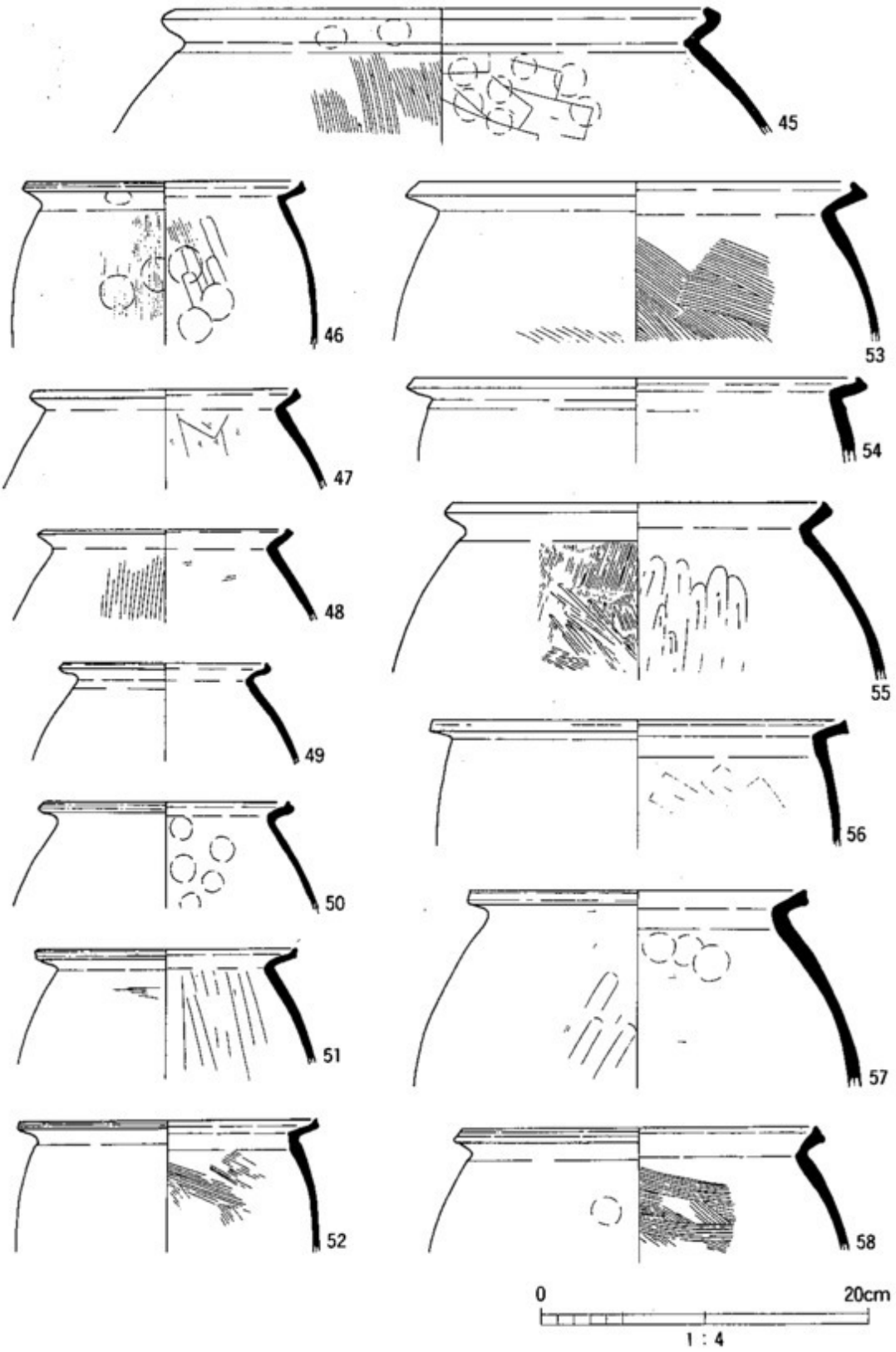
砥石と思われるもの(93)は砂岩製で，幅4㎜，深さ２㎜の断面Ｕ～Ｖ字形の細い溝を有する。溝の両側平坦部は外側上方向へ僅かに傾斜し，その片側（実測図では右側，写真では左側）では，



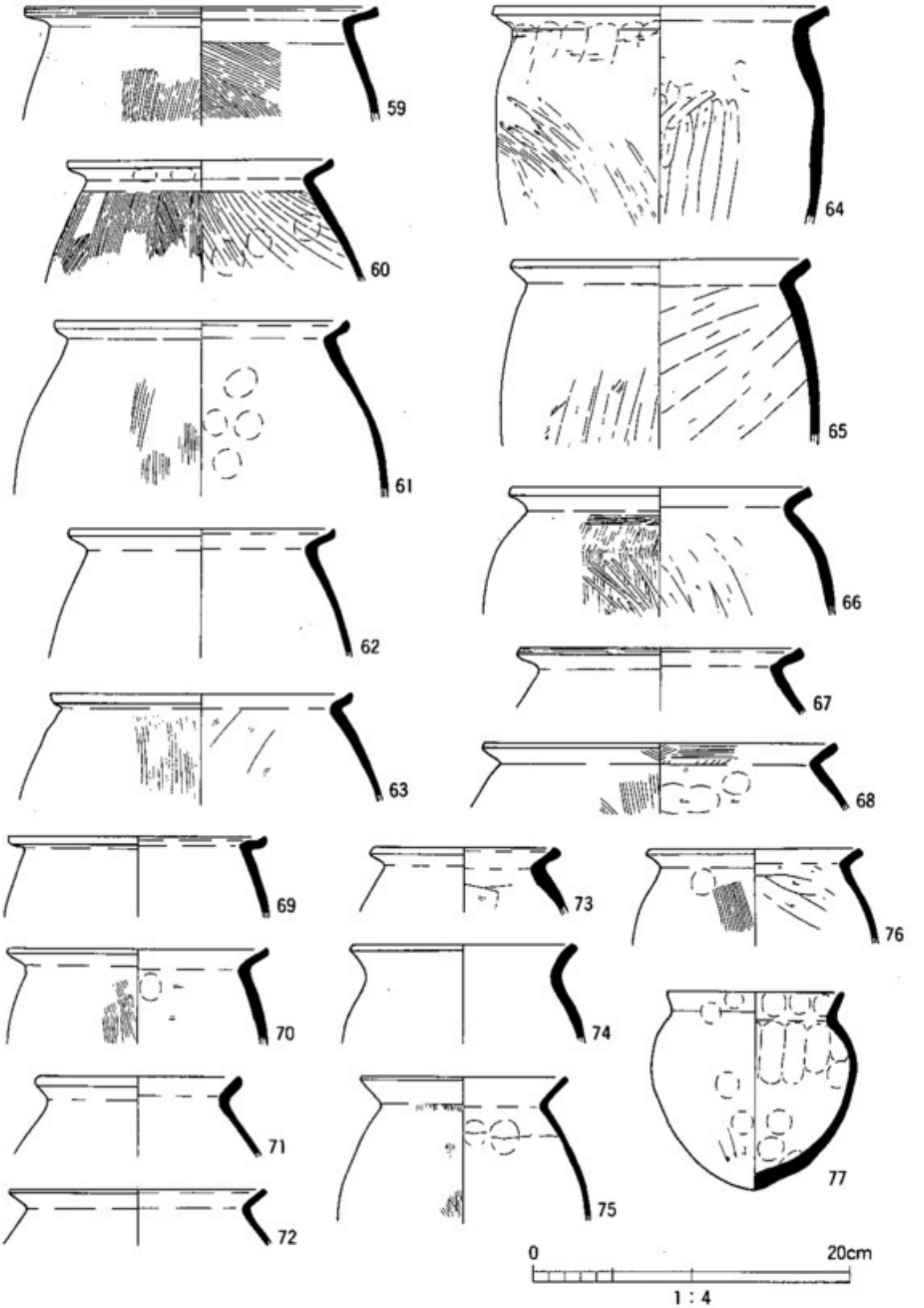
第５図　溝SD02出土遺物



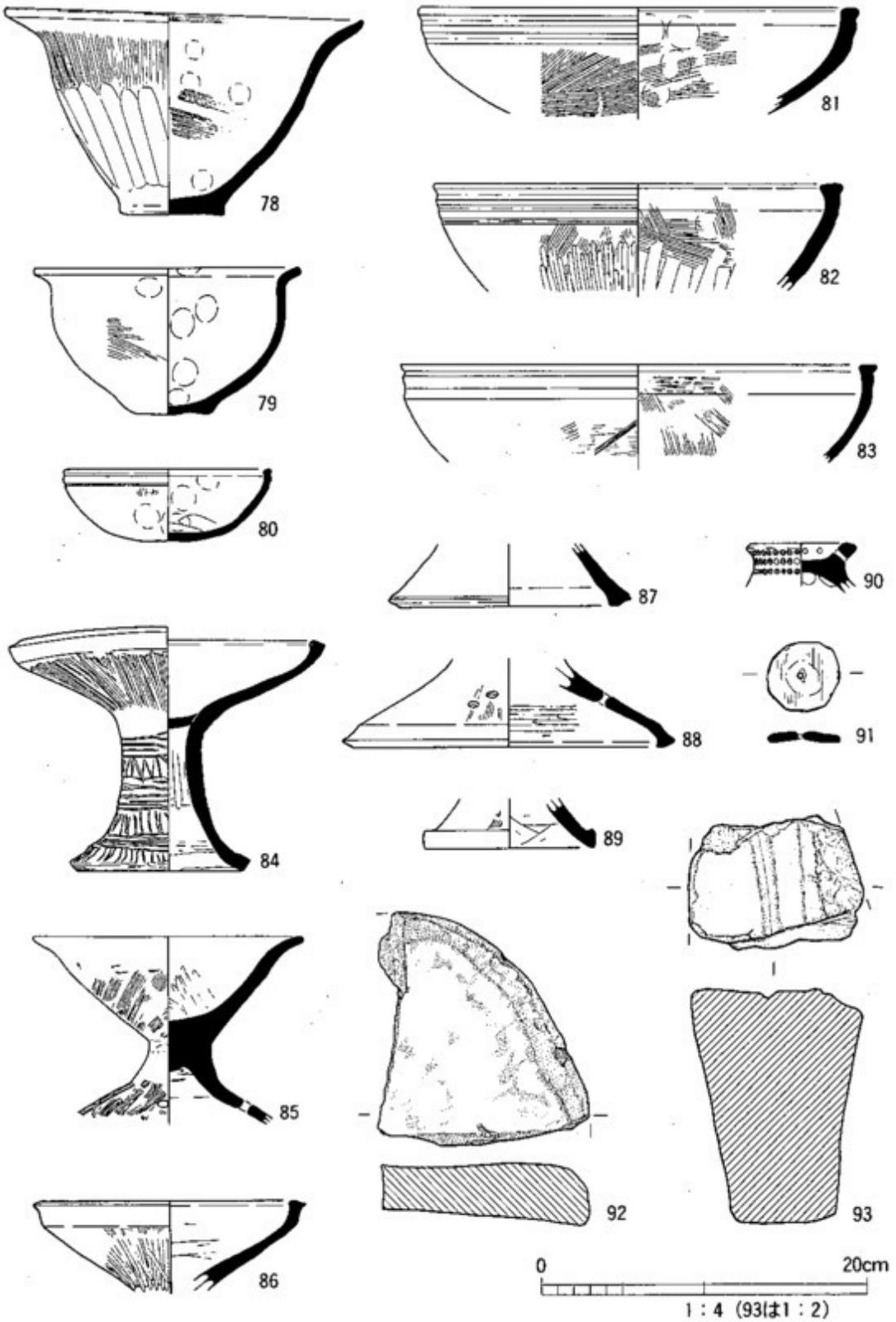
第６図　溝SD02出土遺物



第７図　溝SD02出土遺物



第８図　溝SD02出土遺物



第９図　溝SD02出土遺物

溝と平行して微かな筋状を呈し外側が1㎜ほど高い段を形成している。溝の両延長方向部分が欠損しており，原形は不明である。(1)

(3) 旧河道SX01

調査区北端付近で，小礫を多量に含む砂質シルトの広がりが，南北約20mにわたって確認された（第2図）。東西方向の流路の跡と考えられる。

3 小結

今回の調査では竪穴住居跡6棟と溝2条を検出した。住居跡SA04北側のピット群は住居内ピットの可能性も有し，さらに一棟の円形竪穴住居跡が存在していた可能性がある。住居跡の平面形は，SA01,05の2棟が円形，SA02,03,04,06の4棟が方円形もしくは隅丸方形を呈する。これらの形態差を時期差として明確に捉えることは困難であるが，出土遺物からこれらの住居が営まれた時期は，概ね弥生時代後期初頭～終末の間に位置付けられよう。SA02,06に見られるような方円形プランの住居跡は，市内では名東遺跡のSA01,02など黒谷川Ⅰ～Ⅱ式期の竪穴住居跡に類例が認められる。(2)

多量の遺物を出土した溝SD02は，人工的に掘削された溝と考える。この溝は弥生時代中期後半（畿内第Ⅲ～Ⅳ様式）段階に機能・埋没した。出土遺物壺（29,34），甕（39）などには中部瀬戸内地域的特徴が濃厚に窺える。この溝の時期の住居跡は今回の調査では確認されていないが，近在する事は想定される。今後の調査において当該期の生活領域等を検討していくうえで有効な検出事例となるであろう。

旧河道SX01についても断片的な確認ではあるが，広範な矢野遺跡における集落の構成を，微高地単位で捉えて考察していくうえで，将来的に意義のある成果と言えよう。

(財)徳島県埋蔵文化財センターによる一般国道192号徳島南環状線建設工事に伴う発掘調査によって，矢野遺跡の実態は近年急速に明らかにされつつあるが，当然ながら今後も，周辺部の小規模な調査成果の蓄積にも期待すべき点は多い。

註

(1) この遺物については，「青銅器の鋳型の可能性」という観点からも検討が加えられたが，鋳型と断定するに至っていない。

(2) 徳島市教育委員会『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要』4 1994年。

II　名東遺跡（マンション建設工事）

1　調査に至る経緯と経過（第1図）

名東遺跡は鮎喰川右岸，眉山北麓の沖積地上に位置する縄文時代晩期～江戸時代に至る県内屈指の集落遺跡として認識されている。確かに昭和62年の方形周溝墓域での銅鐸の発見以降，近年の調査実績を踏まえれば，遺跡に対する評価はより大きなものになりつつある。しかし個々の調査で得られる情報は極めて少量であり，遺跡に対する歴史観にはまたまだ不明瞭な箇所が多く残されているのが現状である。

今回の調査地は1991年宅地分譲に伴う調査[1][2]，また1992年の宅地分譲に伴う調査[3]や同年の建設省名東宿舎建設に伴う調査[4]に近接する地域であり，主に弥生時代後期～古墳時代前期にかけての住居跡や方形周溝墓域の広がりが予想されていた地域である。

調査は共同住宅建設工事に伴うものであるが，開発者側との事前協議段階において，工事の規模および内容から埋蔵文化財に対する影響上，調査実施は避けられないものと想定された。開発者側の立会の下，試掘調査の実施において，現代水田耕作土層下30cmにおいて遺構面ならびに遺構の存在を確認した。この試掘調査の結果に基づく再度の調整協議において，住宅建設部である200㎡を対象に調査を実施することで開発者側の合意を得た。

第1図　調査地位置図

2　基本層序

調査地の現地表面は標高T.P.＋7.5mを測り，現代水田耕作土層下に第１～６層が堆積する。以下，上位より概略する。

第１層：明褐色シルトであり，層厚５cmを測る。現代水田耕作土層に伴うFe酸化沈殿層である。

第２層：黄橙色砂質シルトであり，層厚10cmを測る旧耕作土である。

第３層：黄褐色シルトであり，層厚５cmを測る。第２層に伴うFe酸化沈殿層である。

第４層：黄橙色砂質シルトであり，層厚10cmを測る旧耕作土である。

第５層：黄褐色シルトであり，層厚５cmを測る。第４層に伴うFe酸化沈殿層である。

第６層：遺構検出ベース層であり、上位では黄色砂質シルトであるが，下位では明黄褐色砂礫へ変化する。シルト層の堆積以前に旧河道が存在するものと考えられる。

3　調査概要

調査では第６層上面において，溝，土壙，ピットを検出している。以下，主な遺構，遺物について概略する。

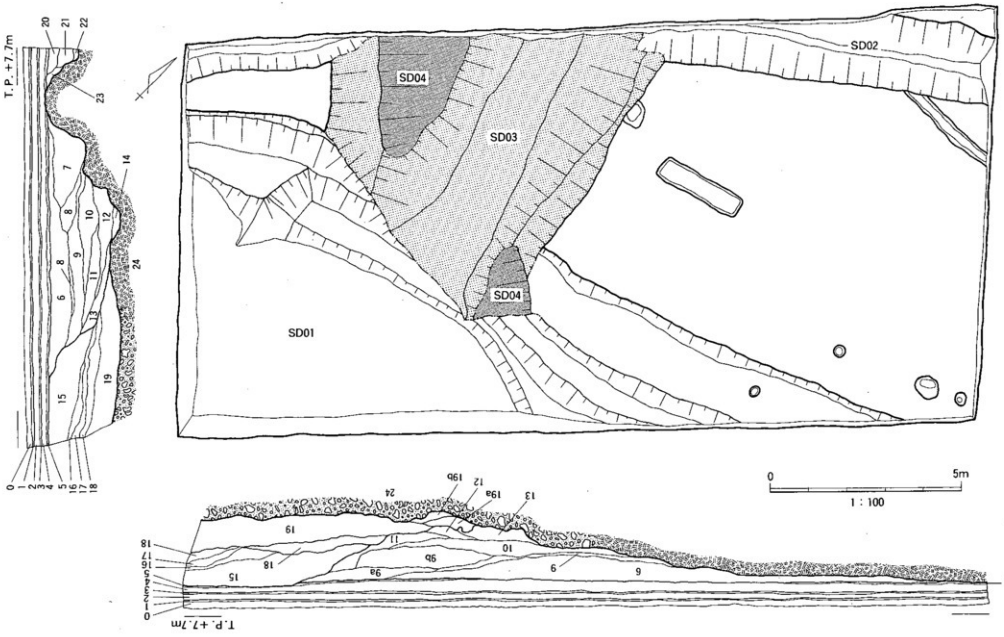
（ｉ）溝SD01（第2～4図，図版1～3,5,6）

調査地内での最大幅9.0m，深さ1.8mを測る東西方向の大溝である。右岸の堆積土15～19は極細砂～シルト層でありラミナが顕著に挟在することから，「流れ」に伴う堆積層とされる。この土砂の堆積により大溝の幅は約7m程までに縮小する。堆積土８～14は，基本的には砂礫層であるが，やはりラミナが顕著な状況を示していることから，溝幅の縮小後も「流れ」の状態が継続していたものと想定される。ただ水成堆積層としての粘土が挟在することから，一時的には「澱み」状態も存在したのであろう。出土遺物には黒色土器，土師器，白磁があるが溝SD01は後述するSD04を壊していることから，異なる時代の遺物混入が認められる。

堆積土19から黒色土器Ａ類椀底部片(1)，堆積土13～14から土師器坏(2)，皿(8)，堆積土12から土師器坏(3)，皿(9)，堆積土11から土師器坏(4,5)，皿(10,11)，堆積土10から土師器坏(6,7)，皿(12,13)，堆積土９から白磁皿(14)，堆積土６から土師器足高高台(15)が出土している。木製品として斎串(20)がある。また混入遺物として，鉢(16,17)，回転台形土器(18,19)がある。

土師器坏(2～7)，皿(8～13)は回転台土師器である。白磁皿（14)はＶ類，足高高台(15)は10世紀中葉に出現するタイプの高台が長台化したものであろうか。鉢(16,17)は弥生時代後期，回転台形土器は近年，名東遺跡において顕著に出土が認められる。

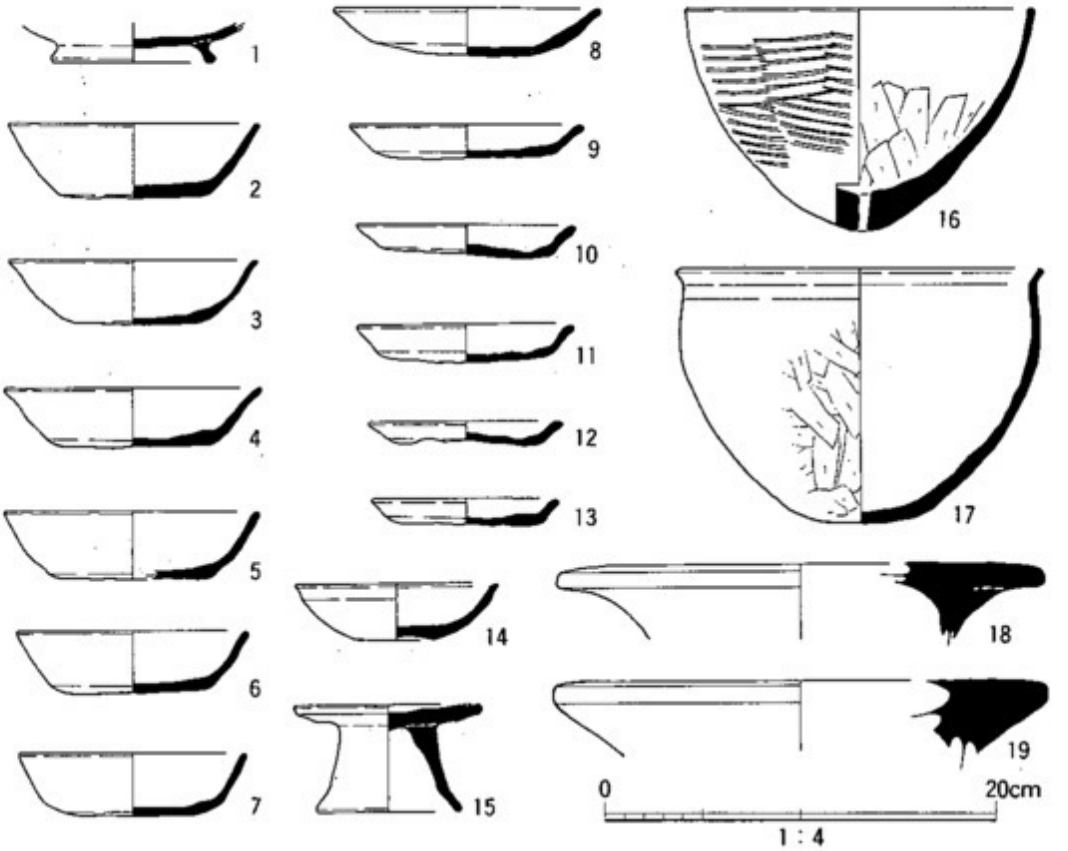
溝の存続期間としては，黒色土器Ａ類椀を上限に土師器足高高台を下限に押さえれば，時期的には10世紀後葉～13世紀前葉の年代観が得られ，溝SD01は200年以上に渡り存続していたものと考えられる。



0 現代水田耕土
1 明褐色シルト（Fe酸化沈殿層）
2 黄橙色砂質シルト（旧耕作土）
3 黄褐色シルト（Fe酸化沈殿層）
4 黄橙色砂質シルト（旧耕作土）
5 黄褐色シルト（Fe酸化沈殿層）
6 褐色～灰白色極細砂～シルト
7 明黄褐色～黒色粘土質シルト（人的埋土）
8 灰色砂礫混シルト
9 灰白色シルトに黄褐色細～粗砂のラミナ
9a 灰白色極細砂～シルト
9b 灰黄褐色粘土質シルト
10 灰色砂礫混粘土～シルトに明緑灰色極細砂のラミナ
11 灰白色極細砂～シルトに灰色細～粗砂のラミナ
12 灰色粘土
13 明緑灰色粘土質シルトに緑灰色細～粗砂のラミナ
14 青灰色砂礫混粘土～シルト
15 灰黄色～灰オリーブ色シルト
16 浅黄色シルト～極細砂
17 灰オリーブ色シルト～極細砂
18 灰白色シルト質粘土に黄灰色砂礫のラミナ
19 褐色～黄灰色砂礫
19a オリーブ黄色砂礫
19b 青灰色砂礫
20 にぶい黄色シルト
21 灰色シルト
22 灰白色粘土質シルト
23 灰黄色シルト
24 褐灰色～明黄褐色砂礫～黄色砂質シルト

溝SD01埋土（13世紀中葉）
溝SD01埋土（12世紀前～中葉）
溝SD01埋土（12世紀中～後葉）
溝SD01埋土（11世紀中～後葉）
溝SD01埋土（11世紀前～中葉）
溝SD02埋土
溝SD01埋土（10世紀後葉）

第２図　遺構配置図および断面図



第３図　溝SD01出土遺物

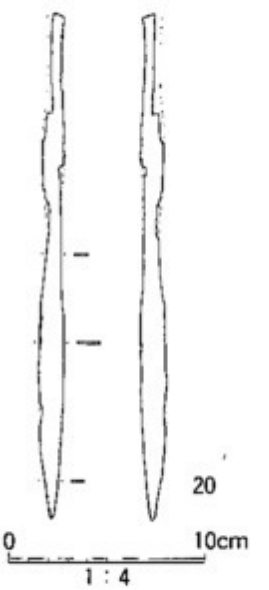
（ii）溝SD02（第2図，図版1）

調査地の北側において部分的に検出している幅2m，深さ0.8mを測り，断面形が深みのある逆台形を呈する南西－北東方向の溝である。

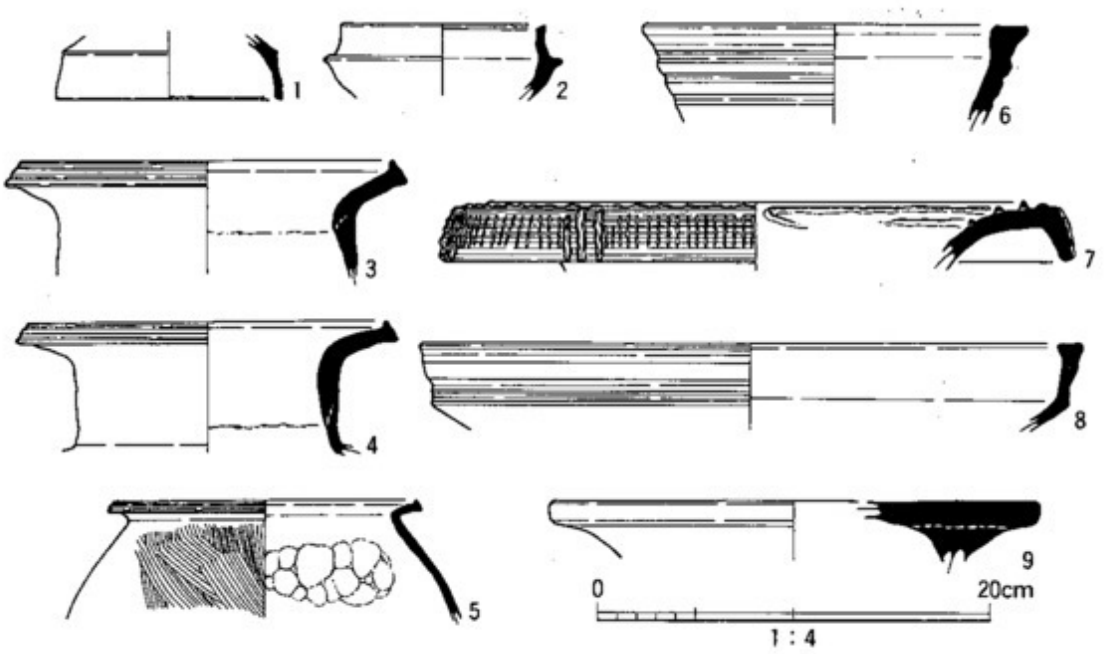
出土遺物が見られず時期的な問題については明確ではない。

（iii）溝SD03(第2,5図,図版1,7)

幅７m，深さ1.2mを測り，断面形が逆台形を呈する南北方向の溝である。前述した溝SD01およびSD02により壊されており，後述する溝SD04をほぼ重複するように壊している。溝底部に砂礫が堆積することから，当初は「流れ」のある溝として利用されていたものと考えられる。溝底部より須恵器坏蓋(1),坏(2)が出土しているが，溝SD04の破壊に伴うものであろうか、大量の弥生時代の遺物混入が見られる。弥生時代の混入遺物としては，広口壺(3,4,7),短頸壺(6)甕(4,5)，高坏(8)，回転台形土器(9)などがある。須恵器は陶邑TK47、混入遺物は弥生時代後期～古墳時代前期のものである。



第４図
溝SD01出土斎串



第5図　溝SD03出土遺物

（iv）溝SD04(第2,6図,図版1,4,8,9)

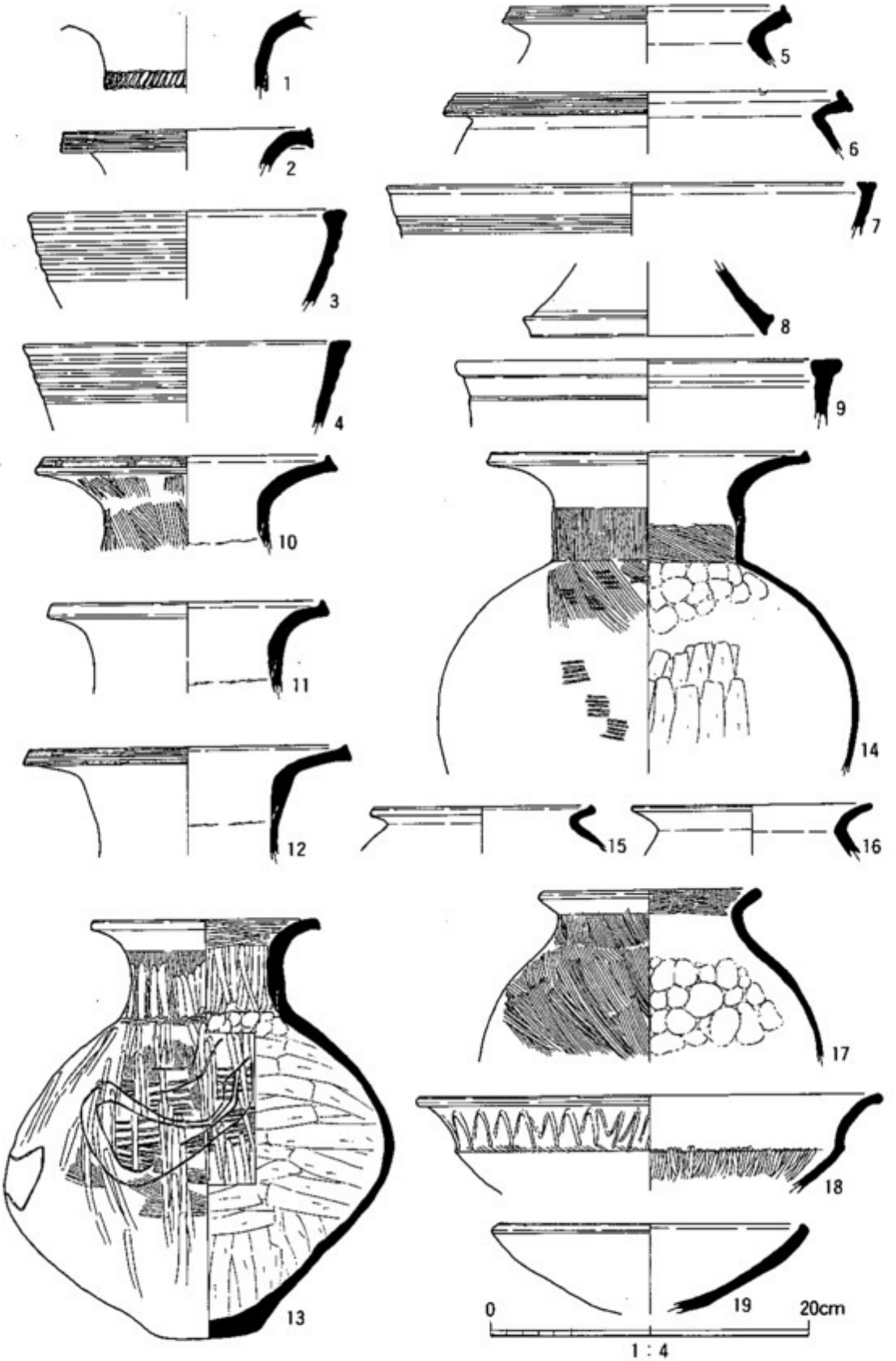
前述した溝SD03により大部分が壊されている推定幅5mを測る南北方向の溝である。

出土遺物には、広口壺(1,2,10～14)，短頸壺(3,4),甕(5,6,15～17)，高坏(7,8,18),鉢(9,19)がある。

広口壺(1)は口縁部を欠損するが頸部の貼付突帯に爪形文が加飾される。(2)は口縁部を上下に拡張し端面には3条凹線文が施される。短頸壺(3,4)は頸部に4条凹線文を持ち，(3)は口縁部を左右に，また(4)は外方に拡張する。甕(5,6)は口縁端部を斜め上方に拡張し，口縁端面には3～4条凹線文を持つ。(7)は口縁部下外面に2条凹線文を持つ坏部が皿形を呈する高坏である。

広口壺(12～14)は直立する頸部から大きく外反させる口縁部を持ち，口縁端部を上方にわずかに摘み上げ端面には3条程度の擬凹線が施される。(13)は口縁端部の端面は面取られる。頸部外面はハケ＋ヘラミガキ，体部外面はタタキ＋ハケ＋ヘラミガキ，口縁部内面はハケ，頸部内面はヘラミガキ，体部内面はヘラケズリである。なお体部外面にはヘラによる文様が描かれる。(14)は直立する頸部から大きく外反する口縁部を持ち，口縁端部は上方に摘み上げられる。頸部外面はハケ，体部外面はタタキ＋ハケ，頸部内面はハケ，体部内面のヘラケズリは頸部まで掻き上げられず体部上位2/3で止まり，上位にはユビオサエが施される。

甕(17)は口縁端部を丸く納め、体部外面はハケ、口縁部内面はハケ、体部内面にはユビオサエが施される。高坏(19)は坏部が口縁直下で外反する形態、鉢(19)は底部が丸みを持つ皿形を呈する。



第６図　溝SD04出土遺物

4　小結

溝SD01は10世紀後葉～13世紀前葉まで存続していた大溝であると考えられるが，この時期に該当する大溝は名東遺跡では初見である。遺跡の性格上，この時期に集落経営が行われていた痕跡が充分に確認されている訳ではなく，溝SD01の存在は今後，周辺地域において歴史の空白期を埋める資料の発見を秘めた可能性を持つ遺構として認識される。

溝SD01出土の土師器坏皿はいずれも回転台土師器であり，層位による法量縮小化の進行状況が明確に表われている。

溝SD02は大量の弥生時代の遺物が混入しているものの，古墳時代中期に使用されていた溝である。名東遺跡においては前述した溝SD01同様，この時期にこの規模を有するものとしては初見である。ただ近接地域で当該期の住居跡が確認されていることから，遺跡における集落痕跡が全く皆無である訳ではない。しかし名東遺跡ではこの時期に関しても，歴史的な見解を持ち得ていないのが現状である。溝SD02の下位には方向を同じくする旧河道が存在しまたSD02の底部には砂礫層が堆積することから，集落経営における大規模な水利運営に関する性格も考えられるが現在のところ明確ではない。

溝SD02によるSD04の破壊は極めて壊滅的である。出土土器は一括資料であるが，残存遺構において処理した資料である。土器(1～9)と土器(10～19)は型式学的また時期的にも分別されるグループであり，前者は弥生中期，後者は弥生後期～古墳前期の様相とするのが通常の理解である。

これらの資料が共伴する事例については二つの解釈を想定する。一つに，この地域は弥生中期と後期後葉～古墳前期の集落が重複する空間である可能性が強く，後者の時代に前代の遺構が破壊されたことから生ずる混入とする見方。もう一つに，遺物の一括性を支持する見方がある。

確かに溝SD04資料が示す事象には型式学が採用されるのが通常であり，そこから引き出される見解も通例的である。一方，一括性を支持するには多分な危険性を孕んでいるが，溝SD04資料を一括性として評価するならば，この状況は土器(10～19)の示す時期における一現象として理解され，弥生後期前葉の土器様相は中期的な様相を引きずりながらの「不明瞭」という事実に他ならなくなる。このことについては以前にも触れたところである[5]が，今回さらに言及すれば，この状況を脱却するのは後期後葉まで待たなければならなず，従来空白期とされた後期前葉の土器様相は，弥生中期末から後期後葉への土器型式の非連続性の観点に立てば，幾分かはスムーズに理解される。今後より一括性の高い共伴事例が得られるか否かが焦点である。

しかしこの見解から生ずる問題もまた重大である。すなわち考古学が伝統的に求めてきた研究法としての土器型式学は，少なくともこの時期の時間的な流れを知る上での尺度に成り得なくなる。同時に弥生後期後葉における土器様相に大画期をもたらしたであろう社会情勢を実証主義的な観点から明解に説明しなければならない。

過去の社会の時間的変遷は，単に土器型式をもって片付けられるものではなく，それぞれの地

域社会の事情の中で，その地域独自の歴史を探っていかなければならないのかもしれない。

註

(1) 徳島市教育委員会『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要』2，1992年。

(2) 徳島市教育委員会『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要』3，1993年。

(3) 徳島市教育委員会『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要』4，1994年。

(4) 徳島県埋蔵文化財センター『埋蔵文化財センター年報』Vol.4，1993年。

(5) 「II　名東遺跡発掘調査概要－住宅開発工事に伴う発掘調査－」，徳島市教育委員会『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要』3，1993年。
「III　名東遺跡発掘調査概要－マンション建設工事に伴う発掘調査－」徳島市教育委員会『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要』4，1994年。
名東遺跡においては弥生後期前葉には中期的な様相が根強く残り，この状況は後期終末（黒谷川Ⅰ式）に至るまで脱却しないという考え方。

III　庄遺跡（学校施設建設工事）

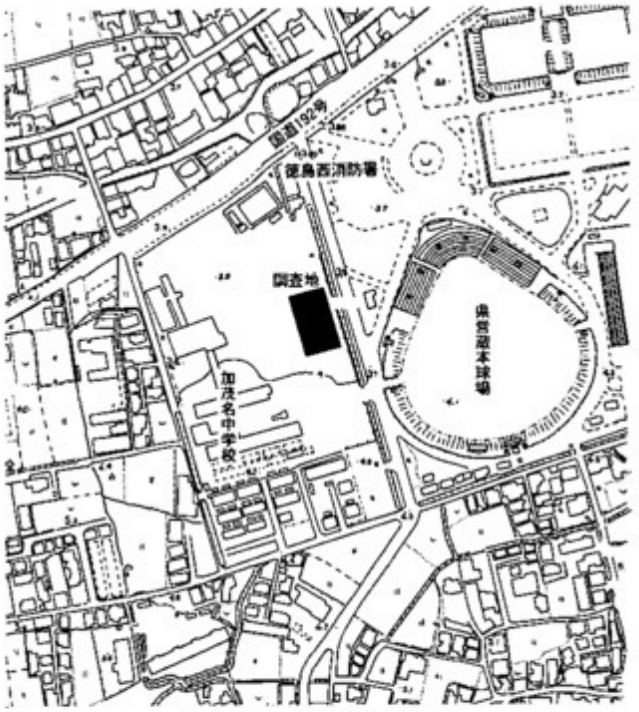
1　調査に至る経緯と経過（第1図）

庄遺跡は眉山北麓の標高T.P.＋4m前後を測る沖積地上に位置し，東に徳島大学医学部構内を中心とする蔵本・南蔵本遺跡，西に市道南庄－南佐古線建設に伴い明瞭化した南庄遺跡に隣接する縄文時代後期～江戸時代に至る集落遺跡である。近年周辺地域での調査事例は増加の傾向にあるものの，調査で得られる情報は断片的であり，総括的に遺跡の歴史的背景を捉えきれない現状がある。

しかし遺跡に対する認識は，眉山北麓に存在する一連の遺跡の範疇として捉えられ，県内でも有数の遺跡の一つとして数えられる。従来この遺跡に対する認識の主体は，弥生時代前期の段階から集落経営が行われてきた遺跡として評価された経緯があり，西接する南庄遺跡への弥生集落の発展過渡的な集落様相として把握されている。また古代末期～中世に至る諸遺構の検出も見られ，吉野川下流域における当該期の歴史を考える上で貴重な資料を得ている。

この遺跡密集地域における調査例として，近年徳島大学医学部構内において徳島大学埋蔵文化財調査室は精力的な調査を実施している。

今回の調査は1993年市立加茂名中学校の体育館を新設する計画に伴うものである。同校においてはすでに1983年の校舎建設工事時に調査が実施されている経緯があり，遺跡の認識が高く評価されていることから，当初より調査実施の方向において協議が取りまとめられた。



第1図　調査地位置図

2　基本層序（第２図）

調査地の現地表面はT.P.＋4mを測り現代盛土層下に第１～９層が堆積する。以下，上位より概略する

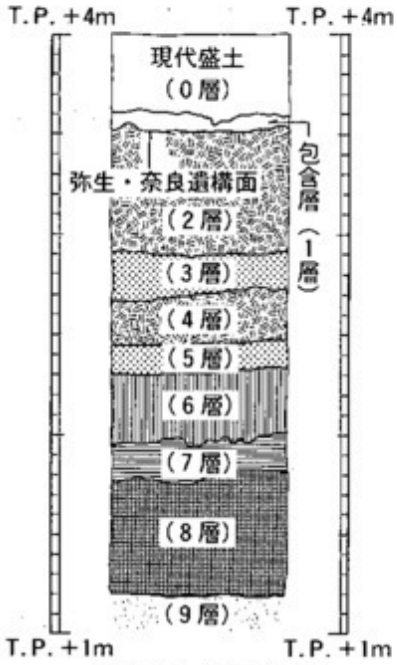
第１層　黒色シルトであり層厚10cmを測り撹拌を受けている。弥生時代および奈良時代の遺物が混在する。

第２層　黄色細砂～シルトであり層厚60cmを測る。上面において弥生時代および奈良時代の遺構を重複して検出するベース面であるが，後世に削平を受けている。鮎喰川下流域に普遍的に見られる堆積層である。

第３層　黄灰色粘土質シルトであり層厚20cmを測る。

第４層　明黄褐色シルト質粘土であり層厚20cmを測り，第２層と同色同質である。鮎喰川下流域では一般的な状況として第２，４層の堆積土は連続堆積が通常であるが，ここでは異質土（第３層）が挟在する。

第５層　暗灰黄色シルト質粘土であり層厚15cmを測る。色調がやや暗調であるが，第３層と同層であると考えられる。第２～５層は一連の堆積過程において交互堆積を示す。



第２図　基本層序

第６層　灰色シルト質粘土であり層厚35cmを測る水成堆積層である。

第７層　暗灰色粘土であり層厚20cmを測る有機質の腐食土である。

第８層　青灰色粘土であり層厚60cmを測る水成堆積層である。

第９層　青灰色細砂～粗砂である。調査地における最下位層であると考えられる。

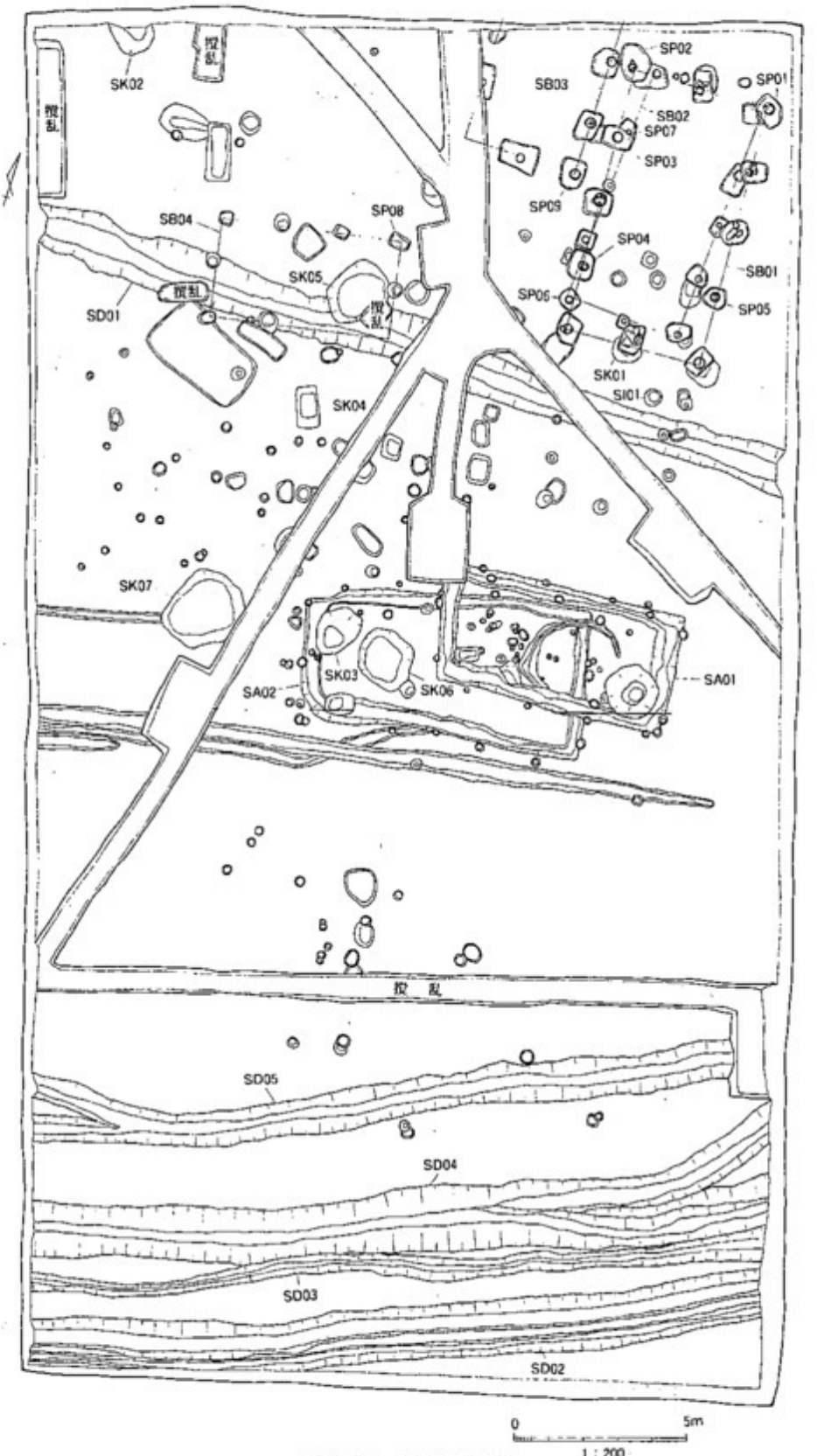
3　調査概要（第３図）

調査では第２層上面において，弥生時代前期の溝，土壙，弥生時代後期の土器棺，弥生時代後期～古墳時代前期の溝，および奈良時代の掘立柱建物，竪穴住居跡・溝，土壙，ピットを重複して検出している。また第１層（包含層）より奈良時代の遺物が大量に出土している。以下，包含層出土遺物ならびに主な遺構，遺物について概略する。

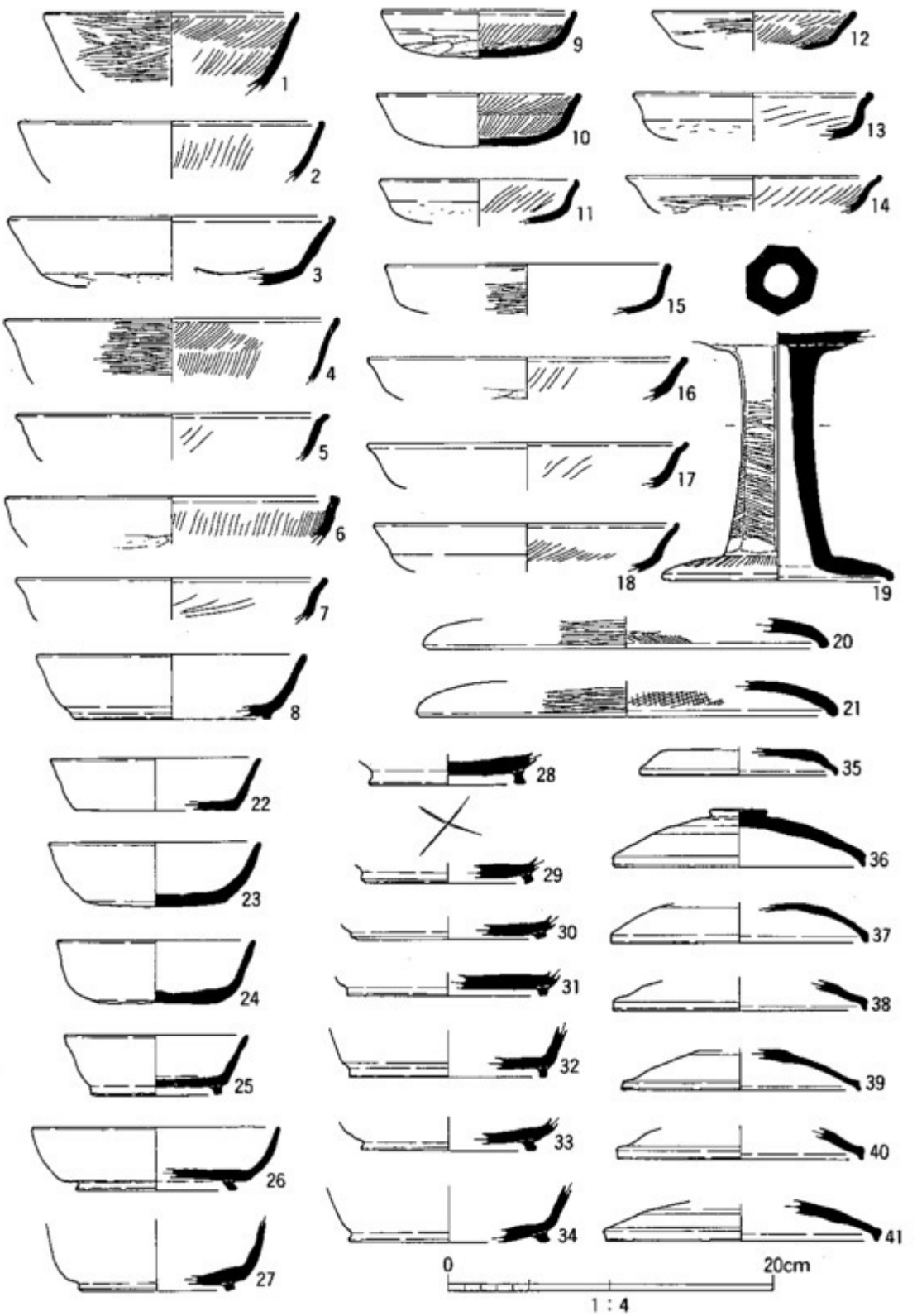
4　第１層（包含層）出土遺物（第4,5図，図版7～9）

第２層出土遺物は，本層が広範囲にわたり削平されている可能性が考えられるため，本来，遺構内遺物の撹乱状況を示しているものと考えられる。

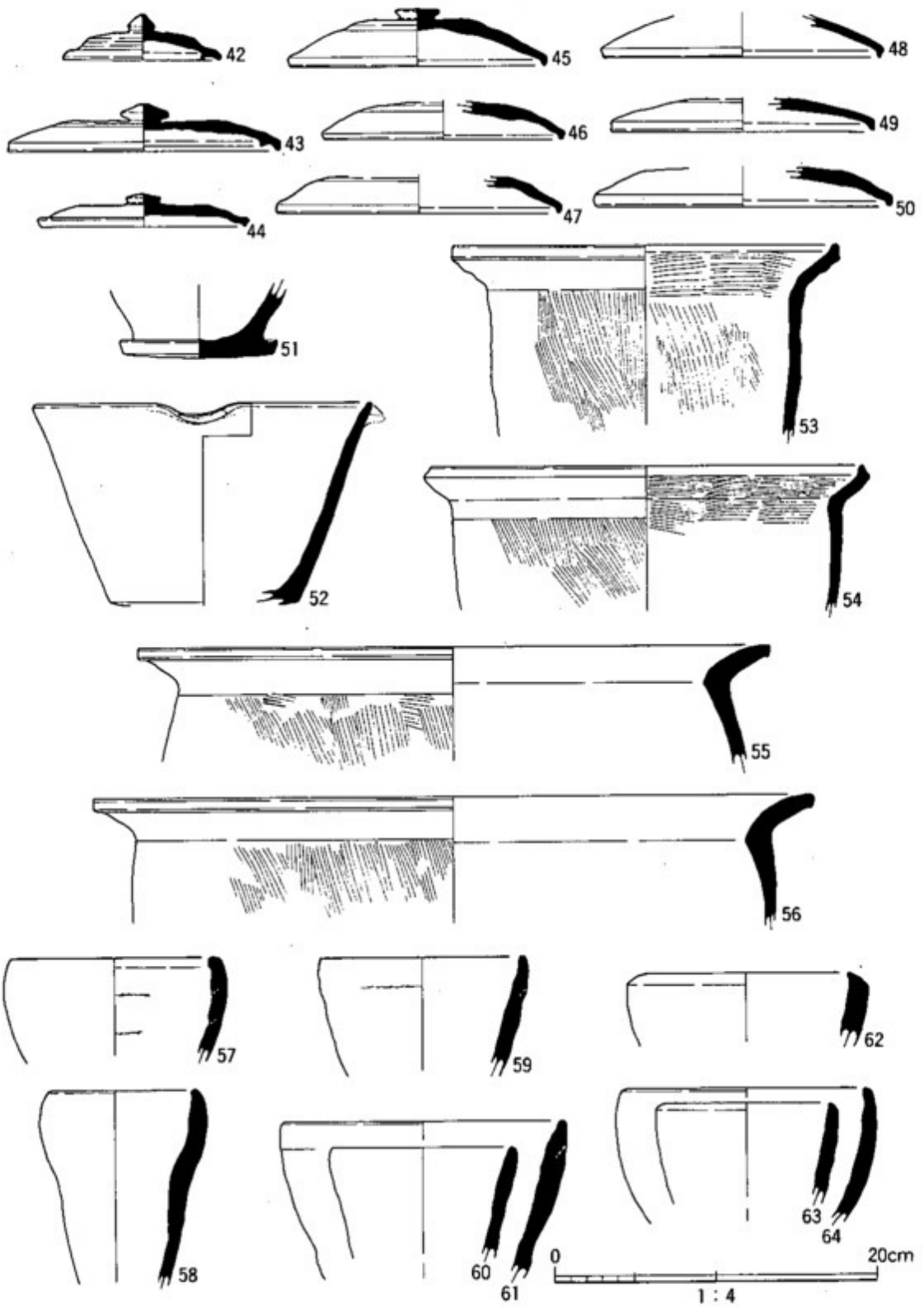
土師器坏(1～14)，皿(15～18),蓋(20,21),高坏(19)，鉢(52)，鍋(53,54)甕(55,56)須恵器坏(22～34)，蓋(35～50)，鉢(51)，製塩土器(57～64)がある。土師器（１～21）は畿内産土師器である


SK02
撹乱
SP02
SB03
SP01
SB02
SP07
SP03
SP09
SB04
SP08
SP04
SB01
SK05
SP06
SP05
SD01
SK01
SI01
SK04
SK07
SK03
SA01
SA02
SK06
B
SD05
SD04
SD03
SD02
0
5m
1 : 200

第３図　遺構配置図



第４図　第１層（包含層）出土遺物



第５図　第１層（包含層）出土遺物

5　弥生時代～古墳時代

（ｉ）**溝SD01**（第3,6図）

幅１～1.5m，深さ80cm，断面形が逆台形を呈する東西方向の溝である。埋土に砂礫が見られ，使用当時の水流痕跡をとどめているものと考えられる。出土遺物には甕(1)が出土している。

甕(1)は如意形口縁を呈し，口唇部に刻目が入る。外面は縦位のハケ調整である。

（ii）**溝SD02～05**（第3,6図，図版1）

溝SD02は幅1.5mを測るが，幅1mと0.5m、深さ60cm，断面形が逆台形を呈する２条の溝が並走する。SD03は幅40～70cm，深さ20cm，断面形が逆台形を呈する。SD04は幅1.5m，深さ50cm，断面形が逆台形を呈し調査地東端で２条に分岐する溝である。SD05は幅1.1m，深さ40cm，断面形が逆台形を呈し，調査地西端で２条に分岐している溝である。溝SD02～05はすべて東西方向で方向性を同じにすることから，関連する性格のものであろうか。SD02より甕(6)，SD05より甕(7,8)が出土している。

甕(6)は口縁端部の摘み上げが顕著であり，口縁部端面に２条の擬凹線が巡る。甕(7,8)は口縁端部が丸みをもち，甕(7)の体部外面には縦位のハケ，体部内面には横位ハケ＋縦位ヘラケズリが施される。甕(8)の体部外面は縦位ハケ，体部内面上半は横位ハケ調整である。

（iii）**土壙SK01**（第3,6図，図版2）

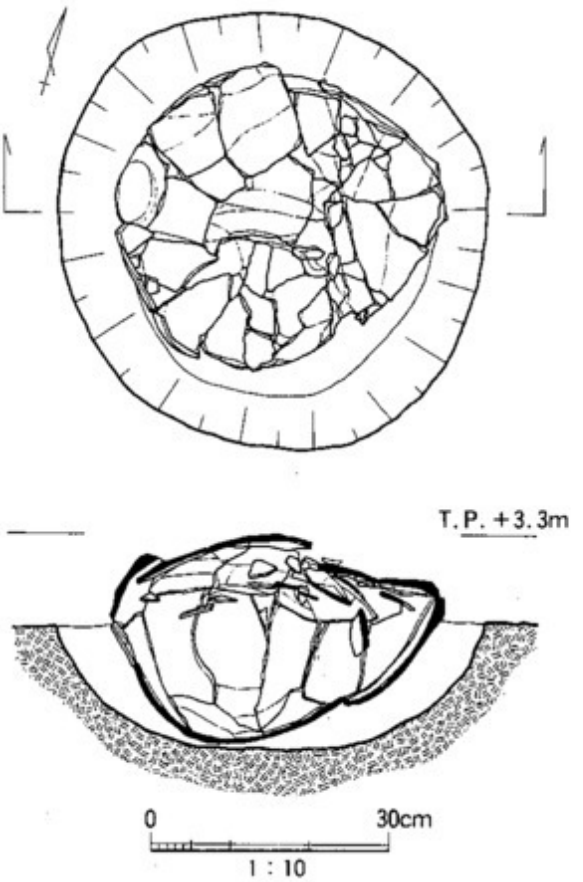
後世の柱穴により一部破壊されているが、平面形が不整方形を呈し，深さ40㎝を測る。底部よりミニチュア壷(2,3)，壷(4)が出土している。ミニチュア壷(2,3)は口縁部を欠損する。

（iv）**土壙SK02**（第3,6図）

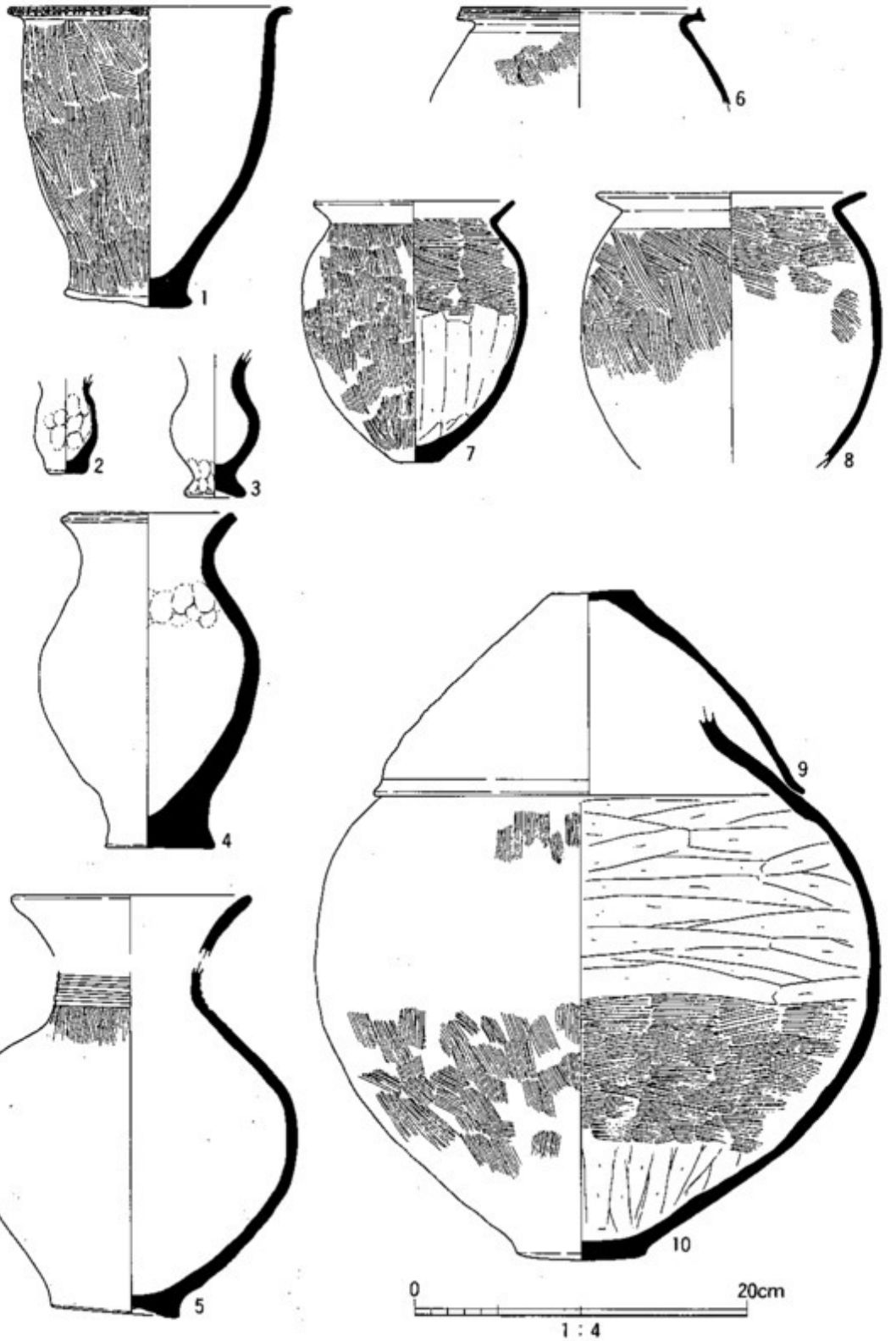
調査地外へ広がる落込であり，深さ60cmを測る。出土遺物には壷(5)がある。壷(5)は口縁部が大きく外反し，頸部に５条＋αの多条沈線が施される。

（iii）**土器棺SI01**（第3,6図，図版2,3）

平面形が径60cmの円形を呈し，深さ20cmを測る土壙に，広口壷(10)と鉢(9)との組み合わせによる埋葬棺である。広口壷(10)は頸部以上を打ち欠き、体部外面にハケ、体部内面は縦位ヘラケズリ＋横位ハケ＋横位ヘラケズリが施されている。



第６図　土器棺SI01



第７図　溝SD01(1), SD02(6), SD04(7,8), 土壙SK01(2～4), SK02(5), 土器棺SI01 (9,10)出土遺物

6　奈良時代

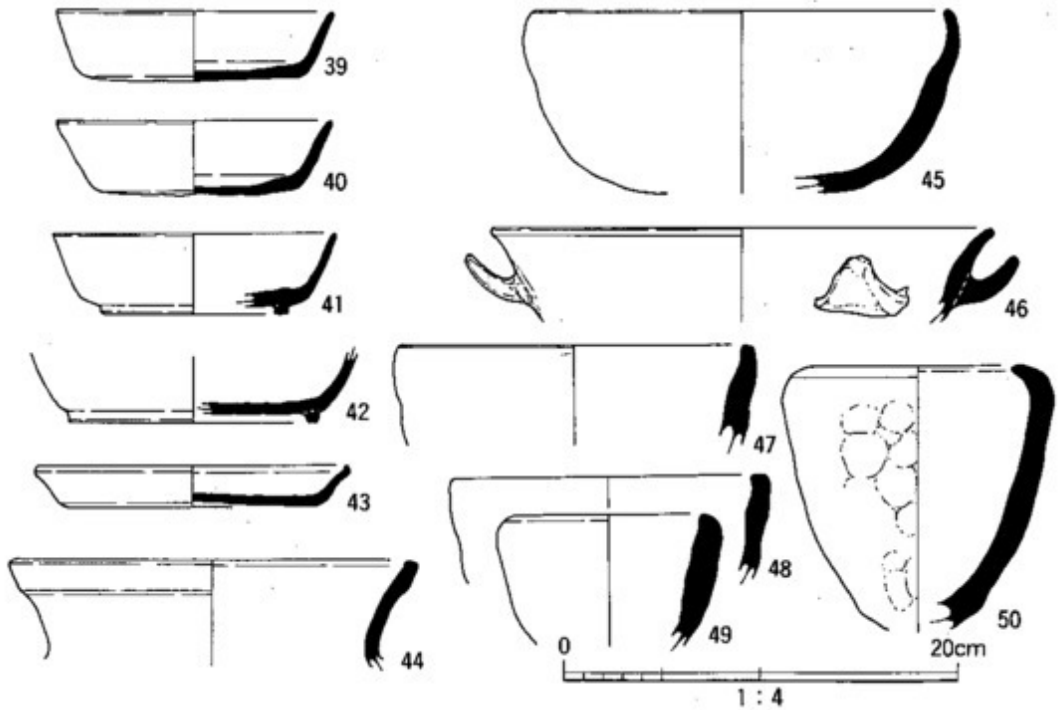
（ｉ）竪穴住居跡SA01（第3,8,9図,図版6,12～15）

長辺7m，短辺3.5mの平面形が長方形を呈し，深さ20cmを測る。周囲に幅30cmの小溝が巡り，住居跡であると考えられるが，内部に柱穴あるいは火の使用痕跡は見られない。住居内無柱穴の建物であろうか住居内に素掘井戸SE01が存在するが，円弧状に巡る溝とセット関係になるものと考えられ，住居内遺構であるとは考え難い。

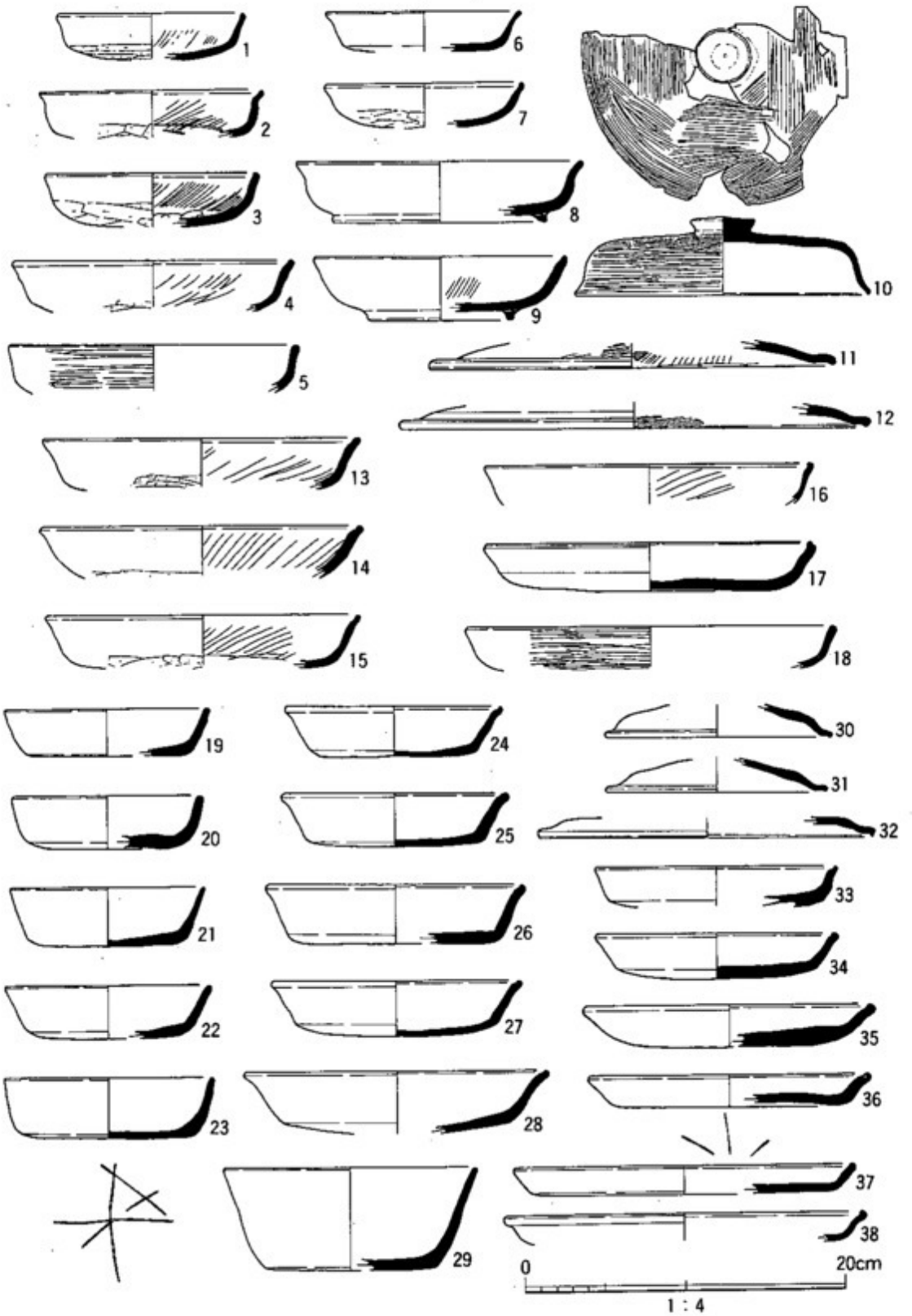
出土遺物には土師器坏A(4,5,13～15),坏B(8,9),坏C(1～3,6,7)，皿(16～18),壺蓋(10)，蓋(11,12)，鉢(45)，鍋（46)，須恵器坏A(39,40)，坏B(41,42)，皿(43)，壺（44)，製塩土器(47～50)がある[1]。器種構成においては坏A,Bを中心に皿形化した坏Cが主形となり，器種と法量分化が進展している状況を示している。

土師器坏(1～5,7,13～15)は底部外面にヘラケズリが施され，(1,9,13,16）の内面には１段放射状暗文，(2,3,4,15)の内面には１段放射状暗文とラセン状暗文が施される。(5,18)の体部外面にはヘラミガキが施されている。土師器(1～18）は胎土，手法から畿内産土師器であると考えられる。

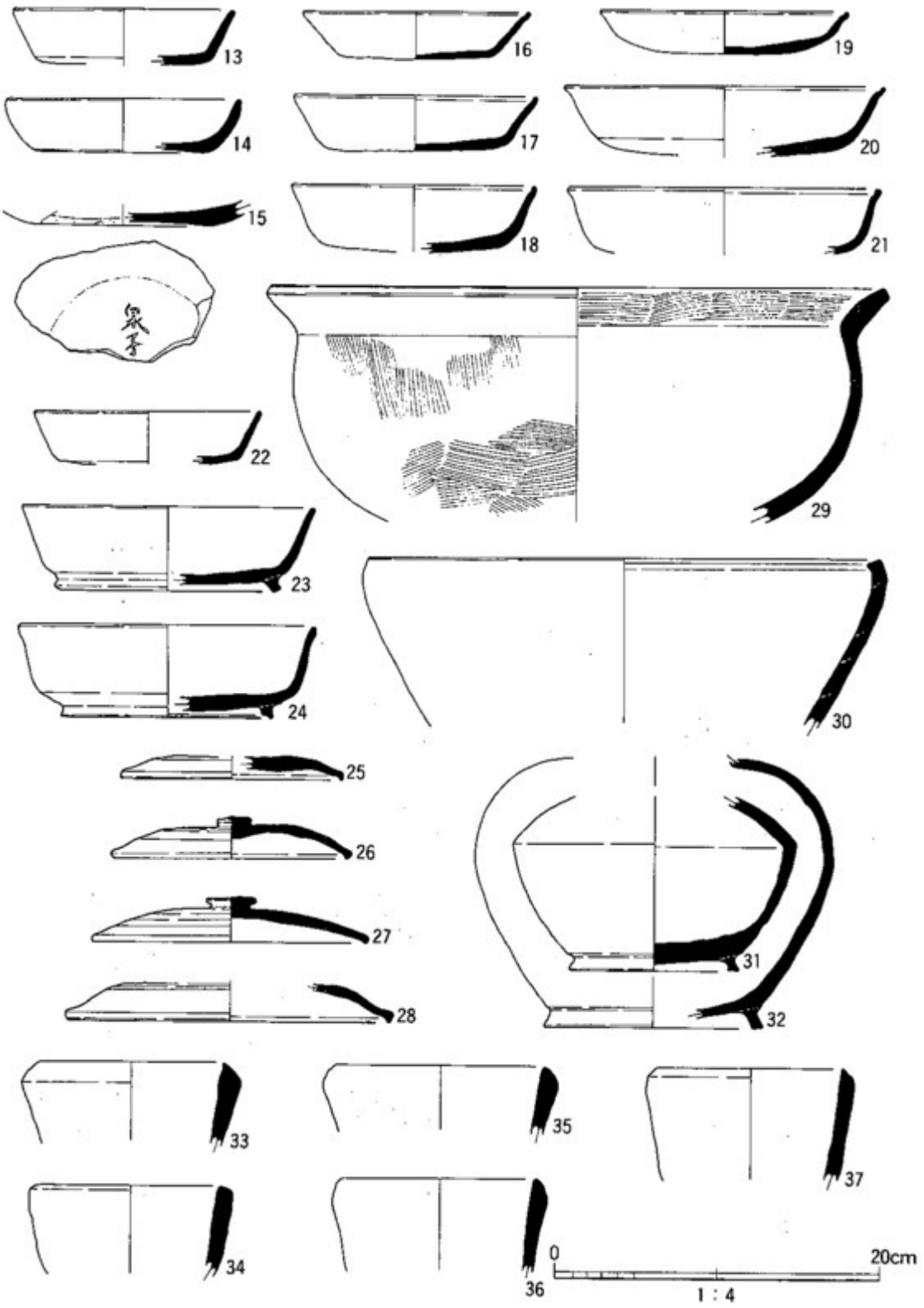
土師器(19～38)は在地産の回転台土師器である。坏は底部から直線的に立ち上がる体部に口縁端部を丸くおさめたもの(19～23,29)，口縁端部を肥厚させるもの(24～28)がある。皿(33～38)は口縁端部を肥厚させている。坏(19～23,29)は須恵器坏形態の模倣であり，坏(24～28),蓋(30～32),皿(33～38）は畿内産土師器形態の模倣である。土師器鉢(45)は金属器模倣である。なお



第８図　竪穴住居跡SA01出土遺物



第９図　竪穴住居跡SA01出土遺物

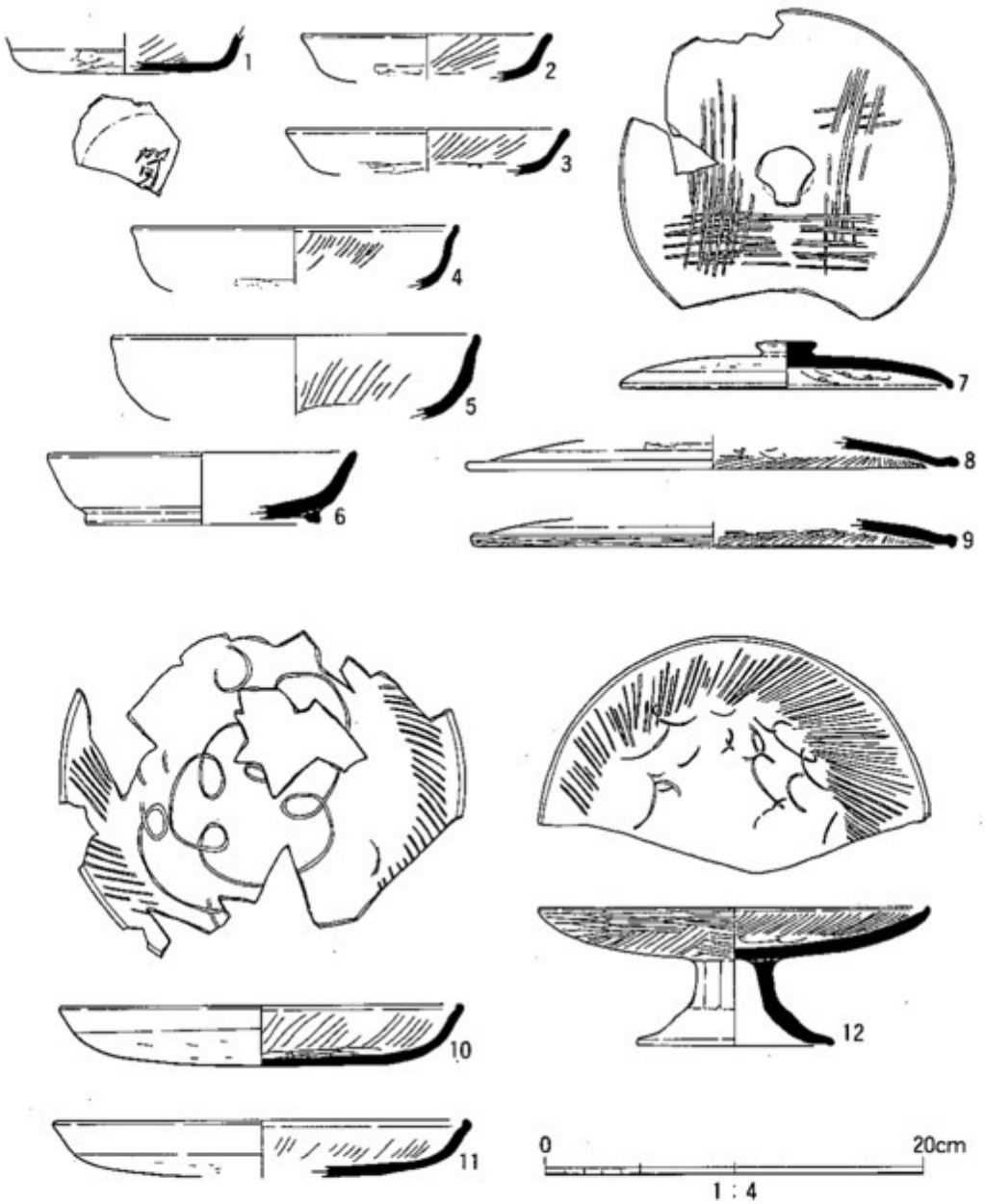


第10図　竪穴住居跡SA02出土遺物

坏(23)，皿(36)の底部外面にはヘラ記号が施される。また在地産土師器には赤色顔料塗彩を施した痕跡が見られるもの(19,22～26,28,30～38)がある。

（ii）**竪穴住居跡SA02**(第3,10,11,図版6,16～18)

長辺8m、短辺4mの平面形が長方形を呈し，深さ20cmを測る。周囲に幅40cmの小溝が巡り，SA01より古相の住居跡であると考えられるが，内部に柱穴あるいは火の使用痕跡は見られない。



第11図　竪穴住居跡SA02出土遺物

住居内に長径1.5m,短径1.2mの不整長円形を呈す土壙SK03と一辺1.5mの不整方形を呈する土壙SK06が見られ，住居外の西隣に長径2.3m,短径2.0mの不整長円形を呈すSK07が存在する。SA01との関連を考慮すれば，SA01の付属遺構としてSK03とSK06，SA02の付属遺構としてSK07の可能性が考えられる。

出土遺物には土師器坏A(1,5,13,14,16～18,20～22),坏B(6)，坏C(2～4,19),椀?(15),皿(10,11),蓋(7～9),高坏(12),鍋(29),須恵器坏B(23,24),蓋(25～28),鉢(30),壺(31,32),製塩土器(33～37)がある。

土師器坏(1～5)，皿(10,11)は底部外面にヘラケズリが施され、内面には1段放射状暗文もしくはラセン状暗文が施される。胎土，手法から畿内産土師器であると考えられる。坏(1)の底部外面には「賀」の線刻が見られる。坏B(6)，蓋(7),高坏(12)は畿内産土師器の手法および形態を模倣したものであろう。

(7,12)は赤色顔料塗彩の痕跡が残る。

坏(13,14,16～22)，椀?(15)は在地産の土師器である。坏(13,14,16～22)は回転台土師器であり(13,14,22)は須恵器坏形態を模倣したもの，(16～21)は畿内産土師器を模倣したものである。

椀?(15)の底部外面には「泉子」の線刻が施され，(13,15～21)は赤色顔料塗彩の痕跡を残す。

須恵器坏B(23,24)の高台はハの字状に踏ん張るものであり，(23)は高台内側，(24)は高台外側が接地点となる。なお土壙SK03より須恵器甕(13)，土師器坏(14)，皿(15)が出土している。(14,15)は畿内産土師器である。

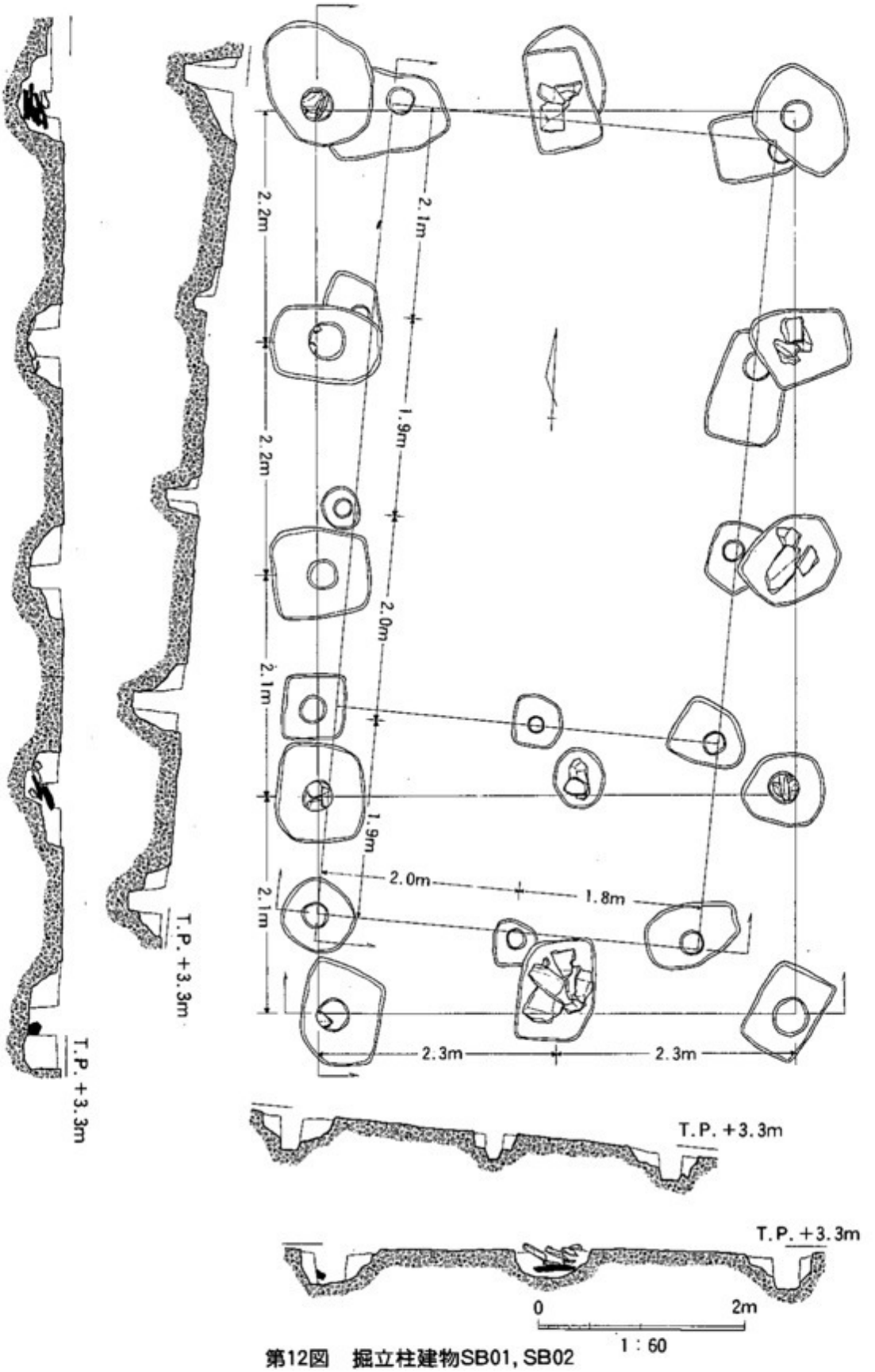
(ⅲ) 掘立柱建物SB01(第3,12,14図,図版4,6)

桁行4間×梁行2間の南北棟の建物である。柱間寸法は西桁行が南から2.1－2.1－2.2－2.2m，南梁行が2.3m等間である。柱間隔に整然性は見られないものの，梁行が等間であること，また桁行間隔1.9－2.1mで安定していることから，比較的企画性の高い建物であると考えられる。柱穴掘形は長辺0.8～1.0m，短辺0.6～0.8mの不整長方形を呈し，深さ30cmを測る。柱穴部は径30cmの円形を呈する。間仕切りのためであろうか，梁行南から2列目に柱穴を配している。なお柱穴底部には根石が施されるものが多い。SP01より土師器坏(1),SP02より土師器坏(2),SP03より土師器皿(3),須恵器蓋(5,7)，SP04より須恵器蓋(4),SP05より須恵器蓋(6)が出土している。

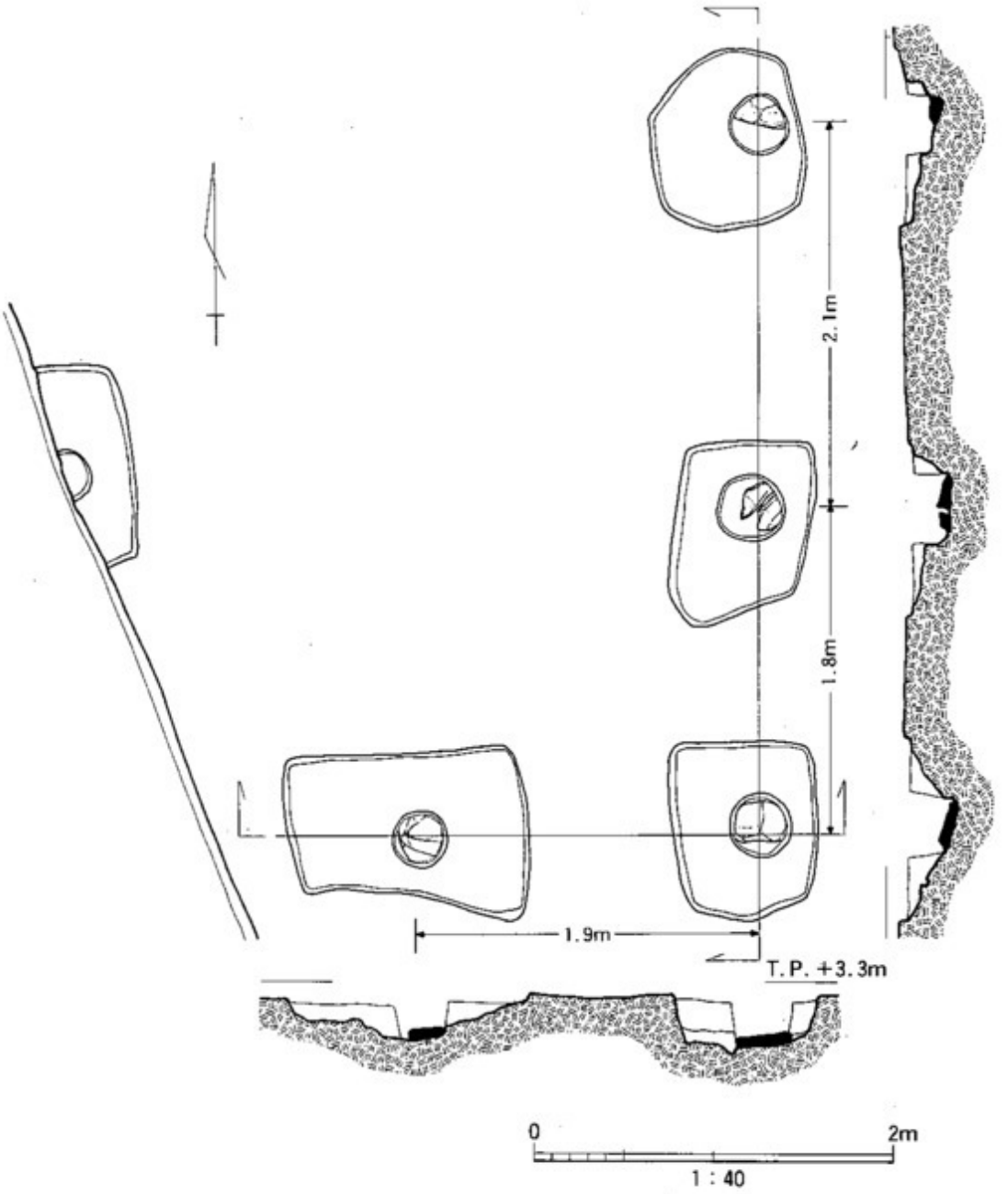
(ⅳ) 掘立柱建物SB02(第3,12,14図，図版4)

桁行4間×梁行2間の南北棟の建物であり建物SB01より古相である。柱間寸法は西桁行が南から1.9－2.0－1.9－2.1m，南梁行が西から2.0－1.8mを測る。梁行，桁行ともに柱間隔が一定せず，SB01に比較して企画性に劣る建物である。柱穴掘形は一辺40～60cmの方形および長辺0.8～1.0m，短辺0.5～0.8mの不整長方形を呈し，深さ20～50cmを測る。SB01同様梁行南から2列目に柱穴を配している。なお柱底部に根石を設置は見られない。柱穴部は径10～20cmの円形を呈する。

SP06より須恵器蓋(8)，SP07より須恵器蓋(9)，SP08より土師器坏(10)，甕(11)が出土している。



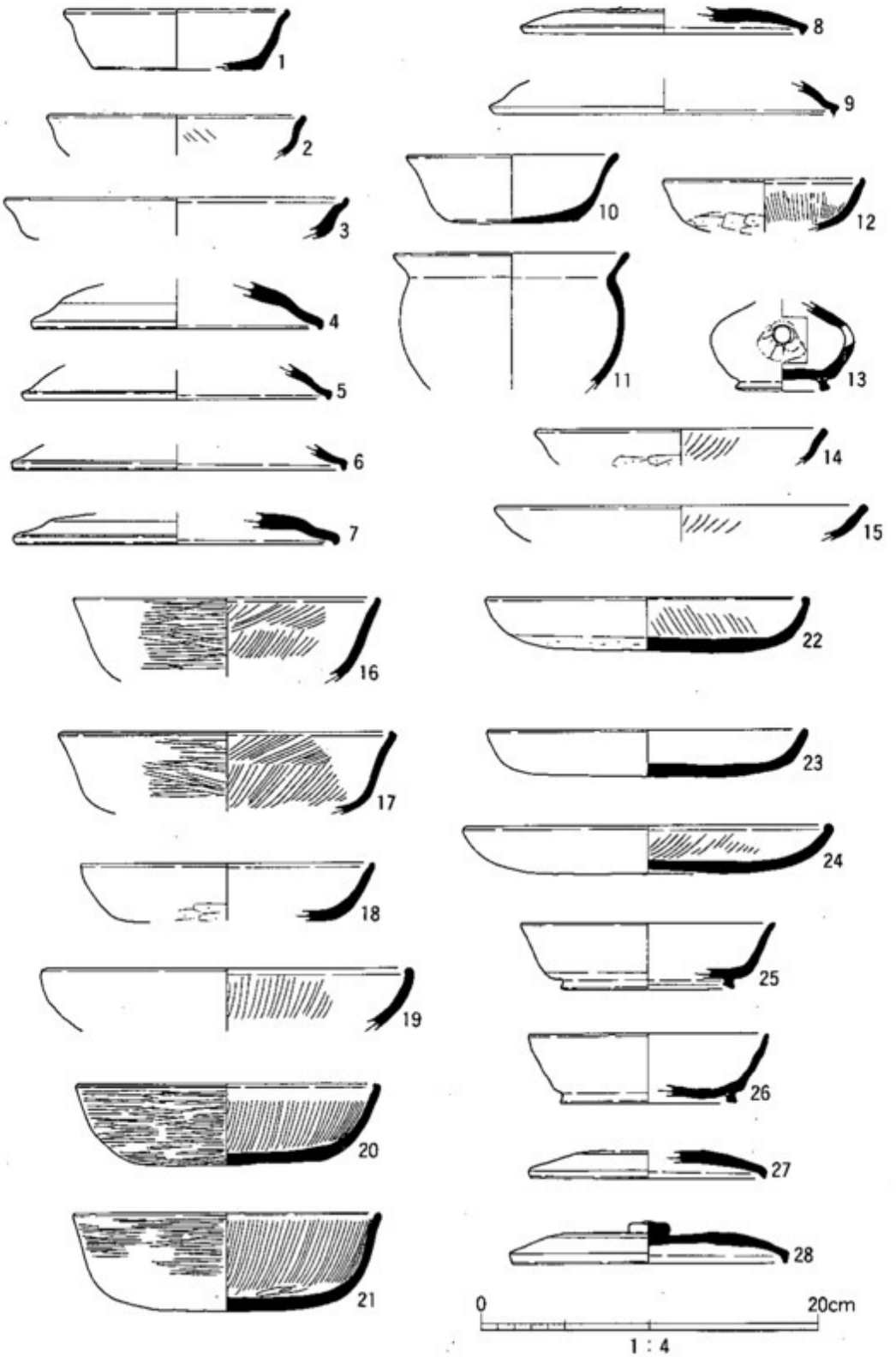
第12図　掘立柱建物SB01, SB02



第13図　掘立柱建物SB03

（ｖ）掘立柱建物SB03(第3,13図，図版4,6)

調査地内において桁行２間分×梁行２間を検出した南北棟の側柱建物である。柱間寸法は東桁行が南から1.8−2.1m，南梁行が東から1.9mである。柱穴掘形は長辺0.9−1.3m，短辺70㎝の長方形あるいは不整長方形を呈し，深さ30㎝を測る。西桁行南から２番目の柱穴は撹乱により半割されており明確ではないが，残りの柱穴には根石が置かれている。柱穴部は径30㎝の円形を呈する。



第14図　SP01(1), SP03(3, 5, 7), SP04(4), SP05(6), SP06(8), SP07(9), SP08(10, 11)SK03(13～15), SK04(12), SK05(16～28)出土遺物

（vi）掘立柱建物SB04(第3図)

桁行4間×梁行2間の東西棟の側柱建物である。柱間寸法は北桁行が1.8m等間，西梁行が南から1.6−1.3mを測る。柱穴掘形は一辺40cmの方形もしくは径40cmの円形，長径50～60cm，短辺30～40cmの不整長円形を呈し，深さは30cmを測る。

（vii）土壙SK04(第3図,図版14)

長辺1.2m，短辺0.6mの平面形が長方形を呈し，深さ30cmを測る。

出土遺物には土師器坏(12)がある。坏(12)は底部外面ヘラケズリ，口縁端部を肥厚させ，内面には1段正放射状暗文が施された畿内産土師器である。

（viii）土壙SK05（第3,14図,図版19)

長径2.0m，短径1.4mの平面形が不整長円形を呈し，深さ30cmを測る。一部撹乱を受けている。

出土遺物には土師器坏A(16～22),皿(22～24),須恵器坏B(25,26)，蓋(27,28)がある。坏(16,17)は体部外面にヘラミガキ，内面には2段放射状暗文が施される。(18)は底部外面にヘラケズリが施されている畿内産土師器を模倣したものである。坏(20,21)は体部外面にヘラミガキ，内面には1段放射状暗文が施される。いずれも畿内産土師器の模倣である。坏(20)と皿(23)，坏(21)と皿(22)は胎土の相違よりそれぞれがセット関係となる。

7　小結

弥生時代前期ならびに後期～古墳時代前期にかけての遺構が確認されているが，住居跡等生活諸遺構が見られない。調査地に隣接する徳島大学医学部構内あるいはその周辺地域では集落の存在がすでに確認されているが，この地域における集落構造において，当該地がどのような空間を占有していたものであるかは明確ではない。

掘立柱建物SB01～04，竪穴住居跡SA01,02はいずれも正方位指向の建物であり，周辺地域に残存する条里地割に一致するものではない。建物SB01と02は重複関係を示し，SB01ないしSB02とSB03との建物位置関係から並立は少し考え難い。建物SB01と03は柱穴底部に根石を配するものであり，中には上部構造の重量過多によるためであろうか，半割破壊しているものも見られる。なおこれらの建物群の存立は，出土遺物より8世紀前半に位置付けられる。

出土遺物の中で注目すべきは，畿内産土師器が比較的まとまった資料として提示されることである。畿内産土師器がまとまって搬入された遺跡の調査報告としては初見のものであり，遺跡，遺構の特殊性を示しているものと考えられる。他方，在地産土師器はすでに回転台成形によるものであり，その出現期が少なくとも8世紀前半にまで遡ることが明確した。

在地産土師器は形態，手法において①畿内産土師器の手法・形態模倣，②回転台使用による須恵器形態の模倣，③回転台使用による畿内産土師器の模倣に分類される。

①は畿内産土師器に対する直接的な意識が強く働いた結果の産物であり，②～③は在地における須恵器と土師器生産の分業崩壊や古代窯業生産構造の変質の表れとして理解される。いずれに

おいても在地の手法であるが，畿内産土師器に対する形態模倣，器種と法量分化の多様性さらには赤色顔料塗彩による色彩感覚に対する意識の強さは，明らかに律令的な土器様式を指向したものであろう。

畿内産土師器の豊富な出土量，製塩土器，線刻文字資料，鞴の羽口に見る出土遺物の特異さは，通例的には官衙遺跡としての性格を充分に示しているものと考えられる。ただ残念ながら類似資料に乏しく現状では十分な説明はできない。また律令時代に官衙遺跡として中心をなすべき阿波国府の成立の問題も現在未解決のままであるが，調査地周辺において少なくとも8世紀前半にはすでに存在していたであろう官衙遺跡の実態は，律令制社会における一地方の状況を考える上で貴重な資料に他ならない。

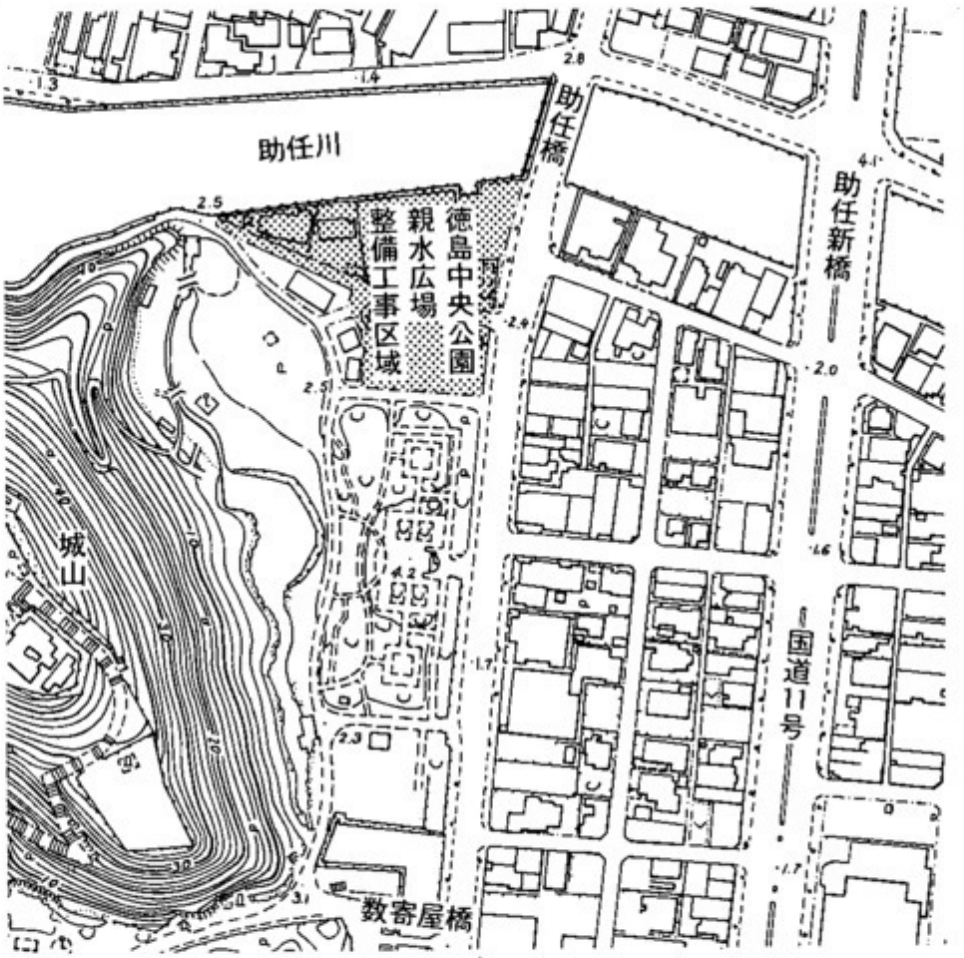
註

(1)　土器の名称については，奈良国立文化財研究所の用例に準じる。

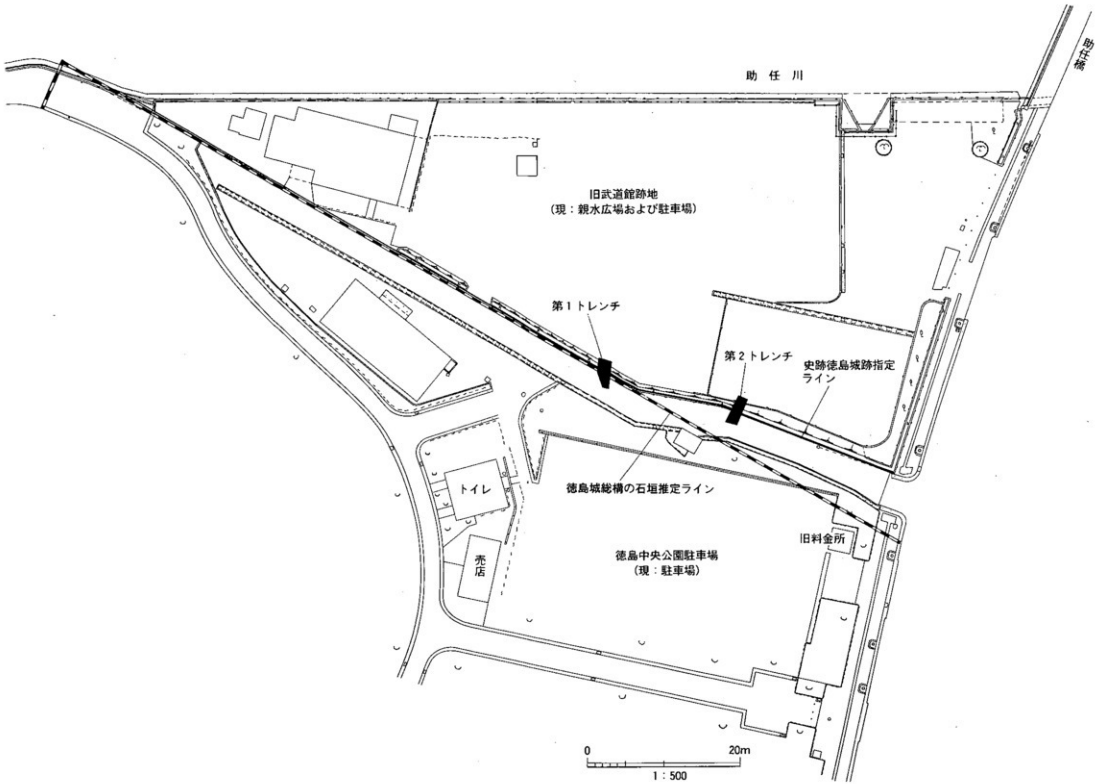
Ⅳ　徳島城跡（確認調査）

1　調査に至る経緯と経過（第1,2図，図版3）

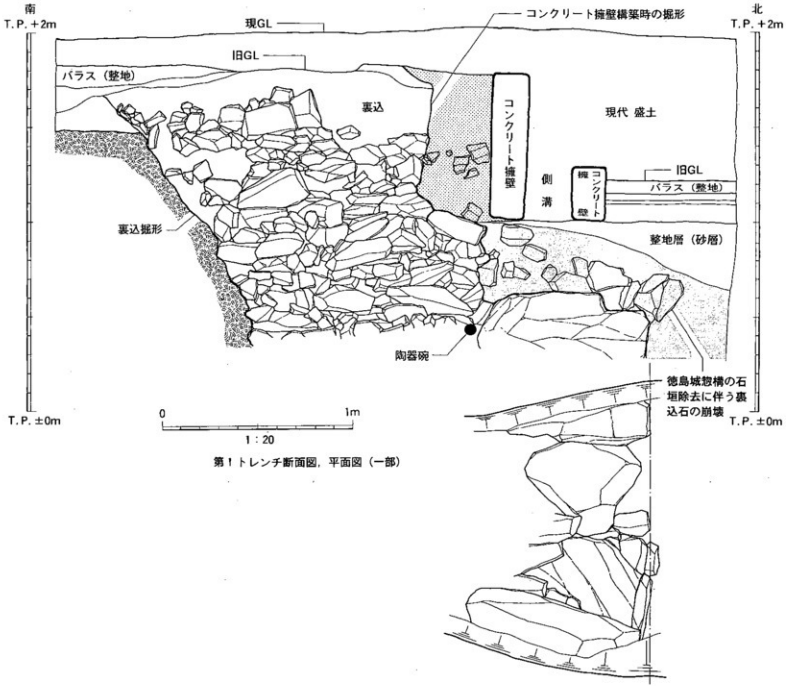
天正13年（1585）豊臣秀吉より阿波守の任を命じられた蜂須賀家政は，名東郡一宮城を居城としたが，後に名東郡富田庄猪山の城郭を修築し居城と定め，この時「渭津」を改め「徳島」と称している。徳島城は同年11月より普請された平山城式屋形造りの城郭である。本丸は猪山山上に，御屋敷を山下に設けた。同14年(1586)の蜂須賀家政の入城以来，慶長５年(1600)関ケ原の合戦時には，一時豊臣家に返上されたものの，14代茂韶に至るまでの約 300年間，蜂須賀家歴代の居城として，また阿波国統治の拠点として存続した。しかし明治維新後，版籍奉還に伴い明治２年(1869)には知藩事の政庁に当てられ，同６年(1873)には陸軍省の管轄に移った。さらに同８年(1875)には陸軍省による取り壊しが行われ，大手門にあたる鷲の門だけが残されたが，昭和20年(1945)の空襲により焼失した。なお昭和38年(1963)に市指定史跡に認定されている。



第１図　調査地位置図

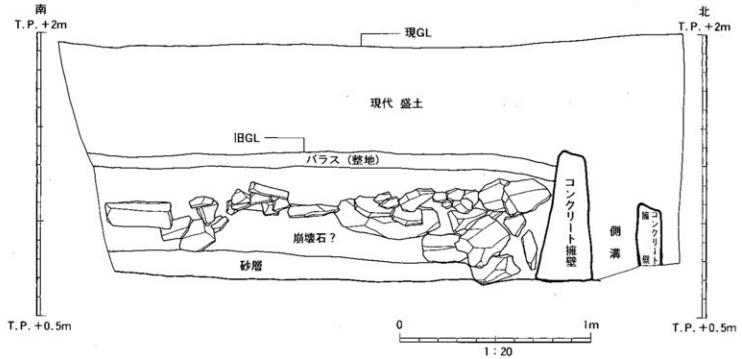


第2図　調査地概略図（地形状況は工事施工前）

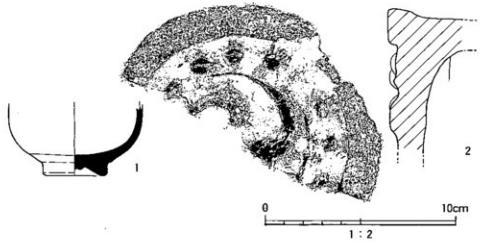


第1トレンチ断面図，平面図（一部）

第3図　断面図，平面図（一部）出土遺物



第2トレンチ断面図



第1トレンチ出土遺物

徳島城跡における発掘調査は，昭和51－52年(1976－1977）の市立内町小学校建設工事に伴う西之丸での調査[1]を始めとし，昭和62年(1987)の県立武道館建設工事に伴うお花畠での調査[2]，昭和63年(1988)のタイムカプセル設置事業に伴う調査，昭和63年－平成元年(198－1989）の鷲の門前広場整備事業に伴う調査[3]，さらには平成２年(1990)徳島城博物館建設工事に伴う旧表御殿跡での調査が実施されており，徳島城内における各施設の解明に貴重な資料を提供している。

今回の調査は徳島市公園緑地課の事業に伴うものであるが，事業内容は徳島中央公園駐車場の拡張と助任川親水公園建設を一体化した公園整備である。当初の協議において，旧武道館跡地が主体となり建設される親水広場は市指定史跡徳島城跡の範囲外であり，しかも藩政時代には助任川河川敷に位置していたこと，また駐車場部についてはアスファルト舗装の張替にとどまることから，慎重工事を前提として工事を進行させるものであった。ただし今回の工事対象地には徳島城跡総構の石垣が存在することが絵図から判明されており，工事に伴う石垣への影響が問題視され，このためトレンチ２箇所を設定し，石垣ラインの確定および工事に伴う遺構への影響の是非を目的に確認調査を実施した。なおトレンチ設定箇所については，徳島城跡の指定範囲ラインで石垣の残存を実視している証言が得られていることから，このライン上に従うものとした。

２　調査概要（第３図，図版4～7）

第１トレンチでは昭和34年(1959)に起工された旧武道館建設に伴う造成盛土以前に，徳島城総構の石垣を破壊し，コンクリート製の小排水溝を伴う擁壁が造られていることがわかる。この工事がいつ，いかなる目的で実施されたのかは定かでない。ただこの工事により，コンクリート擁壁を境界に北側部は80cmの段差をもって整地されていることから，河川敷に広場のような小フラット面を造成し，助任川面に自然傾斜させる修景変化が行われたものと想定される。

断面観察によると，この工事時に石垣石ならびに裏込の一部が破壊されて，裏込石の一部が助任川側に崩落している様子が窺える。裏込石には結晶片岩が多用されており，大きさ，形態は多様である。石垣石への破壊は基底部にまで及んでいるものではなく，現GLより－1.2mにおいて残存石垣石が確認されている。ただこの石垣石が基底石より何段目にあたるものかは不明である。裏込から陶器碗(1)，また崩落した裏込石と混在し左巻三ツ巴文軒丸瓦(2)が出土している。

第２トレンチでの断面状況は第１トレンチとは全く異なる。第１トレンチ同様にコンクリート製の小排水溝を伴う擁壁が確認されており，また裏込に使用されたと考えられる石材も見られるが，擁壁下位に残存すると考えられるべき徳島城総構の石垣石は存在しない。確かにこの位置に石垣が存在していたことは，コンクリート製擁壁への改修工事が実施されていることから確実であろう。ただ第１トレンチの状況を考慮すれば，コンクリート擁壁築造の工事規模で全壊に至る程，藩政時代の徳島城総構の石垣は簡易なものではないことは充分に想定される。またトレンチの下位には砂層の堆積が見られることから，この位置はかつて助任川の砂州上に位置するものとも考えられ，この位置に存在したであろう石垣の性格については多分に問題が残る。断面観察か

ら考えられることは，第1トレンチで確認した規模と構造を有する徳島城総構の石垣は，第2トレンチまで連続するものであるとは考え難く，規模および構造さらにはその性格を異にする石垣の存在が想定される。

3　小結

後世の土木工事により破壊されているものの，第1トレンチでは徳島城総構の石垣石の一部を検出している。しかし第2トレンチにおいては全く確認されなかった。石垣代替に伴う一連のコンクリート擁壁築造工事が実施されていることから，徳島城跡の指定ラインにおいて石垣が存在したことは確実であろう。ただし第2トレンチの状況から想定されることは，徳島城跡指定範囲のラインにおいて過去に残存し，徳島城総構と考えられていた石垣が必ずしも，藩政時代の総構であるとは肯定できないことである。

江戸時代後期に徳島城総構の石垣が描かれた絵図として，寛政8年(1796)の「御山下絵図」や安政年間(1854～1860)の「御山下島分絵図」徳島がある(4)（図版1,2)。両図は縮尺1/1300で描かれた非常に精巧な絵図であるとされる。両図において城山の北東コーナーから南東へ延びる石垣ラインに注目すると，助任川に沿って直線的に石垣が構築されていることが判る。第2トレンチの下位に見られる砂層は助任川の砂州と考えられることから，トレンチ設定位置はかつて総構の石垣より北側にあたる可能性があり，第2トレンチの位置に存在したであろう石垣は，藩政時代の徳島城総構の石垣である可能性は極めて低いものであると絵図からは推測される。

第1トレンチにおいて確認された石垣は，藩政時代の徳島城総構の石垣の残存であることは確実であり，城山北東コーナーから構築される総構の石垣ラインと指定範囲ラインとは，少なくともこの位置においては合致するものである。ただ問題となるのは，指定範囲ラインが北側へ張り出すように屈曲する位置から南東方向についてのラインであり，このポイントを分岐点とし二つの石垣ラインが想定される。

一つは絵図との対比において，この岐点からさらに直線的に延びるライン，すなわち第2トレンチ以南に存在するであろう藩政時代の徳島城総構の石垣であり，もう一つは助任川側に張り出すライン，すなわちコンクリート擁壁の一連の工事で破壊されたであろう石垣である。前者については，石垣の残存状況ならびに石垣ラインについての少なからずの理解を得ている。ただコンクリート擁壁の一連工事で破壊されたであろう後者の石垣の性格についての問題は解消されていない。1874年（明治7年）に助任橋架設工事が実施されるが，助任川護岸石として構築された石垣である可能性が想像的に考えられる。

註

(1)　徳島市教育委員会『文化財だより』No.1，1978年。

(2)　徳島県教育委員会『文化財だより』第19号，1988年。

(3)　徳島市教育委員会『文化財だより』No.23，24，1990年。
(4)　徳島城博物館『企画展　城下町徳島』パンフレット，1993年。

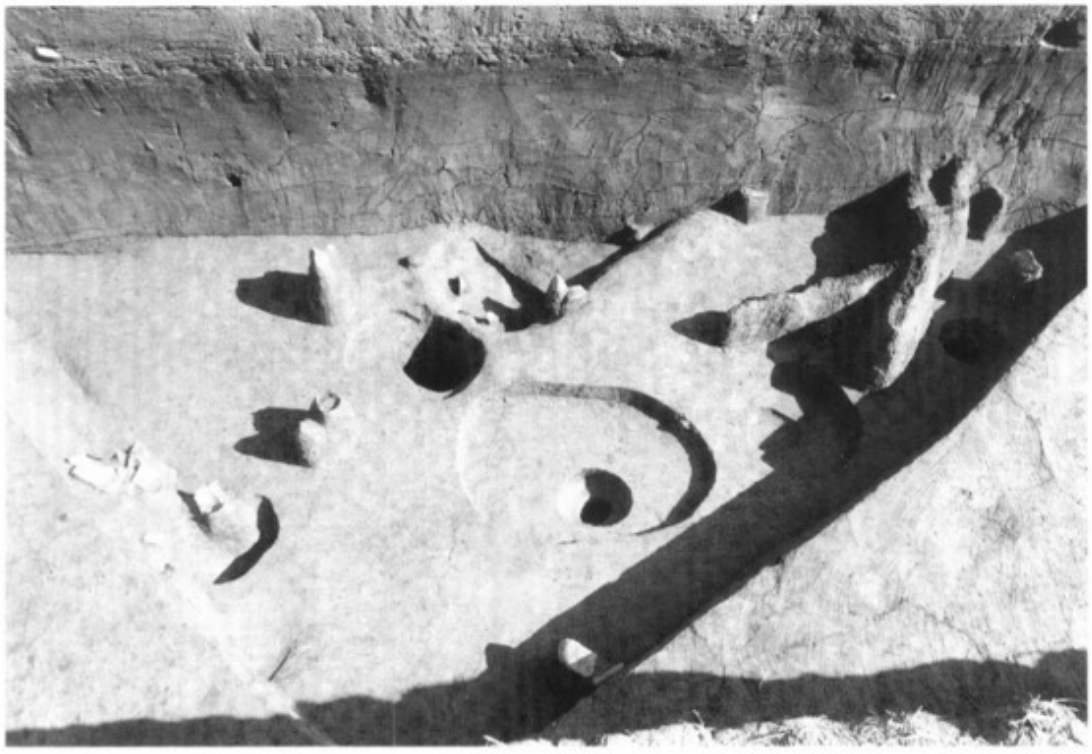
Ⅰ　矢野遺跡（農業用水路改良工事）

竪穴住居跡SA01　　東から

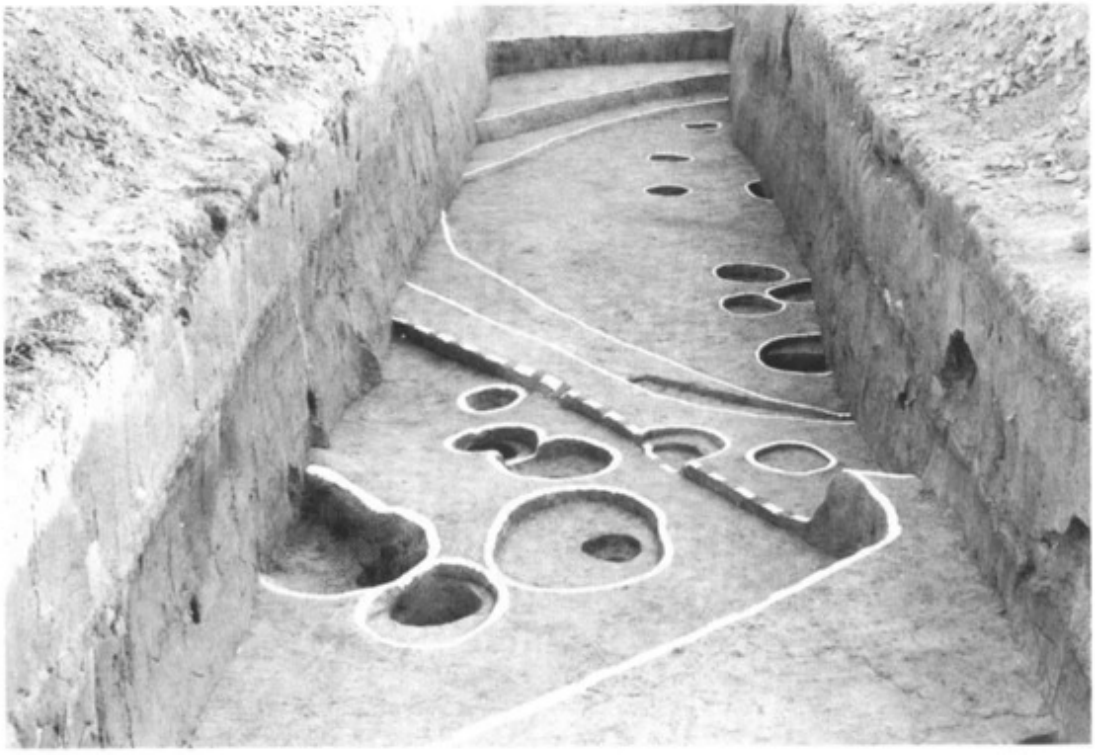
竪穴住居跡SA02　　北西から

図版2

竪穴住居跡SA03　南から



竪穴住居跡SA04　西から

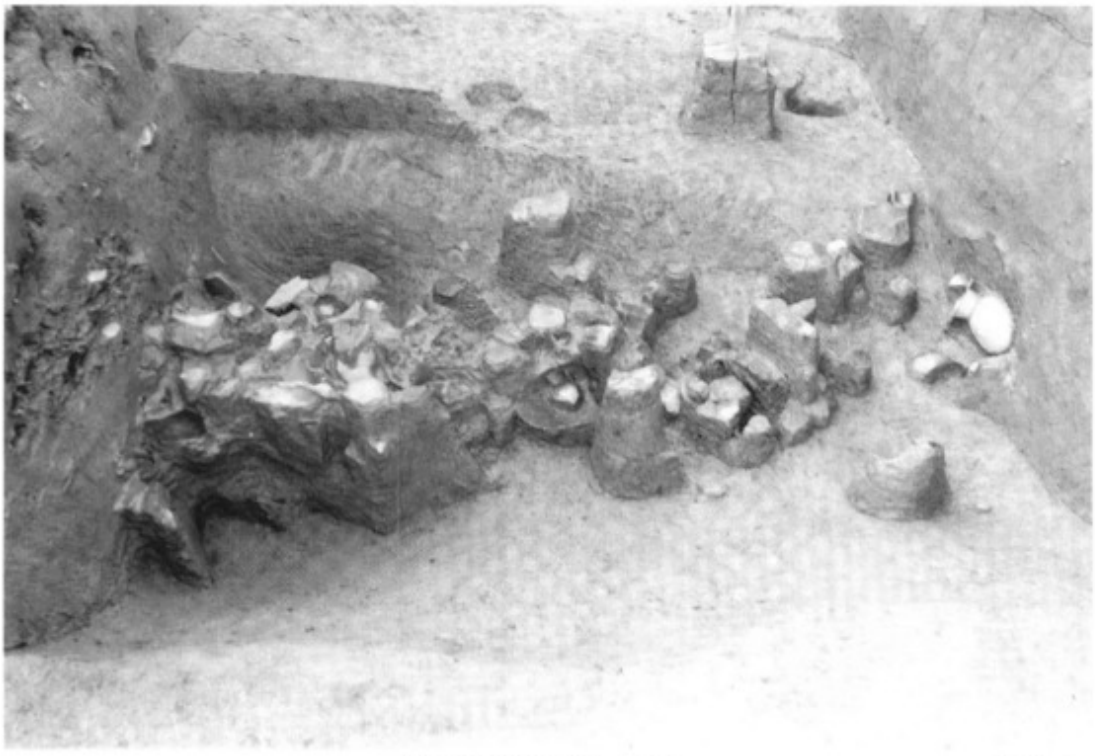


竪穴住居跡SA04, 06　　北から

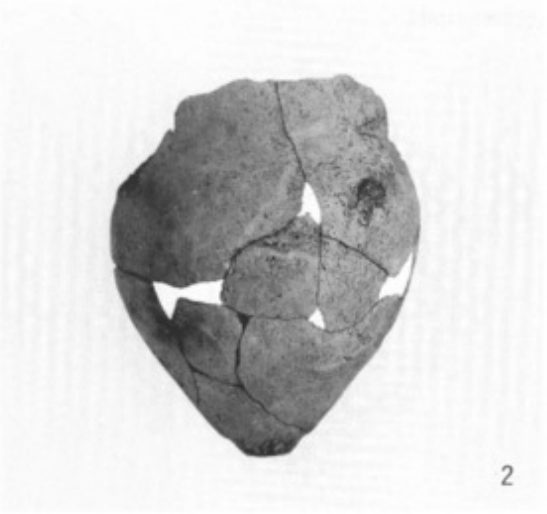
竪穴住居跡SA05　　南から

図版4

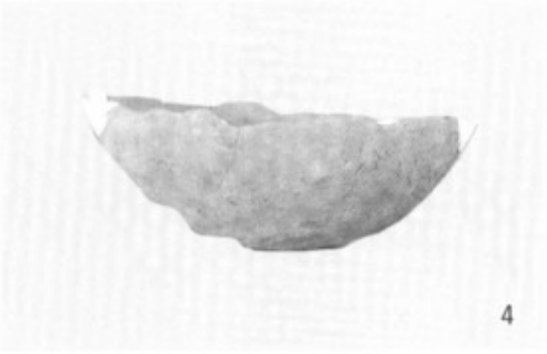
溝SD02遺物出土状況　南東から



溝SD02遺物出土状況　南から


2

13


4

16

10

19

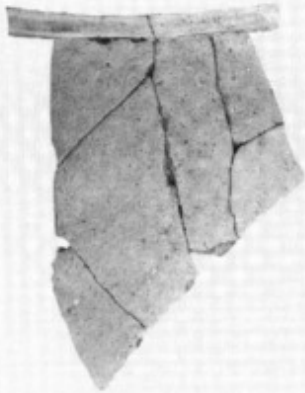
9

竪穴住居SA01(2), SA02(4), SA03(9, 10, 13), SA04(16, 19)出土遺物

図版6

21

24



20

27

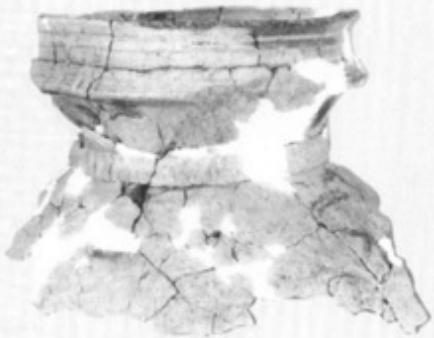
28

竪穴住居跡SA05(20,21),06(24),07(27,28)出土遺物

29

30

31



34

32

33

溝SD02出土遺物

図版8

38

40

39

41

43

77

45

溝SD02出土遺物

78

79

80

81

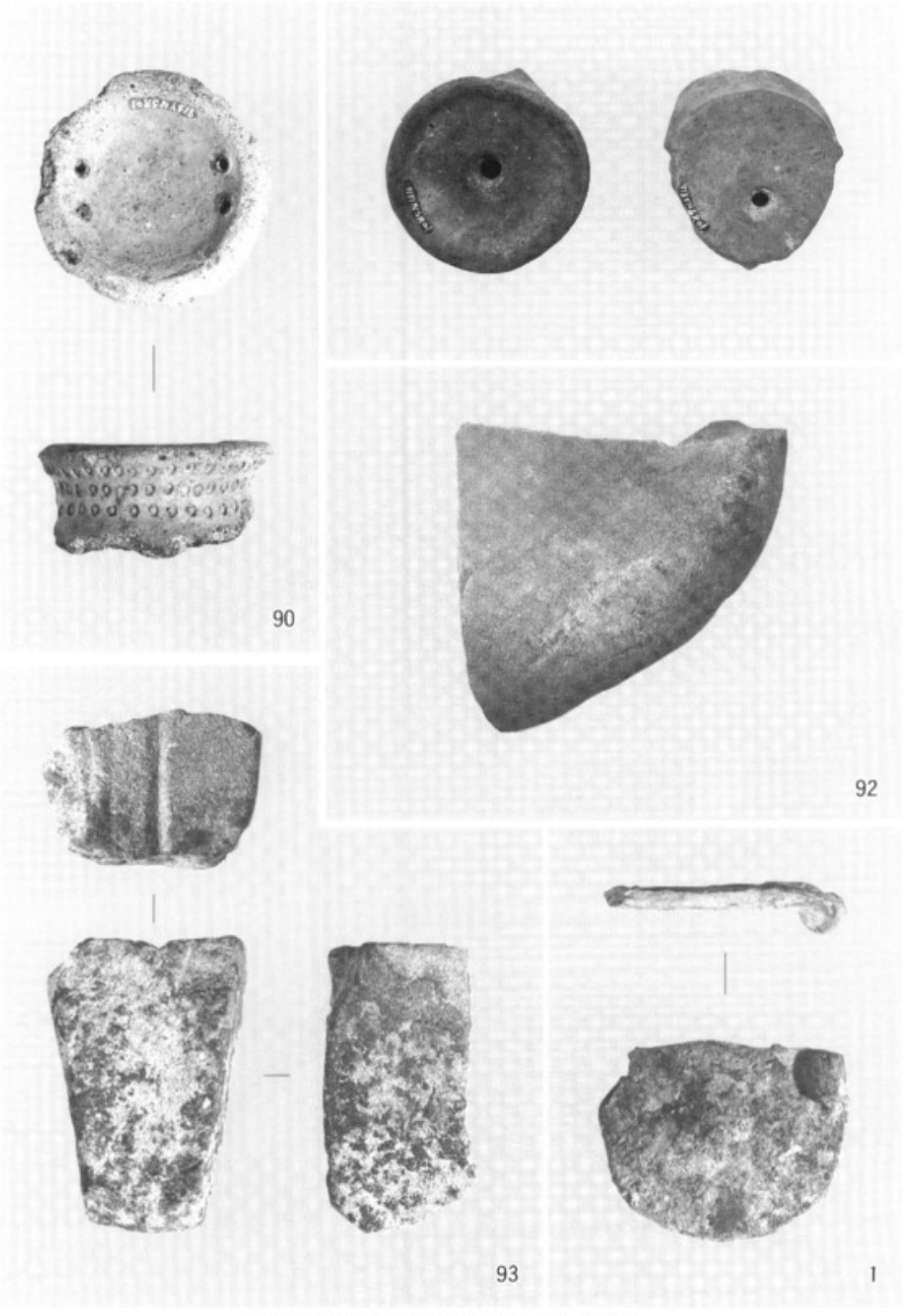
82

84

85

溝SD02出土遺物

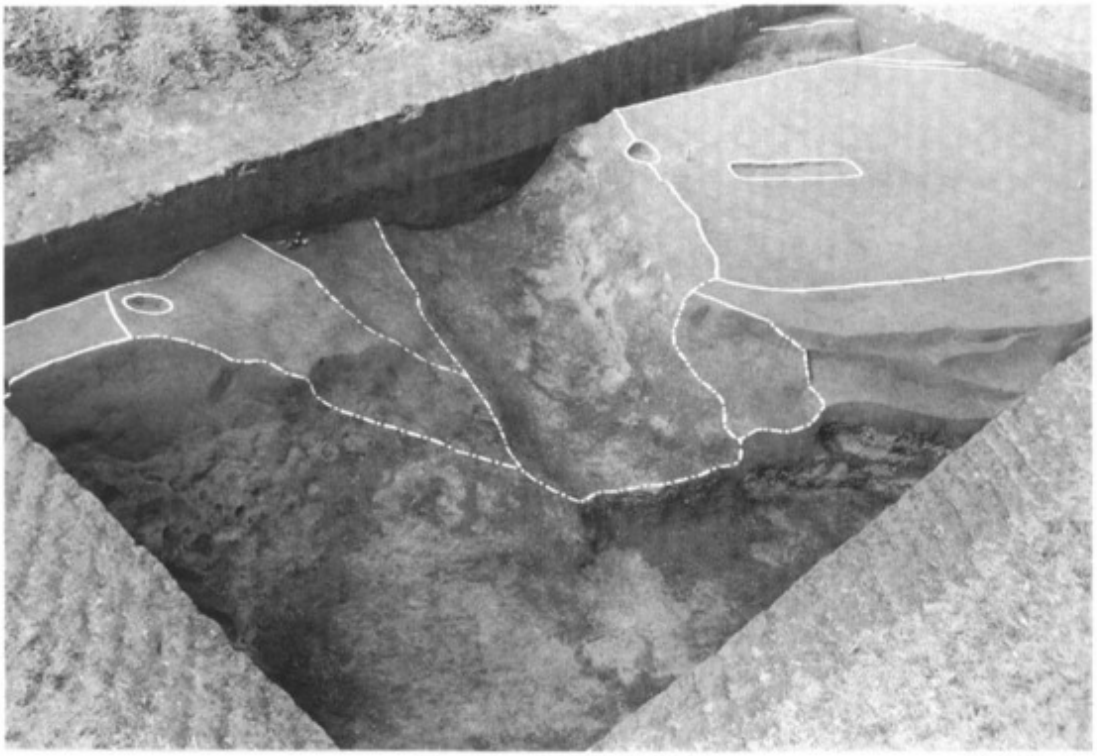
図版10



竪穴住居跡SA03(1)，溝SD02出土遺物

II　名東遺跡（マンション建設工事）

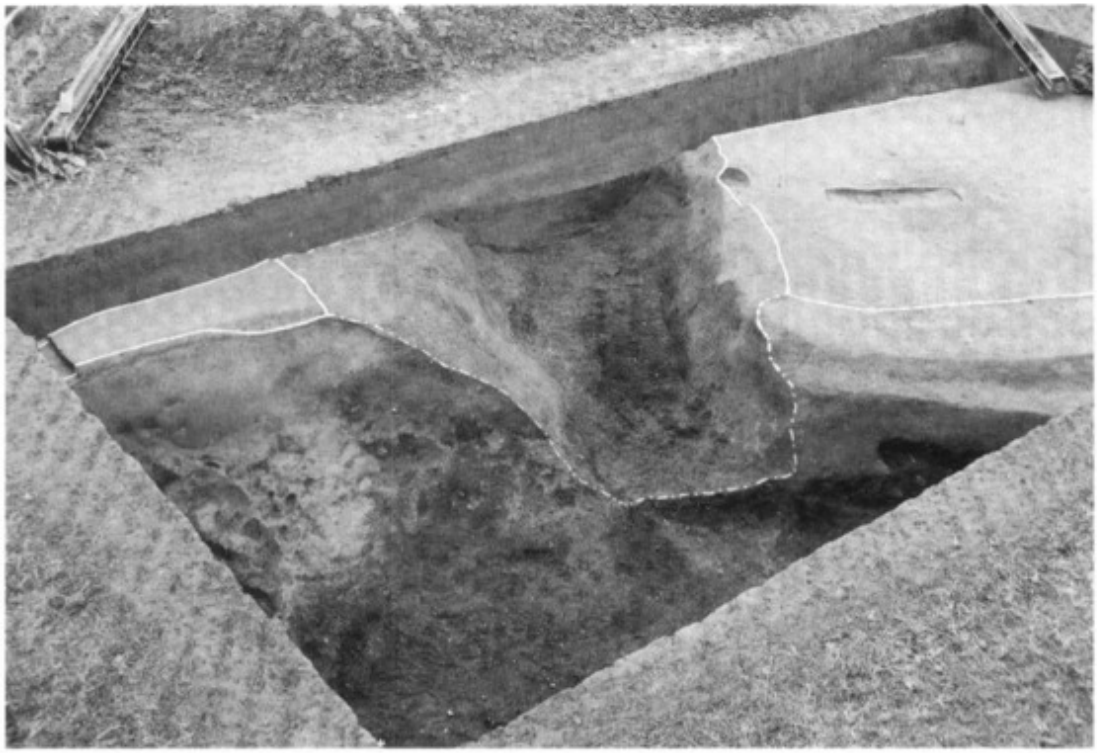
調査地全景　南西より



溝SD01～04検出状況　南西より

図版2

溝SD01断面土層　　東より

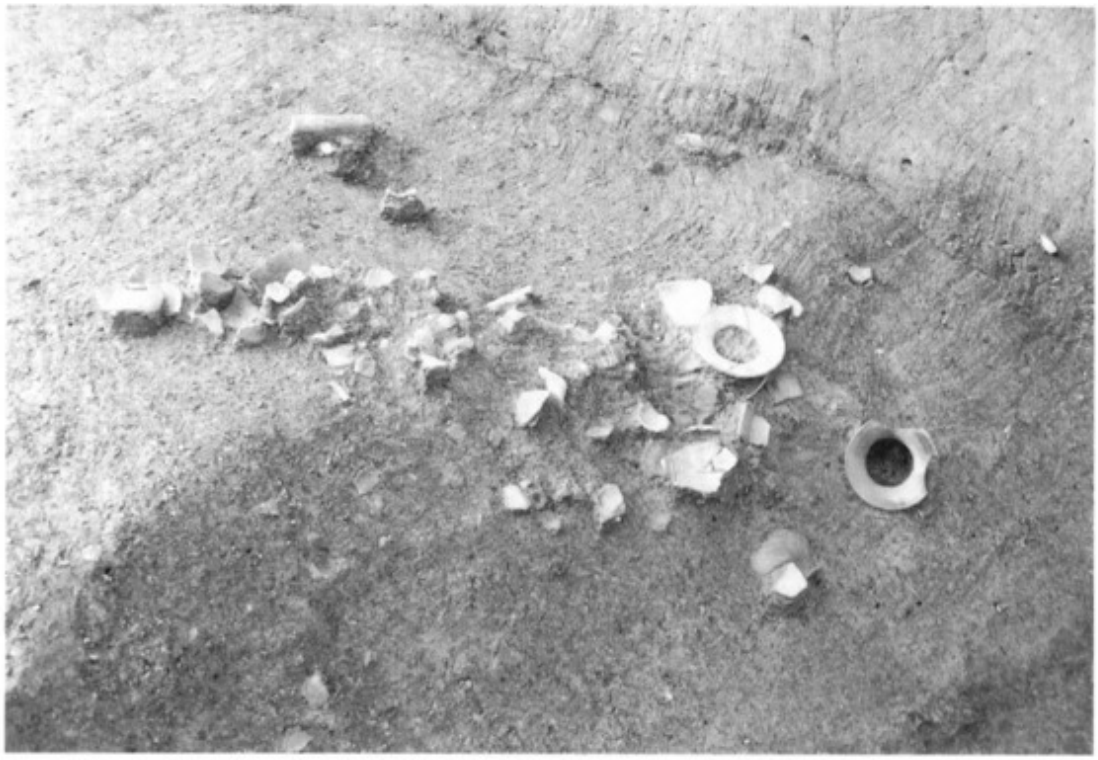


溝SD02検出状況　　南西より

溝SD01遺物出土状況（土師器坏と弥生土器高坏の混在）　北西より

溝SD01遺物出土状況（土師器小皿）　南より

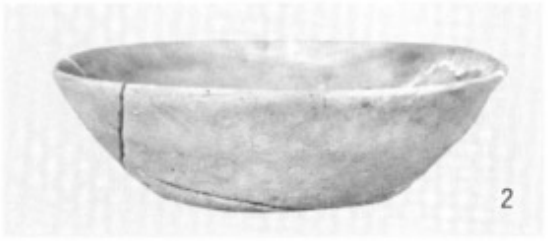
図版4



溝SD04遺物出土状況　南東より

溝SD04遺物出土状況　南東より

1


2

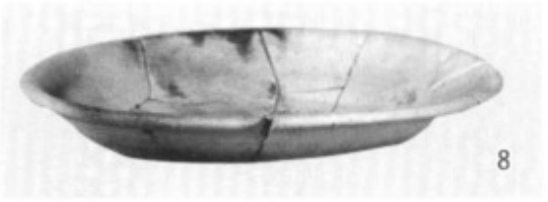
3

4

5

6

7

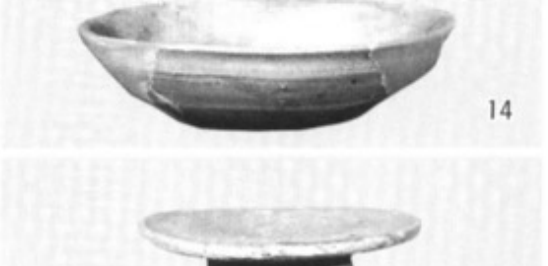

8

9

10

11

12

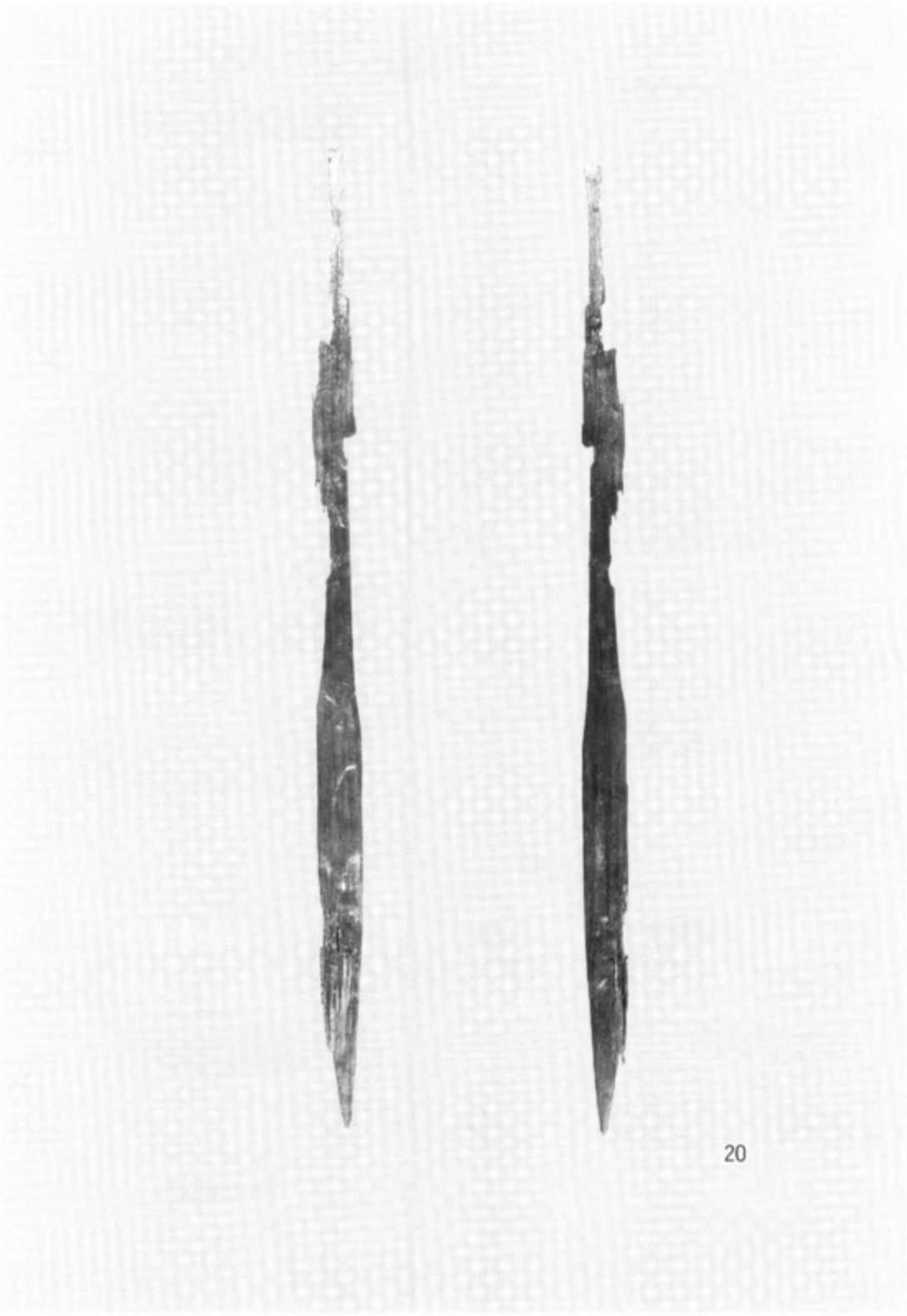

13

14

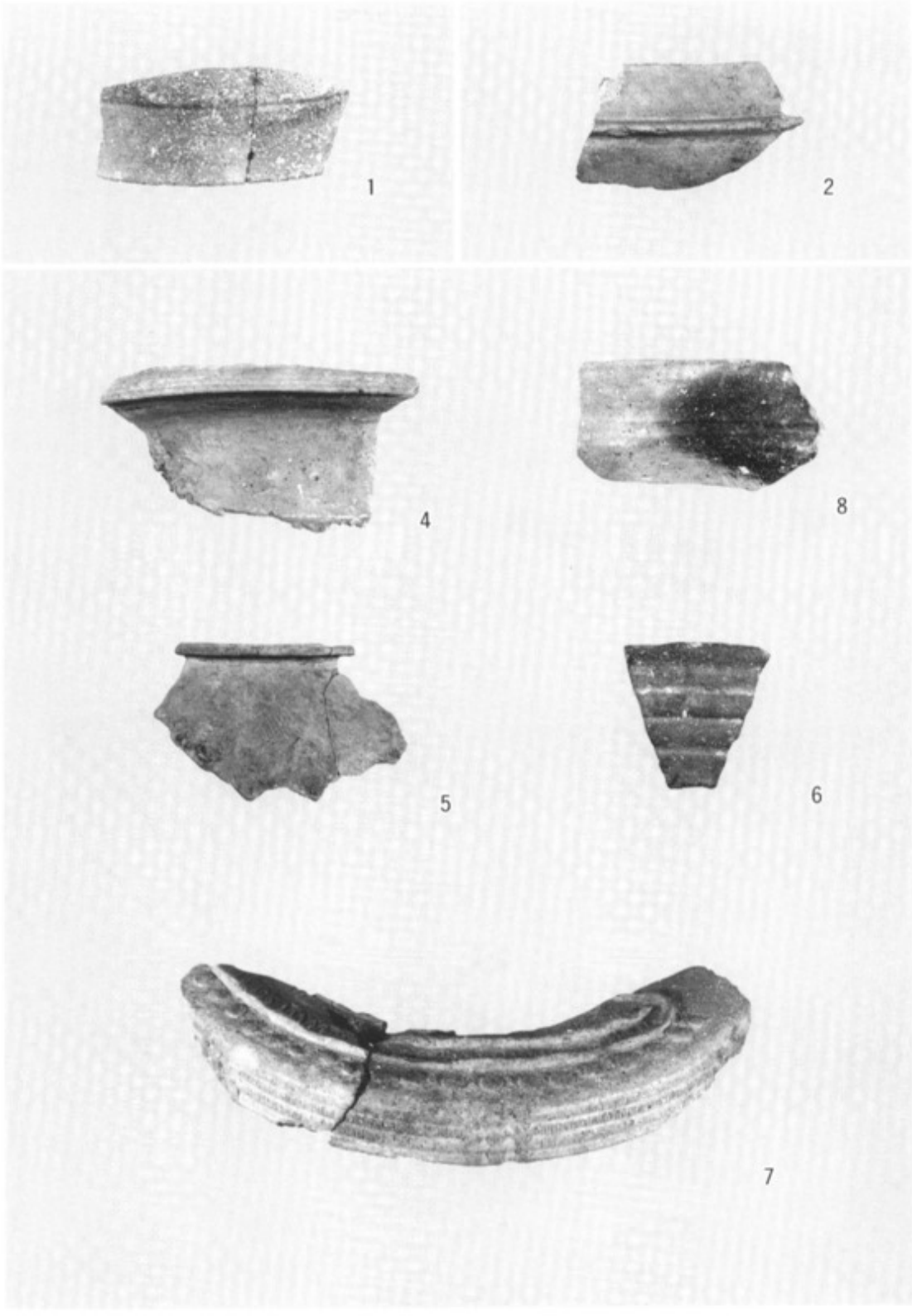
15

溝SD01出土遺物

図版6

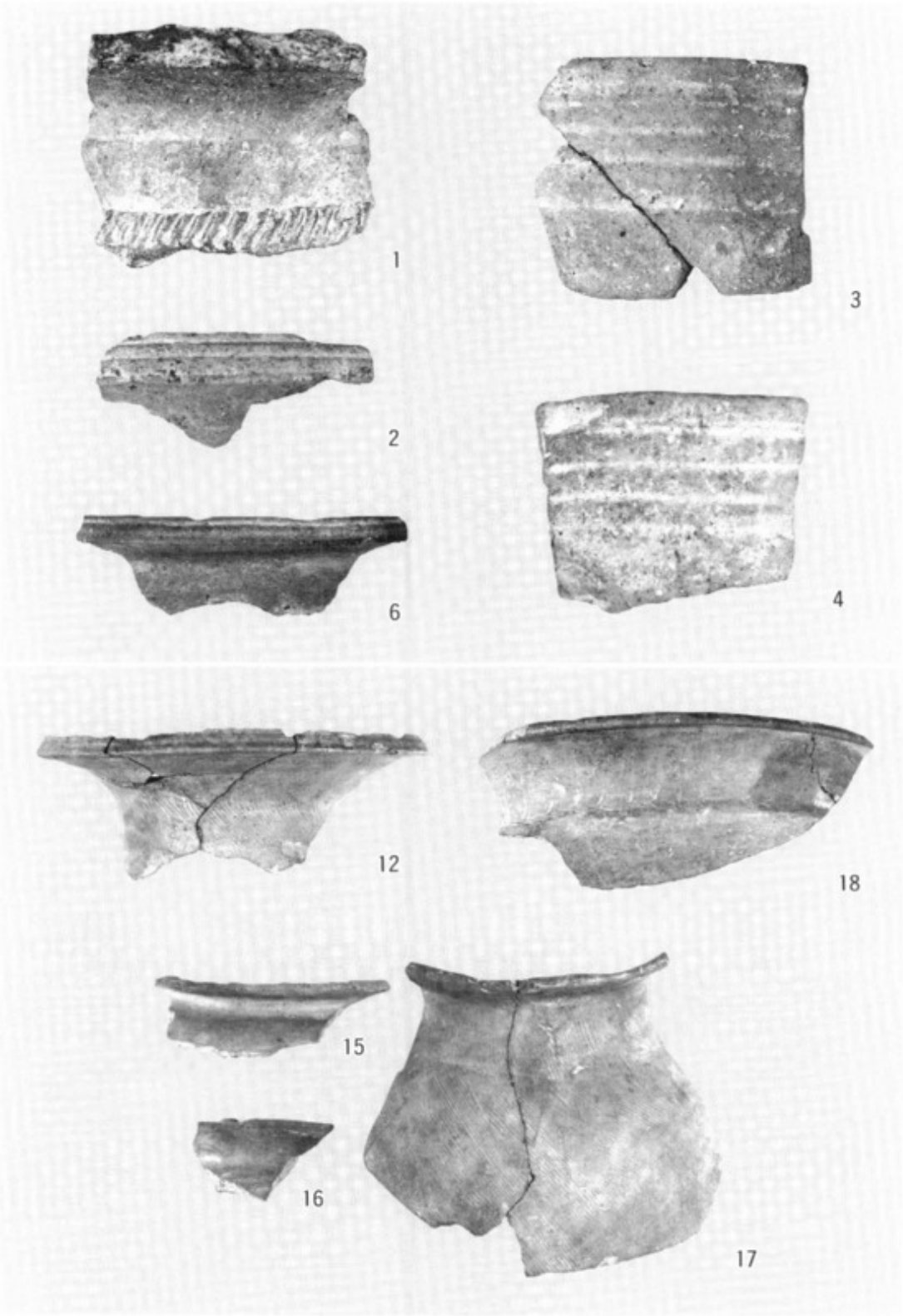


溝SD01出土遺物



溝SD03出土遺物

図版8



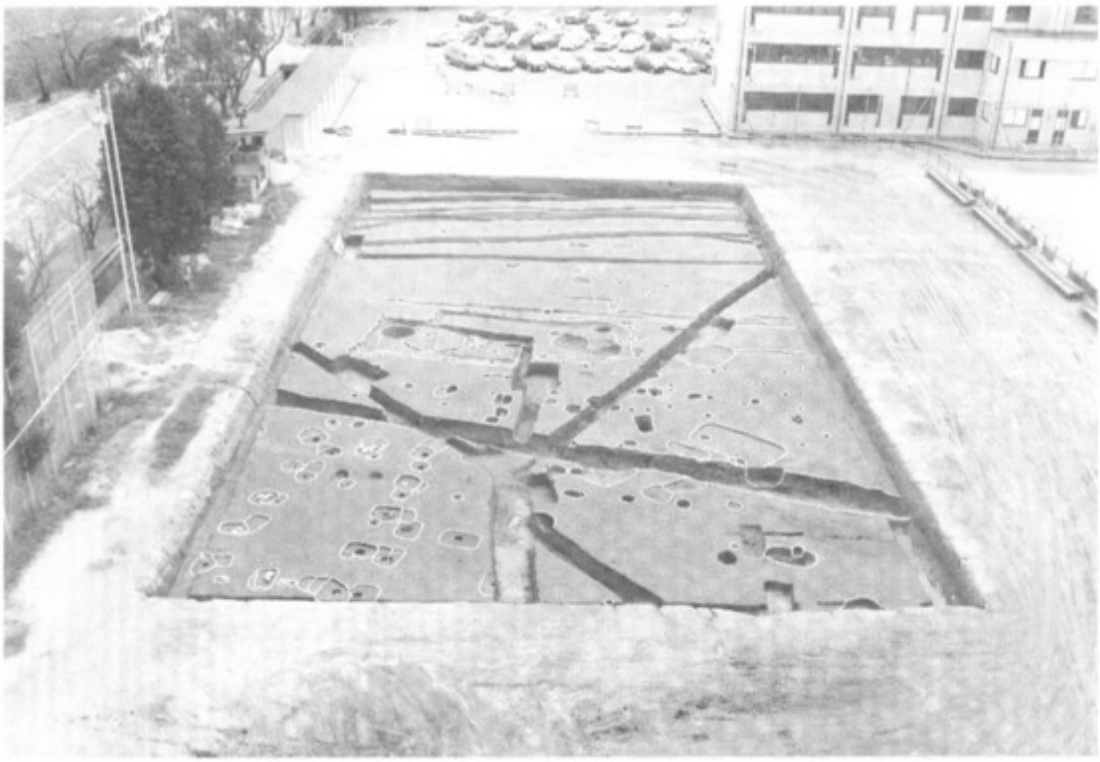
溝SD04出土遺物

13

14

溝SD04出土遺物

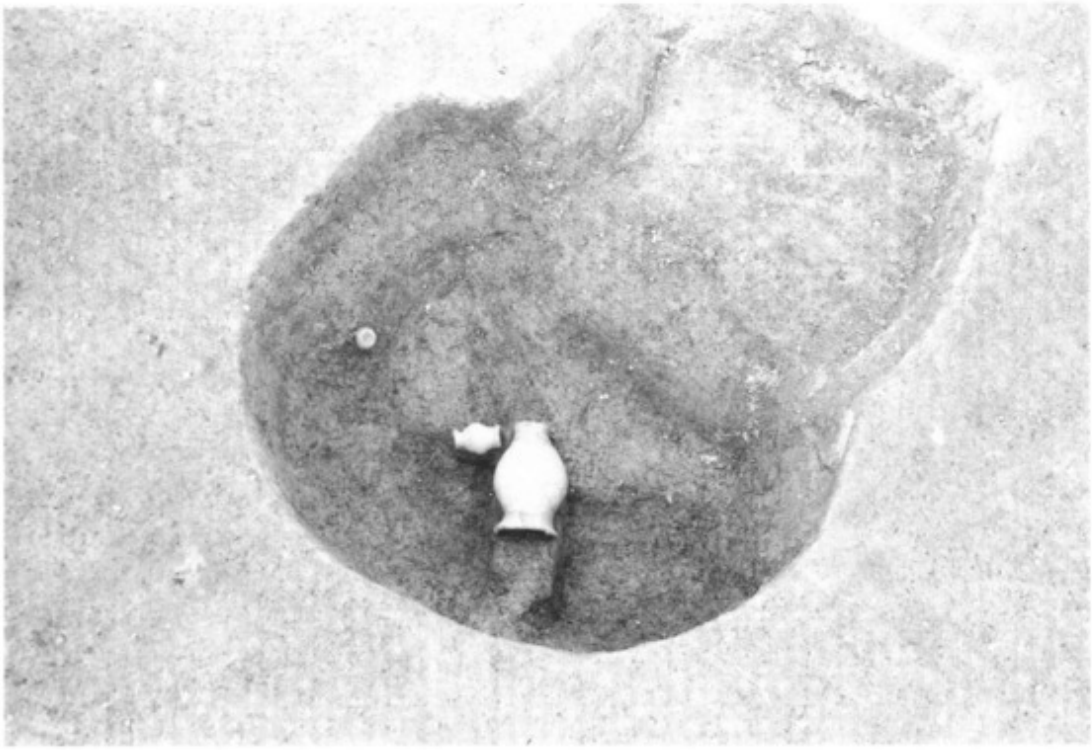
III　庄遺跡（学校施設建設工事）



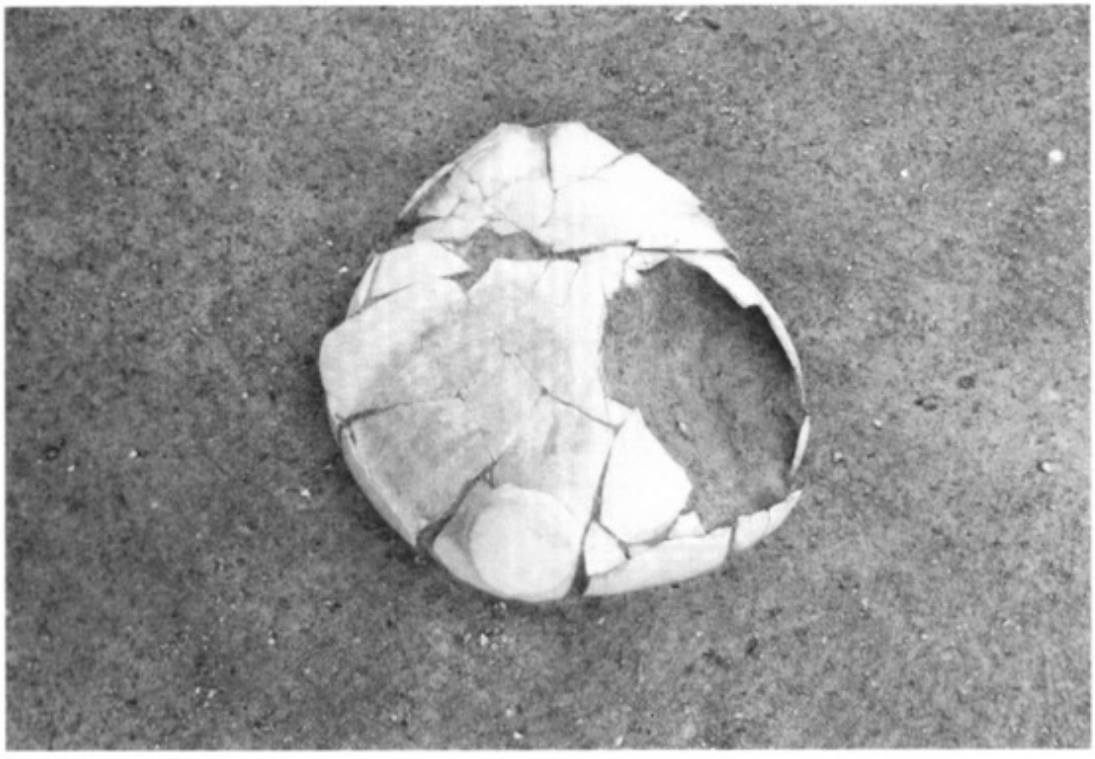
調査地全景　　北より

溝SD02～05検出状況　　西より

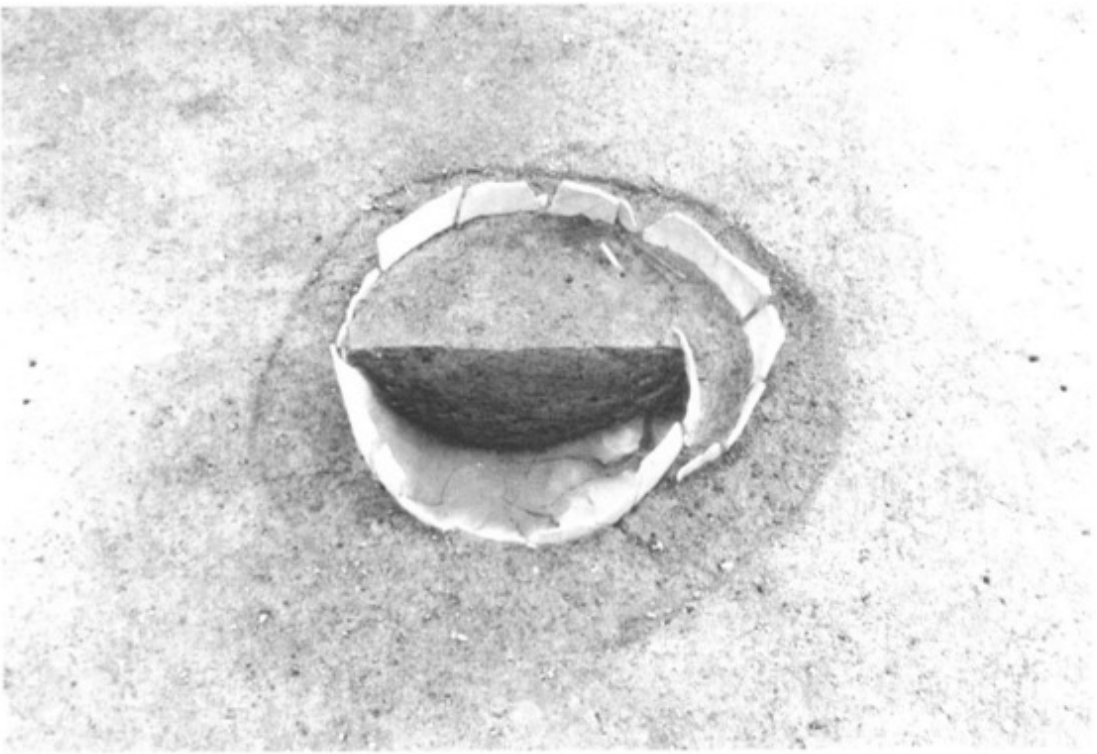
図版2



土壙SK01遺物検出状況　　東より



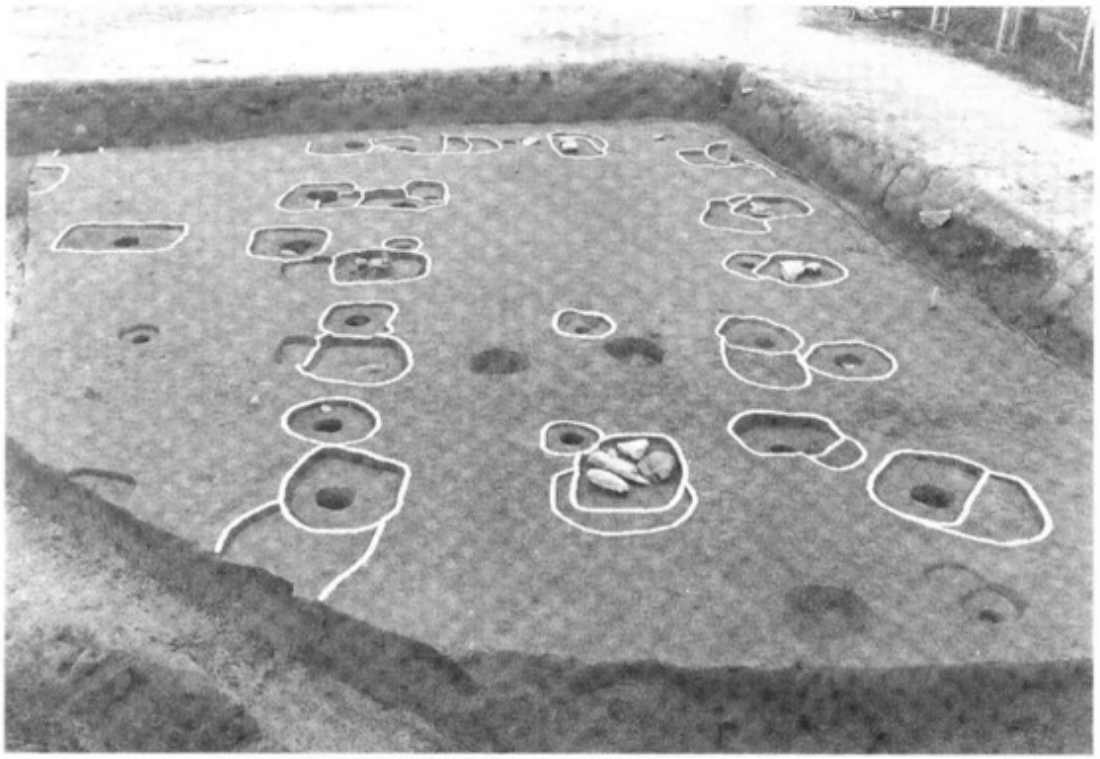
土器棺SI01検出状況　　南より



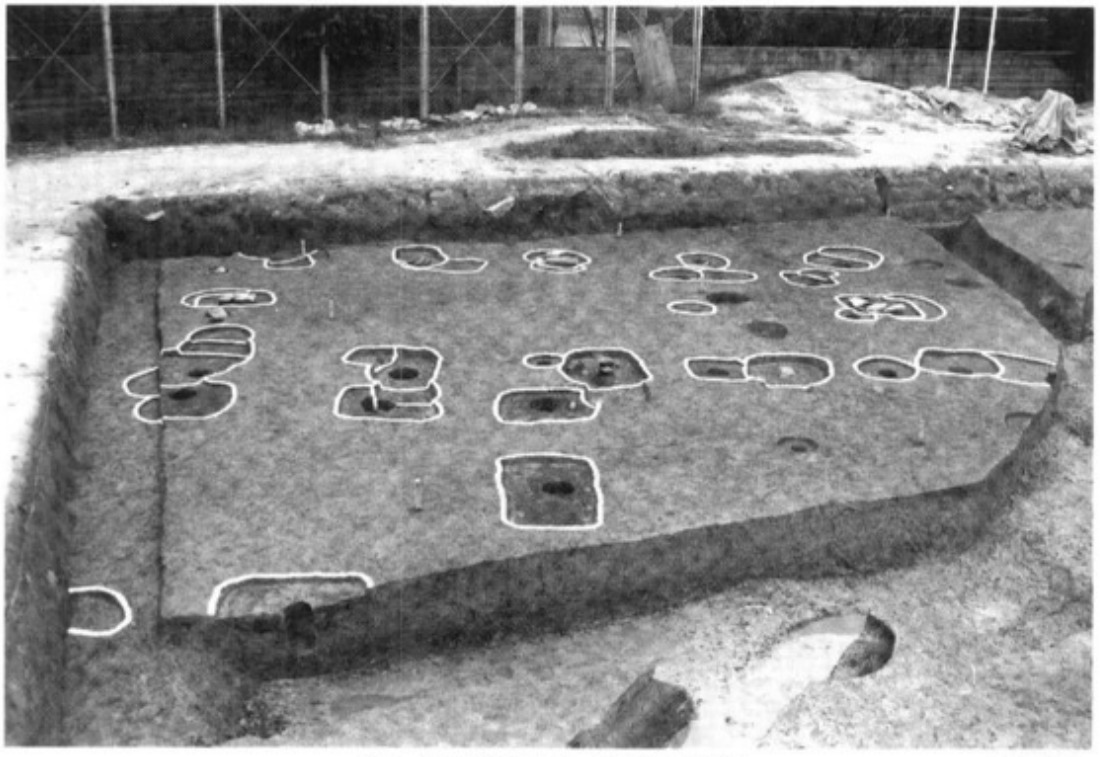
土器棺SI01絶ち割り状況　　東より

土器棺SI01完掘状況　　北より

図版4

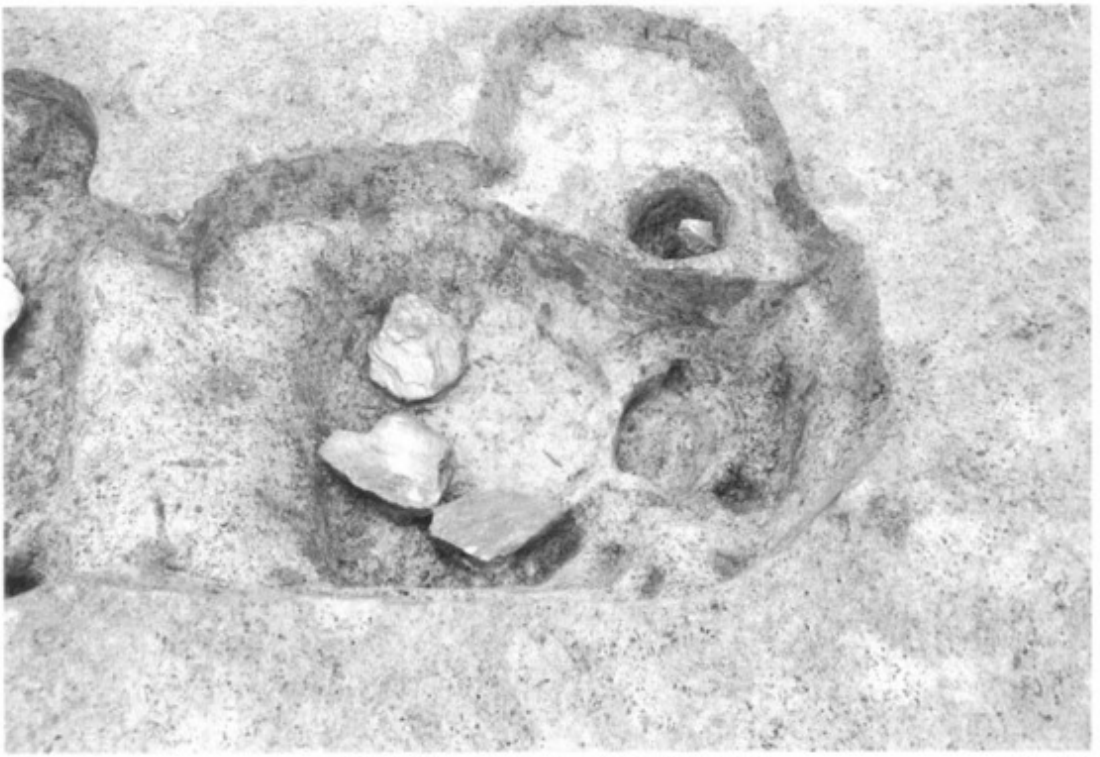


掘立柱建物SB01～03検出状況　南より



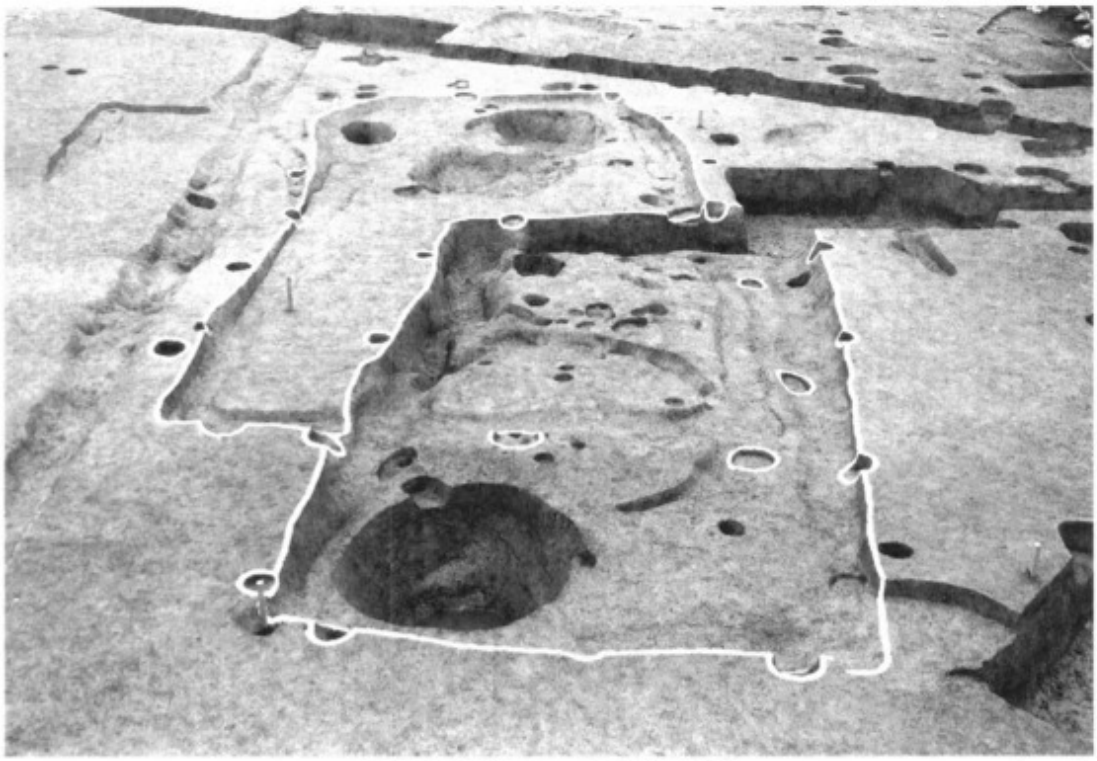
掘立柱建物SB01～03検出状況　東より

堀立柱建物SB03SP09根石検出状況　　西より



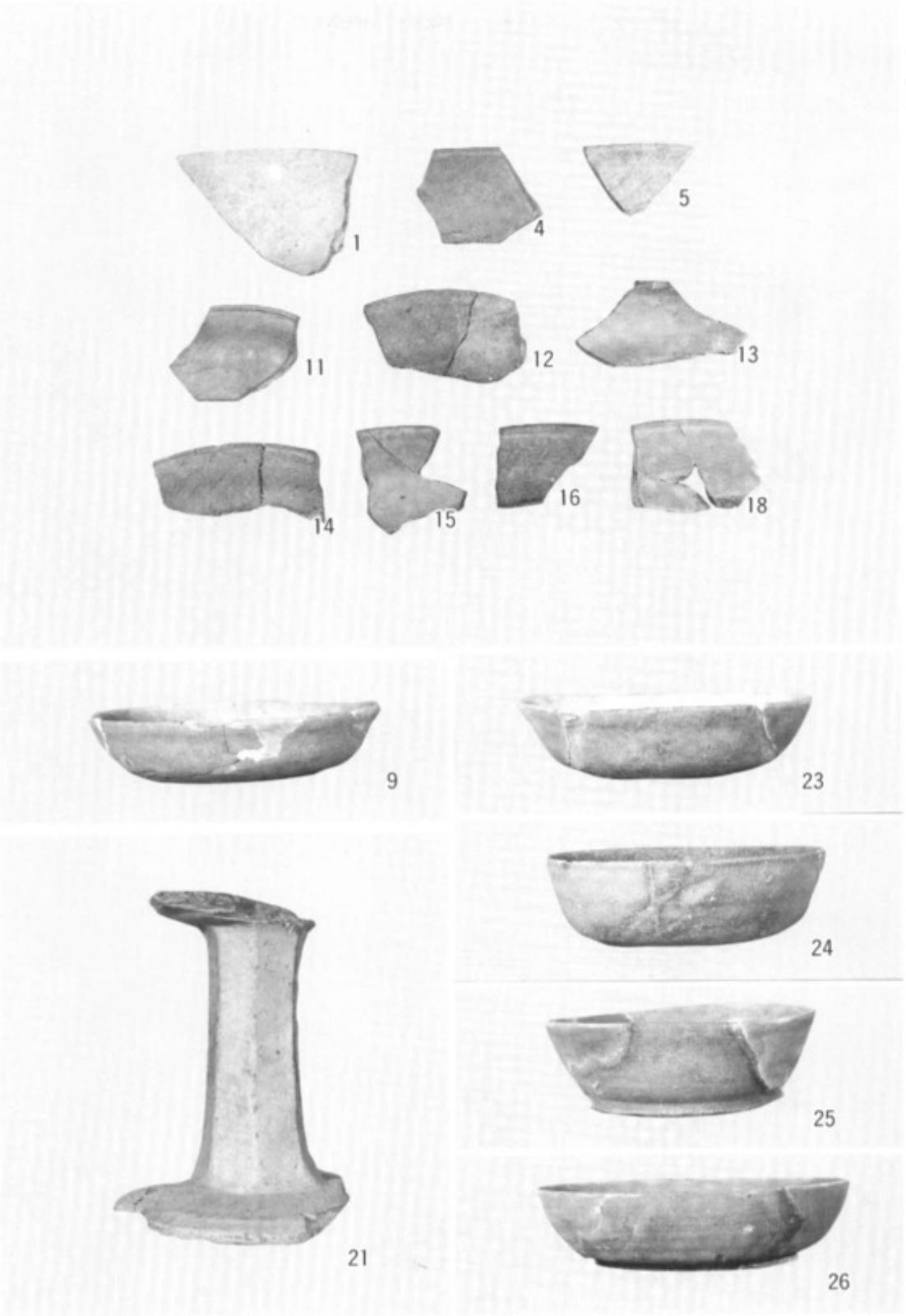
堀立柱建物SB01SP03根石検出状況　　南より

図版6



竪穴住居跡SA01，02検出状況　　東ヨリ

竪穴住居跡SA01，02検出状況　　南西より

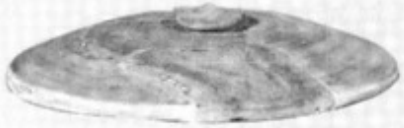


包含層（第1層）出土遺物

図版8

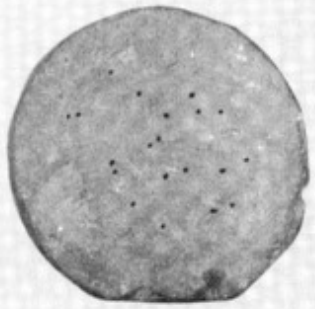
36

42


43

45

51

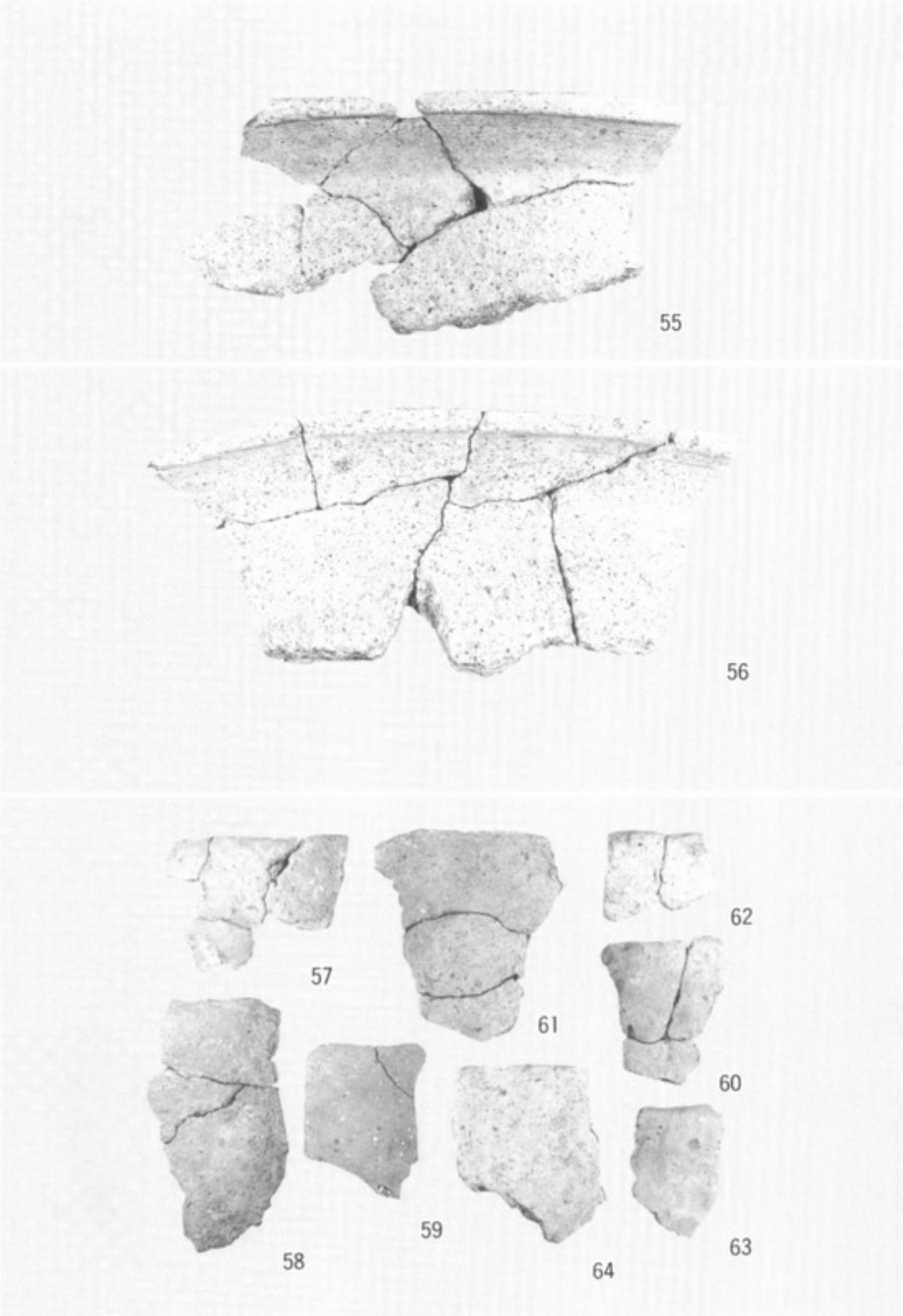


52

53

54

包含層（第1層）出土遺物



包含層（第1層）出土遺物

図版10

1

5

2

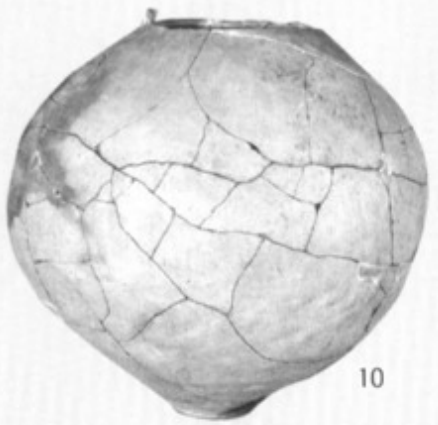
3

7

4

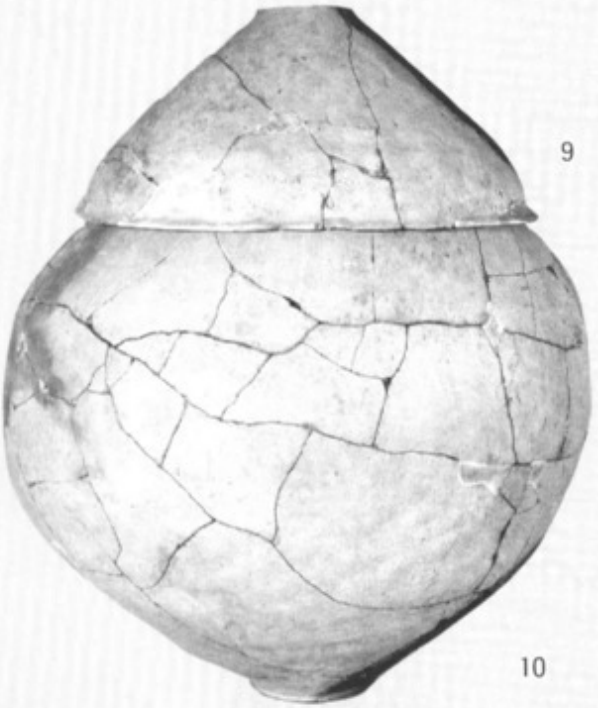
8

溝SD01(1), SD02(7, 8), 土壙SK01(2～4), SK02(5)出土遺物



10

9

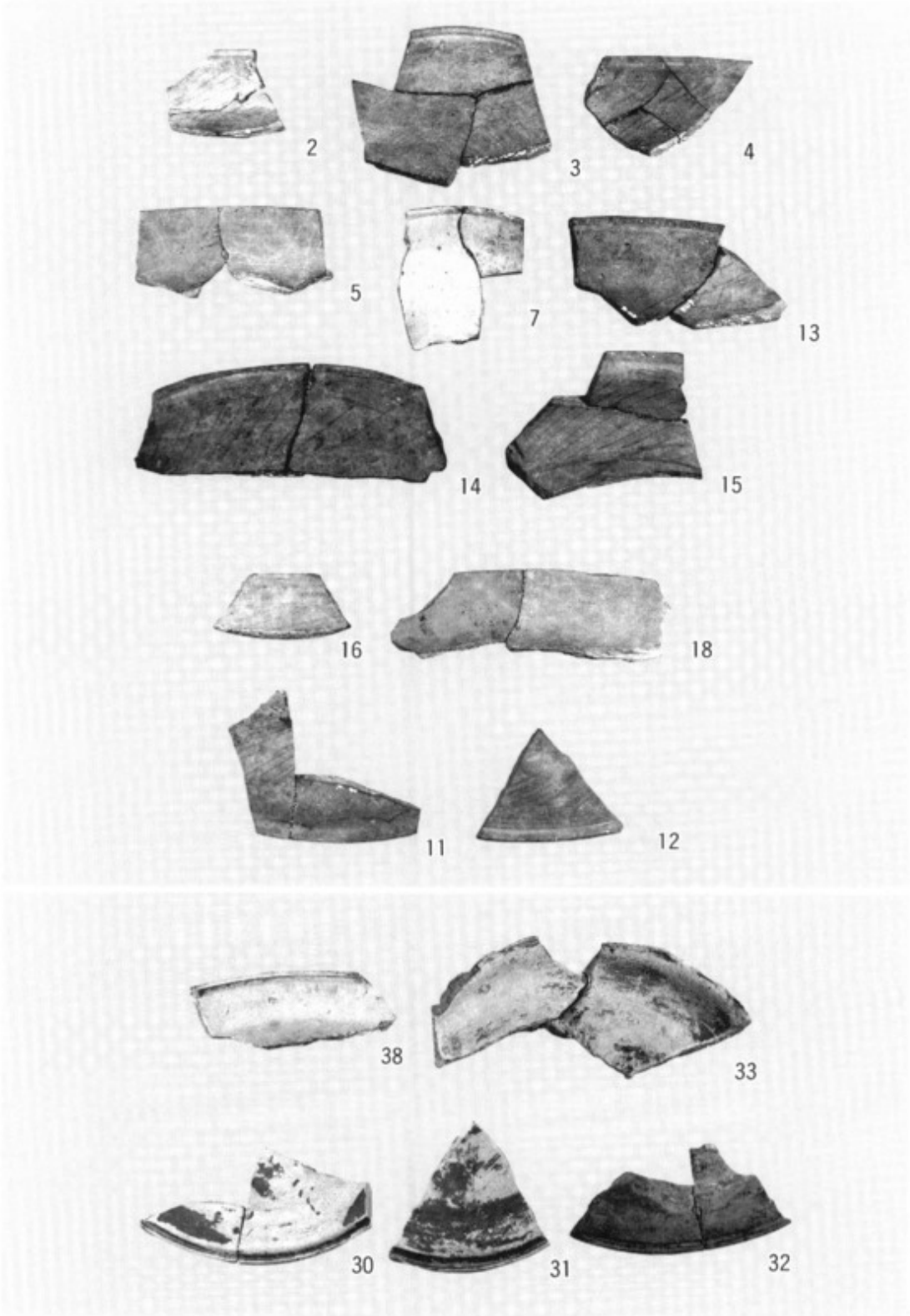


9

10

土器棺SI01出土遺物

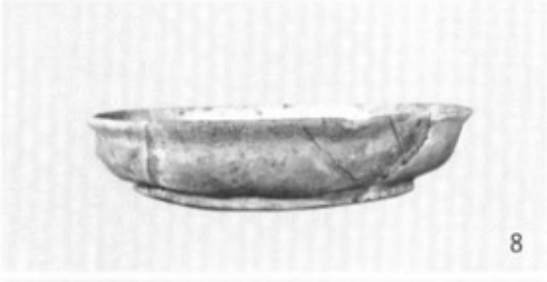
図版12



竪穴住居跡SA01出土遺物

1

6


8

9

10

17

19

20

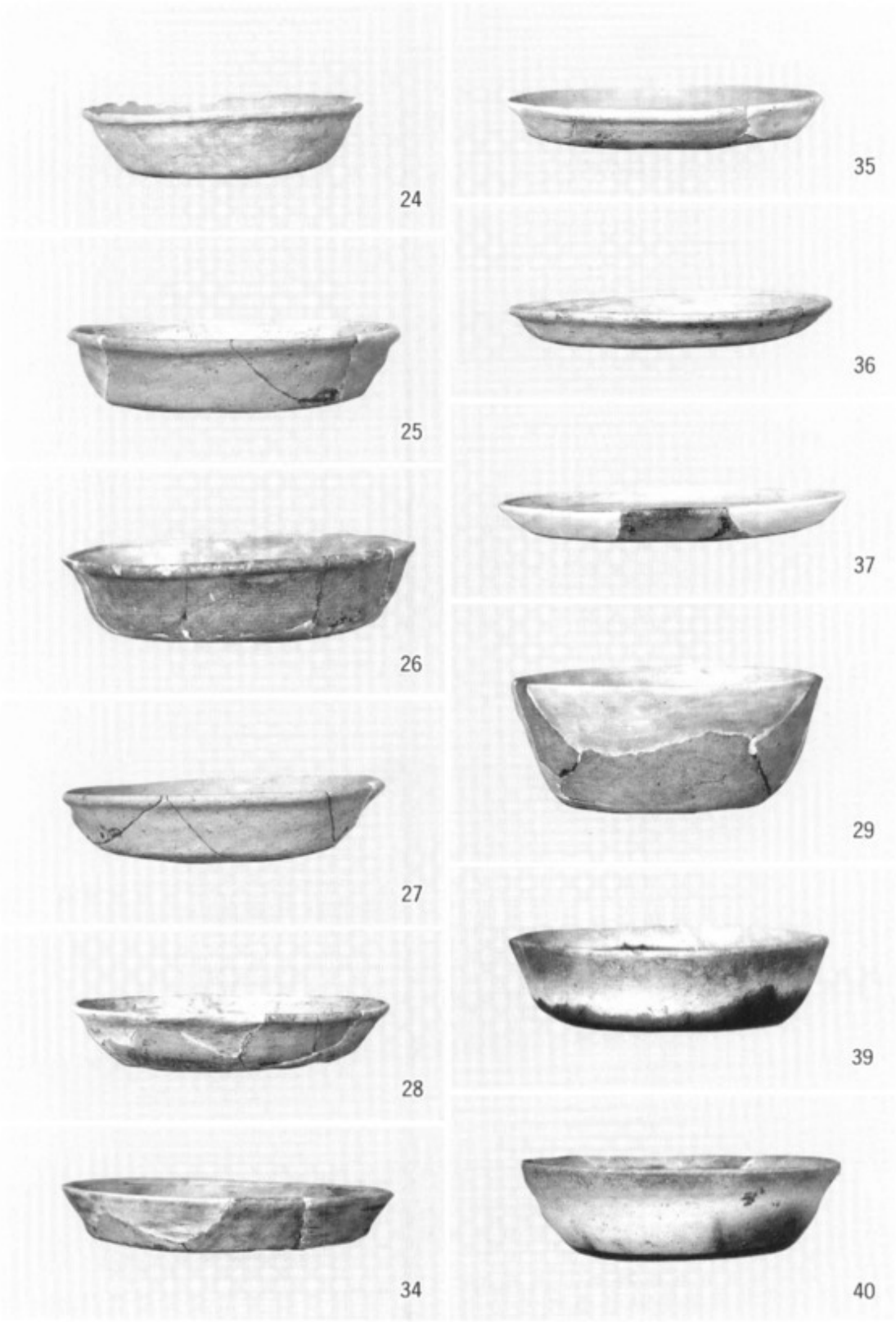
21

22

23

竪穴住居跡SA01出土遺物

図版14



竪穴住居跡SA01出土遺物

41

45

42

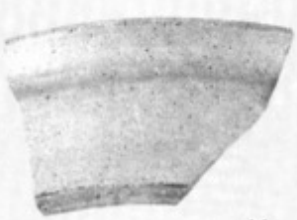
50

43

48

49

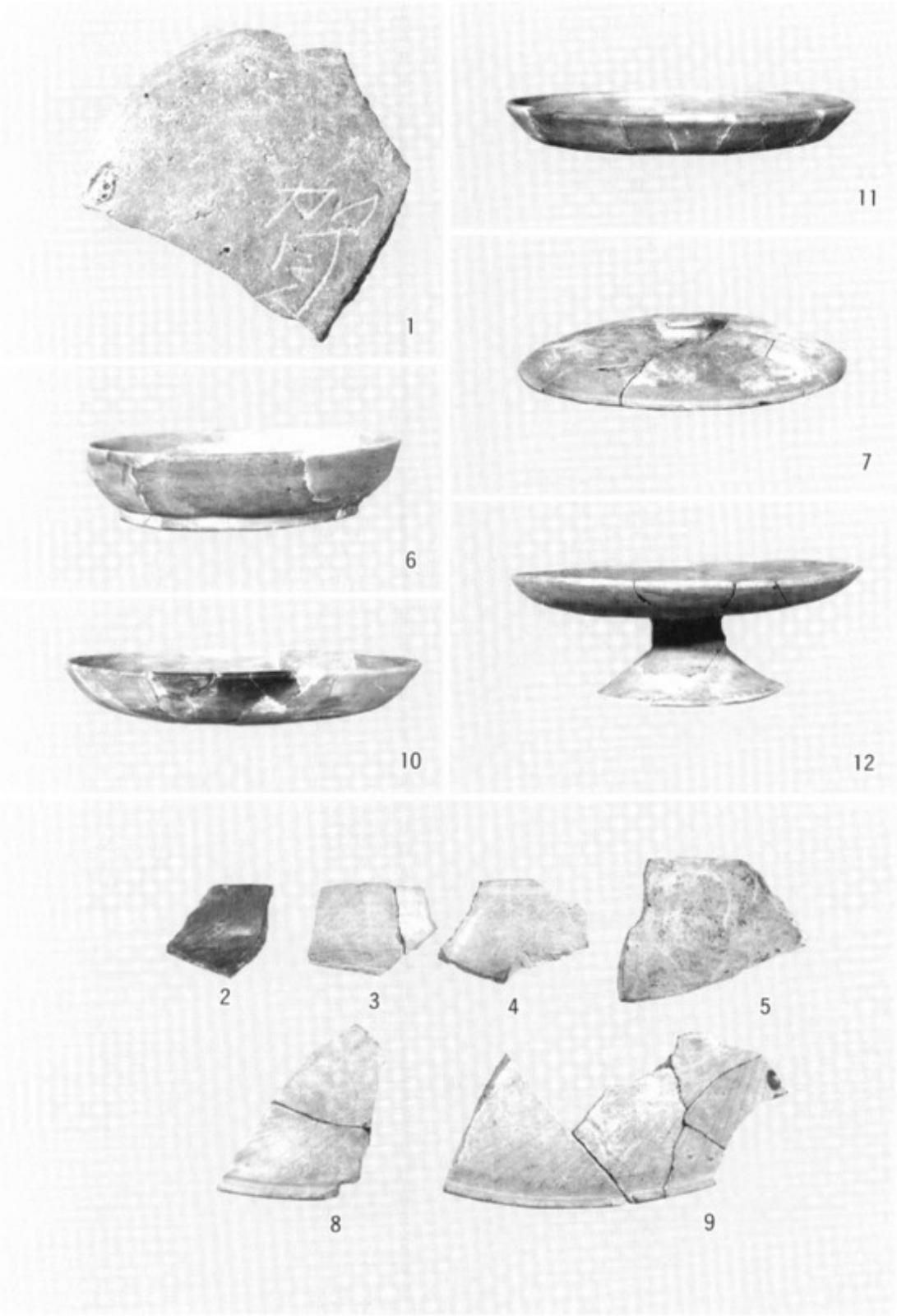
47


44

46

竪穴住居跡SA01出土遺物

図版16



竪穴住居跡SA02出土遺物

13

18

14

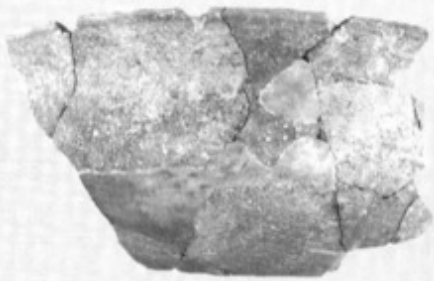
19

15

20

21

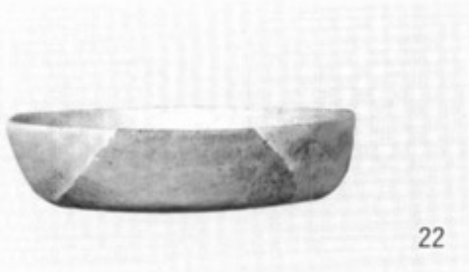
16


29

17

竪穴住居跡SA02出土遺物

図版18

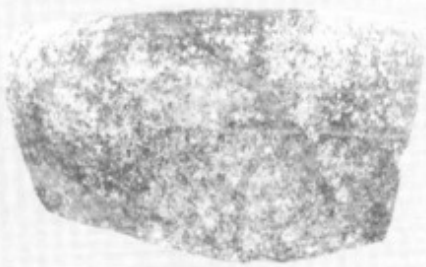

22

26

23

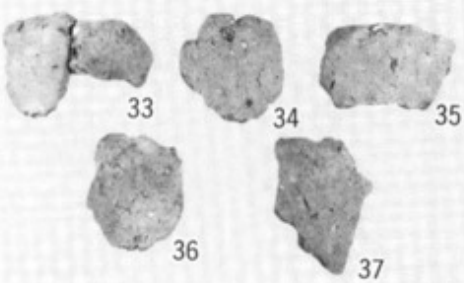
27

24

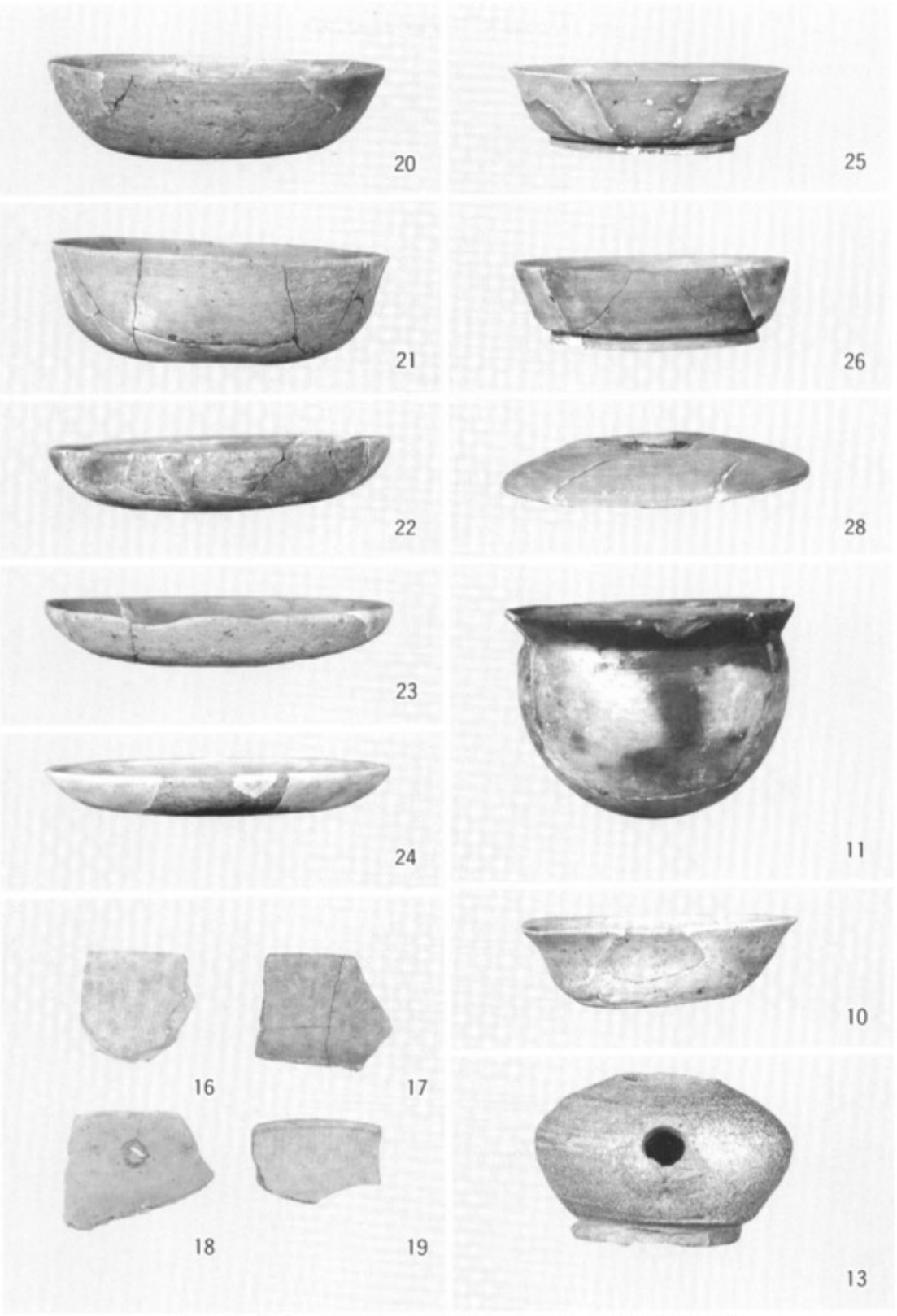

30

31

32

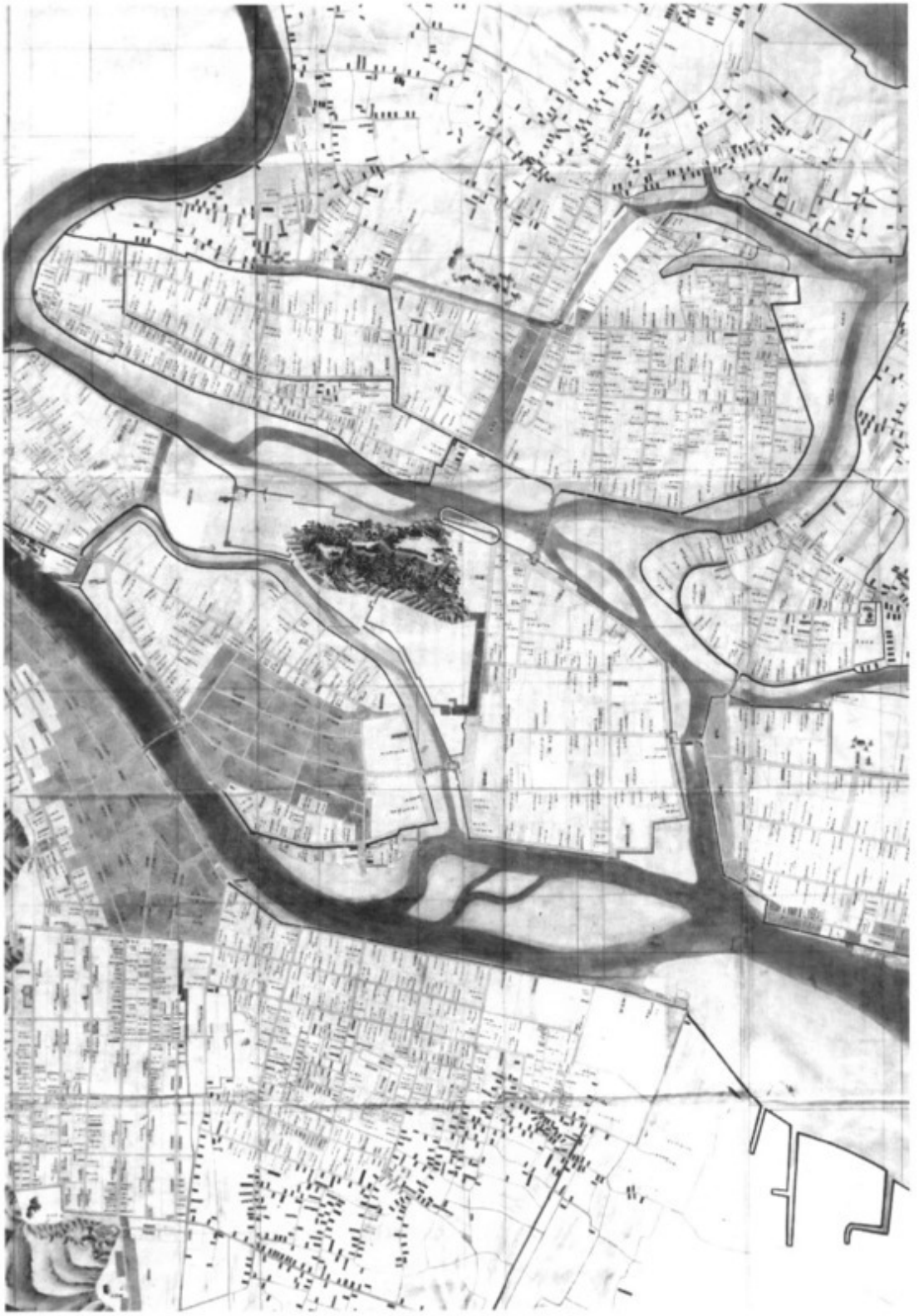


竪穴住居跡SA02出土遺物



土壙SK05(16～26, 28), SK03(13)SP08(10, 11), 出土遺物

Ⅳ　徳島城跡（確認調査）



御山下絵図（部分）寛政8年（1796）　　個人蔵

調査地における徳島城総構の石垣

図版2

御山下島分絵図　徳島（部分）安政年間（1854～1860）　個人蔵

調査地における徳島城総構の石垣

徳島中央公園親水広場整備事業工事区域遠景　　北より

整備が進む徳島中央公園親水広場遠景　　北東より

図版4

第1トレンチ掘削状況　　北東より

第1トレンチ断面　　東より

第１トレンチ石垣石検出状況　南より

第１トレンチ石垣石検出状況　東より